ドラクエ?憑依もの

you

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラクエ？憑依もの

【Ｎコード】
Ｎ９４５０Ｕ

【作者名】
ｙｏｕ

【あらすじ】
ドラクエ？の主人公への憑依もの。
やや呪文チート。独自解釈。一部設定改変。

1

朝、起きたら見知らぬベッドで寝ていた。
何がどうなっているのかわからない。ここはどこなんだろうか？

「リュカ。おはよう。今日中に港に着くそうだから、荷物をまとめておきなさい。終わったら食事を取って、港に着くまで遊んでいなさい」

……誰だ？

「リュカ？どうしたのだ？」

…とりあえず挨拶しておくか。

「おはよう」

「うむ、寝ぼけておるのか？まあいい、荷物をまとめたら食事にしよう」

筋肉質でひげが生えている男。服は布切れといったほうがいい服を着ている。誰だ？っていうかここはどこだ？
とりあえず、男に従って荷物をまとめる。と言っても木刀のような硬さの棒と代わりの服ぐらいしかなかったので、すぐに終わった。
タンスから服を出そうとして、鏡を見たら、鏡に映っている姿はなんと紫色の服、マントみたいな布を着ている、小学生の低学年ぐらいの少年だった。手をひらひらさせてみると、鏡の中の少年も同じように手をひらひらさせた。
…一体何が起きているのだろうか？目覚めたら少年になっていた。

わけがわからない。
昨日はボーナスで買った５００ｍｌで一万円もする高級ワインを飲んで、気分良く寝たはずだ。まさか夢を見ているのか？いやそれにしては現実感がありすぎる。
一体何が起きているんだ！？

「じゃあ、食事にするか」

男が部屋を出て行こうとしたので、俺も慌てて着いていく。とりあえず様子を見よう。男は食事と言っているし、少年になった身体も確かに空腹を訴えている。
部屋を出て、階段を上って外に出た。
どうやらここは船のようだ。それも木でできていて、マストがある。中世時代の船みたいだ。本当にここはどこなんだろうか？

「今日もいい天気だな。嵐が来ると厄介なのだが、ずっと晴れていて助かったな」

男が話しかけてくるが、何を答えれば言いかわからないので、適当に頷いておく。
船の中には水夫達が仕事をしていた。
男についていくと、食堂みたいな場所に着いた。そのまま学食とかの膳を受け取るようなところへ歩いていく。

「やあ」

男がコック？に話しかける。

「おお、お客さん。今日着く港で降りるんだって？港の近くには何もないからな、しっかり食べていけよ」

そう言ってかなりの量のパンとスープの入った器をトレイに置いた。

「これはかたじけない」

「…ありがとうございます」

子供らしくお礼を言っておく。

「礼儀正しいな。サービスしてやるよ」

果物、グレープフルーツを切ったものもついてきた。ラッキーなのか？

木でできた丸いテーブルにトレイを置き、これまた木できたしょぼいイスに座る。

「では、食うか」

「うん」

どうやら『いただきます』は言わないらしい。ここはこれが常識なのか？

考えていても仕方ないので、食べるか。

パンは普通のフランスパンだ。といってもかなり硬い。スープに浸して食べるとやわらかくなるし、味がついてちょうどいい。

スープはたぶん小魚を出しにして塩を入れた簡素な味付けのスープだ。単体だとまずい。中に肉が入っているが、干し肉？なのか普通の肉よりまずい。

グレープフルーツは普通だった。

なんて食事だ。陸につけばこれよりましになるのか？

「さて、では部屋に戻るか」

食べ終わり、トレイを返して、部屋に戻った。

「さて、港に着くまでは遊んでいなさい。ああ、危ないまねはしないようにな」

「うん。わかった」

子供みたいな口調で了解する。

さっきのように甲板に出る。

きょろきょろと船を見回す。何度見ても歴史の教科書に載っているような船だ。本当にここはどこなのだろうか？

端が見えるところまで歩いてみたがかなりの距離があった。大型船なんだろう。

とりあえず、さっきの食堂とは違う扉があったから入ってみる。この身体は子供だから、軽く注意されることはあっても怒られるようなことはないだろう。

ここがどこなのかわからないので、ヒントになりそうなものを探そう。

「おや、坊や。探検かい？」

「うん。港についたら船に乗れなくなっちゃうんだ」

「そうか、あまり散らかしたり、物に触らないでくれよ」

「うん、わかった」

きょろきょろ部屋を見る。どうやら船長室のようだ。地球儀みたいなものや海図みたいなものを記した紙が置いてある。
…本棚がある…本か、見てみよう。
題名が日本語で書いてある。『海の魔物』？読んでみよう。

『しびれくらげについて』

『しびれくらげは海の魔物のなかで弱い部類に入る。しかし侮ってはいけない。奴らの触手にある針には身体を麻痺させる毒が含まれている。できれば魔法で対処したいところだ。特に魔法に強いことはないのでバギやギラなどで充分対処できる』

…これは、ドラクエの魔物について載っているんだ！
まてよ、オープニングが船で、ひげの男…そうだ、ドラクエ？の少年期の始まりと状況が酷似しているんだ！
つまり、俺はドラクエ？の主人公に憑依？したのか…って待て！ドラクエ？の主人公ってことは何年か奴隷にならなきゃいけないのか？しかもヒロインとの間に子供、勇者が出来なきゃこの世界は最後のボスに支配されるのか？
まずい、どうしよう。死んだら教会に戻れるのか？出来ないならものすごく何度が高くなる。それ以前に俺は強くなれるのか？この世界がゲームの通り進むとは限らない。
パパスも途中で死ぬし、いやゲームと違って俺が人質に取られなければ逃げることは出来るんじゃないか？まずはパパスを生かすことを目標に動こう。起きたら夢だったていうのが一番いいんだがなぁ…あっでも後数十年後にはヒロインと結婚できるのか？それは嬉しいかも知れない。皆美人だろうし。俺的にはデボラが好みだ。DSで新追加されたからデボラを選んだけど、あのデレの少なさとデレた時の会話がいい。リアルだと疲れるんだろうけどな。

「！坊や、もうすぐ港に着くぞ。お父さんのところに戻りなさい」

「うん、わかった」

さて、なんでこんなことになったのかわからないが、とりあえず、この世界を見てみるか。

港に着くと、金持ちの人とその娘が二人、デボラとフローラに会った。とはいえ俺はすれ違っただけだが。パパスがフローラに船に乗るときに手を貸していただけだった。

そして、そのまま俺たちは船を降りた。

すぐに港、と言うにはちっぽけだが、の管理人の男とパパスが話しを始めたので、俺は棒、これがひのきの棒なんだろう、を持って素振りをしていた。レベルアップをすれば強くなるのかわからないため、まずはこの身体の調子を試してみた。

子供の体にしてはかなり頑丈だ。うん、これなら戦えるかもしれない。

「リュカ、待たせたな。では村へ行こうか」

「うん」

どうやら、話が終わったらしい。ゲームだと、初戦闘になると途中で参加して来るんだったっけ？細部までは覚えていないな。マップとかなんてもう全部忘れてるなぁ…。

「うむ、出発だ」

パパスを先頭にして歩いていく。まあ当たり前だが。

「む、魔物だ！このあたりの魔物は弱いが、油断するなよ！」

森の中の道とはいえない道みたいなものを歩いていると、青っぽい何かが現れた。

これがスライムか！

ゲームみたいに三角形のような変な形で、弾力があり、飛び跳ねて接近してくる。

「ふん！」

パパスが背に装備していた剣を抜き、飛び跳ねて攻撃してきたスライムを一刀両断にした。

「ぴぴぃ！」

っと、俺のほうにも一匹攻撃してきた。

飛び跳ねるだけの攻撃だから、飛んできたところに、棒を振り下ろす。

「！」

『バキ！』

と言う音とともにスライムは地面に叩きつけられた。が、プルプルして、起き上がろうとしている。まだ息があるようだ。

なら、もう一発！

「は！」

棒を地面に刺すようにして、スライムに突きつけた。するとスライムはそのまま、消えていった。地面には宝石？のようなものが残った。

「うむ、スライム程度なら楽勝か。すごいぞ、さすがわしの息子だ」

これは褒められているのか？まあいい。

「ではゴールドを拾っておこう」

そう言ってパパスは宝石のようなものを拾った。あれがゴールドなのか？貨幣じゃないんだな。

「よし、では行くぞ」

あれから三日ほど歩いた。
ゲームだと、すぐに村に着いたが現実ではそんなことはなかった。食事は干し肉と硬いパンだけだ。近くに川もないので水は使えないのでスープはなしだ。おかげでパンが食べにくかった。
後、レベルについてだが、魔物を倒した後、ファンファーレのようなものが鳴った気がして、パパスに聞いたらレベルアップした証拠だと言われた。今の俺のレベルは3だ。結構魔物と戦った気がするがどうやらゲームのように簡単にはレベルアップしないらしい。
それと魔法についてだが、レベルアップでは覚えられず、勉強して魔法を理解しないと覚えられないそうだ。しかしこれは嬉しい誤算だ。勉強すれば魔法を覚えられる。それこそ上級魔法も子供のうちから使えるようになる可能性がある。今のおれはコ〇ン君状態なのでたぶん理解は早い、はずだ。
そして今日、村に着いた。

「ここがサンタローズの村だ。お前も昔ここにいたことがあるのだが、さすがに覚えてはいないだろうな」

「この村に何のようだ！ってパパスさんかい！？久しぶりだなぁ」

「うむ、どれくらいぶりか…」

「みんな喜ぶぞー、さあ入った入った！」

パパスについて村の中を歩いていく、ゲームのように畑仕事をしている人や、何か作業をしている人がパパスにお帰りとか、一緒に

酒を飲もうとか言ってくる。
そして、そのまま歩いていき井戸が近くにある家に入った。
「おや？どちら様、パパス様、それに坊ちゃん！」
「おお、サンチョ、ただいま」
「おかえりなさいませ。お疲れでしょう。今日はお風呂を焚きましょう。それと精のつく食事にします！」
「うむ、旅の疲れもとれるな。リュカもまだまだ子供だしな。しばらくは村にいることにしたので頼むぞ」
「はい、お任せください」
この日は豪勢な食事。卵や野菜、燻製肉を使った豪勢な食事がでた。それと風呂にも入ることが出来た。どうやら風呂は数日に一回入るものらしい。火はメラでつけるため、簡単に焚けるらしい。
パパスは回復魔法はベホマまで使えるが攻撃魔法はさっぱり使えないらしい。どうやら魔法を覚えるにはある程度才能が必要なようだ。
明日からは洞窟でレベル上げと本を読んで魔法を覚えよう。
たぶん俺は元の世界に戻れない。だからこの世界でがん、ばろ、う…ｚｚｚ……。

2

「バギクロス！」

俺が呪文を唱えると、かまいたちを含んだ突風が木々を切り倒していった。木はそれほど太くなく、斧を使えば切り倒せる程度の木だが、それでも一発で切り倒せた。

村に着いてから、俺は洞窟で魔物と戦ってレベル上げをしつつ、魔法の勉強をしていた。

そんな生活を続けもう十日ほどになる。この世界での生活にもようやく慣れてきたところだ。

今の俺が使える魔法は、

メラ、ヒャド、バギ、バギマ、バギクロス、ホイミ、ベホイミ、スカラ、バイキルト、ピオリム、フバーハ、マホカンタ、リレミトだ。

補助系は才能があるのか、スカラ、バイキルト、ピオリムはすぐに覚えることが出来た。？にはピオリムがなかったような気がするがこの世界ではある。まあすべてゲームと同じ世界ではないのだろう。まだビアンカが村に来ていないし。たしか父親の病気を治すために特別な薬をとりに来たのか？とにかくこの世界は微妙にゲームとは違うのだ。現実になっている時点で当たり前かもしれないが。

攻撃魔法はバギ系は補助系と同じようにすぐに覚えることができた。回復魔法はやや覚えにくく、メラ系はもっと覚えにくい。ヒャド系も同じだ。

文字はなぜか日本語で書かれているから魔法についてはすぐに理解できた。魔法を使う感覚が掴みにくかったが子供の身体だからか、何度か試しているうちに出来るようになり、すぐに慣れた。

ちなみにパパス、サンチョは天才だと言って大喜びしていた。

だが、まだまだだ。

合成魔法や魔法剣も研究すれば使えるかもしれないし、それにマホトーンを使われれば、対抗することも出来るが複数で重ねがけされれば魔法が使えなくなるので、魔法だけではなく身体も鍛えなければならない。

俺のレベルは６だ。しかしレベル６になった後はこのあたりの魔物を倒してもレベルが上りにくくなるらしい。この世界では弱い魔物相手だと経験地が入りにくくなるのだ。だからレベル６になってからは洞窟には行っていない。魔法と、パパスやサンチョに剣術や戦い方を習っている。

パパスはさすがにこの魔物が跋扈する世界の王様だけあって、剣での戦闘はすごく強い。ゲームでも中ボスを倒していたが、それもうなづける強さだ。もしも人質がいなければあの鎌使い…ゲなんとかとも互角に戦えたのではないか？と思っている。

サンチョも王様の護衛兼世話係だけあって、頼れる人だ。パパスが言うには盾役になれるほど耐久力があるそうだ。それに何より料理がうまい。いつもは家事をして、畑を耕して、村の近くに来た魔物を倒してゴールドを得て、と一般の村人なら夫にしたい人Ｎｏ．１といえるほどの甲斐性をもっている。ゲームだとそんな人もいたな程度のキャラクターだったのになぁ。

俺はそんな人たちに鍛えてもらっている。まあさすがにすぐに強くなれるわけではないが、それでもしないよりはましだ。

ちなみに居間の俺の装備は、鋼の細身の剣、革の帽子、服は洞窟に行くときは革の服を着ている。盾は使用していない。重いし、使いづらいから。これが盾装備の適正がないということなのだろう。

と、そろそろ食事の時間だ。この木は後で取りに来よう。薪になるしな。

俺はいつもどおり、村のはずれから家へと戻っていった。

「ただいま」

「お帰りなさい坊ちゃん」

家に帰るといつもどおりにサンチョが出迎えてくれた。
家の中には、いかにもおばちゃんといえる女性と金髪の女の子がいた。
もしかしてこの娘がビアンカなのか？

「おかえり、リュカ。この人は隣の町、アルカパの宿屋をやっているダンカンの奥さんで女将さんだ。そしてこの娘がお子さんのビアンカちゃんだ」

「あら、リュカ君もこんなに大きくなって、時が経つのは早いわねぇ」

「あなたがリュカね。私のこと覚えてる？。昔あなたに会ったことがあるのよ」

「覚えてないよ」

「そうよね。まだ子供だったしね。それより一緒に遊びましょ」

「まだご飯食べていないんだけど」

それにしてもこの子供の話し方にも慣れたもんだなぁ…。

「そうなの？なら食べたら一緒に遊びましょ？」

木を取りに行きたいし、魔法の勉強をしたいが、まあいいか。たまには子供らしく遊ぶのもね。

「いいよ。じゃあご飯食べてくるね」

「わかったわ」

ビアンカは二階へと上がっていった。俺は居間で、パパスと女将さんが世間話をしている横でご飯を食べる。

いつもながらおいしい。

献立は、パンは必ず出る。米はまったく出ない。それと肉、野菜、魚、卵などを使ったおかずだ。飲み物は麦茶に似たお茶のみだ。暑い日はヒャドで氷を出して冷やすのがこの世界での常識だ。逆に火はメラでつける。初級の魔法を使える人は多い。戦闘で使えるほどの威力を出せる人は少ないが。

食事や家など、元の世界に比べるとかなり質素だがそれでも慣れた。この身体が慣れていたからかもしれないが。それに食事は出来立ての郷土料理みたいでおいしいし、雰囲気もあるし。これはサンチョに感謝だな。

「ごちそうさま」

いつもより急いで食べて、二階へ上がっていく。

「あら、早かったのね。じゃあ、遊びましょう」
「何をするの？村の中でも探検する？」
ゲームだと本を読んでいたが、ここではどうだろう？
「そうね…そうしましょう」
「じゃあ、案内するよ」
「行きましょう」
村の中を案内する。洞窟にある道具屋、畑、鳥小屋、井戸、宿屋、地下の酒場、武器や、門。一通り案内した。
「ねぇ、あっちには何があるの？」
洞窟があるほうを指差して、ビアンカが尋ねてきた。
どうするかな？まあ正直に言ってもいいか。洞窟の魔物は俺なら楽勝だし。バギマで瞬殺だしな。あまり多くは使えないけど。それにリレミトもあるし。
「洞窟があるんだ。川から水が流れているよ。昔は炭鉱、金属が採れるところだったんだって」
「へえ、おもしろそうね。入れるの？」
「うん。魔物もいるけど弱いし」

「なら、行きましょう」

「いいよ」

見張り番の人に挨拶して洞窟に入る。
ビアンカはキョロキョロと中を見ている。

「へえ、こんなところがあったんだ」

「僕は行ったことがないけど、この川の向こうから奥にいけるらしいんだ。泳いではいけないし、ボートは大人が管理しているんだよ」

「行ってみたいけど、さすがに無理そうね」

と、話していたら魔物が現れた。スライムが六匹か。

「バギ」

手をかざし、呪文を唱える。瞬間風がスライム達を吹き飛ばし、同時に切り傷を作った。
すぐにスライムの死骸はゴールドになった。

「あれ？もしかして魔物が出たの？」

「そうだよ」

「私だって戦えるのに」

ビアンカはダガーのようなナイフを持っているし、来ている服も布が厚い服だ。ここらの魔物相手なら逃げるだけなら出来るだろう

し、この洞窟の魔物相手なら連戦や大群に囲まれない限りは勝てるだろう。

「じゃあ、次からは武器で戦うよ」

「そうしましょ」

ビアンカは魔法が使えるのだろうか？聞いてみるか。

「ビアンカは魔法、使えるの？」

「メラとギラだけなら」

レベルはどうなんだろう。

「レベルは？」

「4よ。たまに外に行くときにはお父さんやお母さんと一緒に魔物と戦うのよ」

なるほど、たまにって本当にたまになんだろうな。洞窟で数日戦い続けた俺が6になってるぐらいだしな。

「リュカはどうなの？」

「6だよ」

「私より大きい。ずるい」

子供だな。まあ当たり前か。俺が異常なだけだしな。

「それはしょうがないよ。父さんと旅をしていたし」

でもなんでレベル1なんだ？俺になったからなのか？それともそれまでは戦いも避けていたのか？不明だな。

「あ！魔物よ！」

ドラキー、3匹か。雑魚だな。

「よーし、いくわよぉ！えい！」

ドラキーは150CMぐらいの宙を浮いて、尻尾や体当たりで攻撃してくる。ビアンカは攻撃してくるドラキーにナイフを切り上げた。翼？羽？の片方が切られドラキーは地に落ちていく。がまだ死んでいない。

「とどめよ！」

ビアンカが靴でドラキーを踏んづけると、ゴールドに変わった。

「ふう、楽勝ね」

「じゃあ、次は僕の番だね。いくよ！」

鋼の細身の剣を抜いて右手で持ち、横切りで宙にいるドラキーを斬る。レベルと修行の成果があったのか、真っ二つに斬れた。腰を使い逆への返しでもう一匹を斬る。

『ピギュー！』

悲鳴をあげドラキーは死んでいき、ゴールドに変わった。

「へえ、リュカって見かけによらず強いのね」

パッと見ただの子供だしな。中身は二十代後半なんだけど。

「まあね」

その後も俺達はたびたび襲ってくる魔物を倒しつつ洞窟を隅々まで探検した。ゲームであったようなイベントは起きなかった。

洞窟から出て家に戻ると、薬を受け取ったらしい女将さんが待っていた。

「ビアンカ、帰るわよ」

「お薬は？」

「ちゃんと作ってもらったよ」

この世界の薬草はすごい。草とかの生命力が元の世界とは違うのか薬草を煎じて飲んだり、塗ったりするだけである程度の傷は直る。どうやら特殊な配合なら病気も治るらしい。まさにＹＡＫＵＳＯＵだな。

「わかった。じゃあ、またね。リュカ」

「うん。またね」

「おっと、もうすぐ夜になるし、急ぐのはわかるが、危険だ。私が送っていこう。リュカも来るか？」

「うん、行く」

当然だ。強くなるためにもっと強い魔物と戦いたいんだ、俺は。町に着いたら、ゲームで幽霊退治をしにいく城とかに行きたい。レベル上げが出来るだろうからな。

「よし、すぐに支度してくるので待っていてくれ」

「パパスさん、ありがとうね」

サンチョに手伝ってもらいサッと仕度した。さすがサンチョだ仕事が早いな。その内サンチョが一日でやってくれましたとか言ってしまうかもしれない。

「よし、では行きましょう」

パパスを先頭にして、女将さんが真ん中、俺とビアンカが後ろに

二人という隊列で町へ出発した。

3

「バギマ」

手をかざし呪文を唱える。それだけで魔物達の大半は死に絶えた。

「ふん！」

残りの魔物の大半をパパスが剣で一撃で葬っていき、ビアンカと女将さんも少しだけだが魔物を倒す。

魔物の群れに襲撃されたが、数秒で戦闘は終わった。

「ふう、終わりか。リュカも強くなったものだ。魔法だけなら一流を名乗ってもいいだろうな」

確かにバギ系は極めたし、補助もアップ系は使える。回復もベホイミまでは使えるしな。

もっともまだまだＭＰが低いのか、使いすぎればすぐにエネルギー切れになる。それでも中身が俺だからかＭＰはかなり高めになっているっぽい。たぶんゲームの主人公よりは同じレベルでも倍近くあるだろう。

俺のレベルは８になった。

そして例のごとくこのあたりの魔物だとレベルを上げられるのは難しくなってきた。

今日は村を出て５日目だ。

「では、行くか」

ゴールドを拾い終わったパパスが歩き出し、村を出てからずっと

同じだった隊列で歩いていく。

「もうすぐにつくわよ」

「そうなの？」

「うん、ほら見えてきた。」

ビアンカが指差した方向には、柵に囲まれた町が見えた。ゲームと違いかなりの数の民家がある。おそらく数百人～数千人くらいの規模だろう。

「よし、もう一息だ。ここまでくれば魔物も現れないだろう」

町の近くだし、村でも鋼装備の武装した警備の人間が常にいたから、町の警備隊ならかなりの数がいるはずだ。ここらの弱い魔物はまず近づかないだろう。

数十分後、アルカパの町に着いた。

あの後、寝込んでいるダンカンさんに薬を飲ませ、病状が一気に落ち着いていくのを見届けた後、女将さんが送ってもらったお礼に

泊まってくれと言い、パパスも断れず、町に泊まることになった。
ゲームだとパパスに病気がうつるのだが、この世界では違った。
なんと、ゲームのイベントがあった、あのレヌール城に巣食うゴースト退治を町長に頼まれたのだ。
たしかにパパスなら楽勝だろう。この男に正面から戦って勝てる奴はそうはいない。
そんなわけで、明後日にレヌール城のゴースト退治に行くことになった。町の警備員からも討伐隊を出して、パパスが一緒についていく形になる。ちなみに俺も無理を言ってついて行かせて貰うことになった。
これでレベル上げが出来る。
ビアンカもついて行くと言ったのだが、女将さんによって却下された。
その後で、ビアンカがぐずったので、俺は何かお土産を持ってくると約束してしまった。

二日後、討伐隊は出発した。
その五日後、レヌール城に着いた討伐隊はレヌール城に突入しようとしていた。
やっぱり現実だと城までの道のりは遠かった。

「では、これよりゴースト退治を行う。討伐隊の半数は入り口付近で待機。残りの半数は私を先頭に城に突入する。魔物を統率している奴がいるはずだからそいつを倒すことが目標だ。傷ついた者は無理せず薬草を使え。限界になったやつがいれば、待機組みと後退させる。では行くぞ」

さすがに統率力があるなパパスは。王様ってだけはある。村人に慕われるのもうなづける。
魔物という脅威があるので強い奴はそれだけでカリスマになる。格好はアレだがパパスは常に落ち着いているし、ならず者とは違うとすぐにわかる。この世界ではすごくいい男なのだ。
この世界では元の世界のように容姿がいいとだけでは男はモテない。とにかく現実的だ。まあ命のやり取りが身近にあるからそうなるのは当たり前か。
ゲームで主人公がフローラを選んだら、フローラの幼馴染がフラることになるのはそれが原因だろう。
ビアンカやデボラを選ぶと、後に結婚するが、もしかしたらフローラに他に男の知り合いがいないだけで消去法で選ばれただけなのかもしれない。哀れだ…。
ゲームで金持ちがフローラの婿は強い奴でないと駄目だと思っていたのは、あの家の事情もあるがこの世界での常識なのだろうな。まずは家族を守れるくらいに強い奴か、財力で兵士を雇える奴。
これがこの世界でモテる要素だ。つまりはパパスすげえってことだ。

「リュカ、呆とするな。たしかにお前は強いが、油断はするなよ」

「わかった」

おっと、確かに油断は駄目だな。このあたりの魔物でも奇襲されて、複数にたこ殴りにされたらきついし。

「っと言ってるそばから魔物か。いくぞ！」

パパスが切り込んでいき、討伐隊が続く。さすがにこの混戦では

バギ系はきついな。味方に当たってしまう。ゲームと違い魔法は敵味方識別なんてしてくれないのだ。
しかたない。

「バイキルト、スカラ、ピオリム」

ちなみに補助系の魔法は全体にかけるとかは出来ない。一人ひとりにかけることになっている。さすがに討伐隊全員にはかけられないので、自分だけにかけておく。
パパス？パパスは強すぎて補助魔法を使う必要がない。

「よし…せい！」

鋼の細身の剣を抜いて、斬りつけていく。補助系の魔法は数分間は持つので、一回の戦闘では一度かければ二度かけるようなことはない。凍てつく波動を使う敵は魔界の魔物ぐらいだし。
なので防御を無視してとにかくスパスパと魔物斬っていく。

「弱いな…」

つい、呟いてしまう。俺がチートしているからだろう、敵が弱い。パパスもいるし、人数も多いのですぐに戦闘が終わってしまった。現実はこんなものだ。ゲームみたいに一回一回の戦闘で戦術とか考えたり、苦戦するようなことがあればこの世界だとすぐに全滅してしまうだろう。

「ふむ、これならすぐに終わるか」

パパスは討伐隊が順調に魔物を倒していったのを見て、そう呟いた。

パパスはまったくの余裕だな。しかも周りを見てうまくフォローしていたし。
グランバニアはここと比べ物にならない強い魔物が出るはずだから、王様も強くないと駄目なんだよなぁ。パパスはきっと軍を率いてそんな魔物と戦ったこともあるんだろう。経験が違いすぎる。

パパスの言ったとおり、魔物を倒しつつ移動していったらすぐにボスの処に着いた。
大きい、１８０ＣＭはありそうなろうそくが王座に踏ん反りかっている。こいつがボスだろう。
ゲームと同じ敵なのだろうか？こんなところの敵の姿なんてもう覚えていないぞ。まあどうでもいいか弱そうだし。

「人間がここまで来るとな、だがここまでだ。お前達も亡霊となって俺に従うのだ！ふぅぅぅぅ！」

ボスが息を吹くと、火になって回りを襲った。まずい！

「フバーハ！」

一種の結界魔法、フバーハを唱える。これは自分を中心に空気の層で結界を張り、バギやメラ、ブレス系の攻撃をある程度防ぎ緩和する魔法だ。ゲームとほぼ同じ効果だ。術者の力量で防げる値は変わってくる。ちなみにチートな俺が使うと大半のブレス攻撃を防いでしまう威力がある。

「むう、こいつはわたしが戦ったほうがいいな」

待った！

「僕に戦わせてよ」

「リュカ…いいだろう。お前なら勝てるだろう。ただし、わたしが無理だと感じたらすぐに加勢するからな」

「うん。わかった」

さて、やるか。

「ガハハハハ、ガキが戦うのか」

確かに見た目はガキだが、中身は大人なんだよ。

さて、どう倒すか。普通に武器で戦うか？いや、俺より前方に人がいないからアレで終わらせるか。

「バギクロス！」

手をかざし呪文を唱えると、ボスを真っ二つどころかずたずたに切り裂き、しかもボスの周囲にいた魔物を吹き飛ばしたり、ボス同様に無残に切り刻み、数瞬後、魔物の大半が死に絶えた。

終わってみれば楽勝だった。

ボスだって言うからもっと強いかと思っていたが、一撃か。このあたりの魔物じゃもう相手にならないな。持久戦以外なら楽勝だな。

「やはり、私とマーサの息子だ。天才だ」

パパスは震えて喜んでいた。
さて、ビアンカに約束した土産は…これは？銀細工の見事なカップとティーポットとトレイだ。これを持っていこう。
あ、これは…もしかしてゴールドオーブか？
金色に光る珠が王座に置いてあった。ついでだから貰っておこう。いずれ必要になるはずだし。ネコババだが、これは世界を守るためにも必要なことだからな。

町に戻り、町長に謝礼金をいくらか貰い、俺達は宿屋に戻った。
ダンカンさんはどうやら起き上がれるようになったようで、俺達を出迎えてくれた。
「パパスさん。疲れているだろうし、明日も泊まっていっておくれよ」
「そうだ。せっかく久しぶりに会えたから、話もしたいしな。それに今日の幽霊退治についても聞きたい」
「そう言われたら断れないな。なら世話になる」
「よーし、明日はわたしが豪勢な料理を作るぞ。期待していてくれ」

ダンカンの宿屋はゲームだとは小さく感じる宿屋だったが、現実だと全然違う。すごく大きい。
部屋もいっぱいあるし、行商人とかが何人も泊まっている。俺達が今使わせてもらっている部屋なんて、それこそ高級旅館のような感じだ。
これだけの規模だ。繁盛しているのだろうな。

「リュカ、お帰り」

「ビアンカ、ただいま」

俺達が帰ってきたことに気がついたのか、ビアンカが階段を下りてきた。
ああ、そうだ。お土産を渡すか。

「はい、おみやげ」

薬草とか入れる荷物用の袋から銀細工の見事なカップとティーポットとトレイを出す。

「わぁー綺麗…これ貰っていいの？」

「うん」

「えへへへ、リュカありがとね」

『チュ』

あ、笑った顔可愛いかも…て俺はロリコンじゃない！

まさか子供の身体だから精神が引きずられているのか？
でもまあこのまま歳を取れば肉体年齢的には問題ないし……深くは考えないようにしよう。
歳を取れば普通に同年代とか年上の人とかに眼がいくようになるだろ。中の人の嗜好的に考えて。おっぱい。

幽霊退治が終わってから、二日間ダンカンの宿屋に泊まった後、俺はパパスとともにアルカパの村に戻っていった。
出発のときにビアンカにまた遊びに来てねと言われたので、絶対に行くよ、と約束した。そのとき、リボンを貰った…あれ？ベビーパンサーは？
……まあいっか。人間だけでも充分戦闘ができるだろう。パパスとか強いし、ゲームのように死ななければ戦力になってくれるはず。あとはサンチョにヒロイン、子供とか。それに奴隷をさらってくる奴らの影響を少なくすれば兵士とか増えるだろうし、最悪の場合装備と数で押せば最後のボスも倒せるんじゃないか？

まあ、今はまだ考える時期じゃないな。今は俺自身が強くなることを考えるか。

4

「バ・ギ・ク・ロ・ス！……フィンガー・ブレイク・ボール！」

片手に、５本の指それぞれに１つずつバギクロスを停滞させ、拳を握って圧縮し、そして前方へ圧縮した魔力を開放する。

放たれた風の弾丸は進路上の木を抉り取りながら進んでいき、途中で消えた。

「はぁはぁはぁ」

フィンガー・ブレイク・ボール。ダイの大冒険であった魔法、フィンガー・フレア・ボムズを真似て作った魔法だ。メラゾーマではなく、バギクロスでフィンガー・フレア・ボムズを行うだけ。とは言ってもすごく難しい。最初は制御に失敗して、瀕死になった。サンチョが偶然魔法の修行を見に来ていて、パパスを呼んでくれなければ死んでいたかもしれない。

そのおかげでこの魔法の練習を行うときはパパスかサンチョが傍にいるときだけしか行えない。今もパパスが近くで練習を見ている。

「この威力、すごいな。大魔道士を名乗ってもいいほどだ」

「でも攻撃魔法はバギ系しか使えないよ。メラ、ヒャド、イオはこれ以上はがんばればどうにかなるかもしれないけど、すごく時間がかかると思う」

村に戻ってきてから、イオも覚えたが、メラ、ヒャド、イオ系の呪文はこれ以上の中級、上級の呪文になると失敗してしまう。才能がないということなのだろう。魔法は才能がないと全く使えないの

だ。初級が使えるのでがんばればいつかはどうにかなるが、コ〇ン君状態のチートを使っても使えないということはこれ以上伸ばすことは時間の無駄だと判断した。
そのためのフィンガー・ブレイク・ボールだ。これなら上級クラスの魔物だって一撃で倒せるはずだ。
後、ベホマは何とか使えるようになった。

「はぁはぁはぁ」

しかし、すごく疲れる。純粋にバギクロス５発使うよりもＭＰを消費するし、なんというか体力も使っている感じがする。ダイの大冒険で禁呪だといわれていたほどのことはある。まぁあれほど負担にはならない。せいぜい使ったら、その一日魔力が回復しなくなるくらいだ。次の日には回復するし、そこまでの負担ではない。これは才能があるのか、この世界ではこうなのか不明だが、負担がないのだから気にしない。

「疲れただろう。今日はこれで終わりだ。家に戻って休もうか」

「うん。そうする」

本を読んで、もっと魔法の理論を知りたいし。ひとまず切り札的なものが完成したし、明日からは剣術とかに力を入れてみようかな。
あ、レベルは１１になりました。アルカパの町からサンタローズの村に戻ってきて、え～と、１０日ちょい経っている。レヌール城で１０レベルになり、村の洞窟で雑魚と戦い続け、１レベル上がって１１になった。
洞窟での戦いは剣術を試すために戦っていたのだが、帰り道にも魔物と戦ったし、さらに洞窟で戦い続けたから上がったんだろう。たぶん洞窟でレベルをもう１つ上げようとしたら３０日～４０日近

くかかるはずだ。さすがにそれは無駄だしなぁ。次は魔法剣でも試してみるかな？
ま、今日はさすがに疲れたし、本でも読んで休んでいよう。

フィンガー・ブレイク・ボールを制御できるようになってから数日後、パパスに兵士が会いに来た。ラインハットの国王がパパスをヘンリーの教育係にしたいらしい。
1日考えた後、パパスはそれを了承した。
そして今日、俺はパパスと一緒にラインハットへ行くことになった。
運命の始まりだ……あれ、妖精の国は？うーん、もしかしたら中の人が大人だから見えなかったのかもしれない。とはいっても確認のしようがないから、まぁ気にしないでおこう。
さて、パパスにはなんとしても生き残ってもらう。この世界の平和のためと俺の安息のために。そういえば母親も生きているし、二

人が生きて再会するところが見れるかもしれない。スーファミで？をやった当時はパパスを助けられるかもと考えてレベルを無駄に上げて鎌使いに挑んだことがあったなぁ。
俺がこんなんになっちゃたし、ぜひ二人に再会して欲しい。自己満足かもしれないが、それでもパパスには幸せになってもらいたいもんだ。そのためには、あの鎌使いを倒すか逃げるかする必要がある……いや、ヘンリーが誘拐犯に捕まらなければいいんじゃないか？そして誘拐犯を捕らえれば王妃が依頼人だとわかるし、それならラインハットは安泰じゃないか？
よし、まずはヘンリー誘拐を阻止。出来なかったら、鎌使いから生き延びる。確実なのはヘンリー誘拐を阻止だ。これなら鎌使いに相対することはない。
よし、なんとしても阻止するぞ！

とはいってもラインハットまで遠い。１５日ほどかかる。橋まで７日ほど、橋で一日休んで、そこからラインハットまで７日ほどだ。
今日ようやく橋に着いた。
「さて、今日は一日、この橋で休むぞ。ここには兵士が駐屯しているからな。魔物も近寄らないし、安心だ」
たしかにリラックスできるのはいいな。いくら雑魚でも警戒と化

していると、気疲れするし。

「うん。さすがにちょっと疲れたよ」

これは本音だ。身体はまだ子供なので、レベルが１１でもやはり体力のなさはどうにもならない。

「そうかそうか。では橋を渡ろう。向こう側の兵士用の駐屯所の傍に小屋がある。そこに泊まるぞ」

ゲームだと、一日で着くからなぁ。やはり現実は厳しい。

見張りの兵士に、村に来た兵士から渡された通行証を見せて橋を渡る。さすがに伝令が通っているのか、兵士が賄賂とかを要求してくることはなかった。ファンタジーとかこういう中世の世界だといちゃもんつけてくる奴がいるはずだよなぁ。ラインハットは国としてそれなりに大きいからまともなんだろう。

「今日はここで休むが、陽はまだまだ落ちそうにないな。よし、川でも見てみるか。これだけ大きな川だから観光にいいだろう」

パパスについていき、橋の見張り台みたいなところに上っていく。そこにはラインハットの城下町から観光に来た人がちらほら見えた。

見張り台の先に立って川を見渡す。

いい眺めだ。澄んだ水がゆっくりと流れていく様は、見ていると心が洗われていく気がする。

「すごく綺麗だね」

「いい眺めだ。こっち側には来たことがなかったからなぁ。たまにはこういうのもいいものだ……む、そこのご老人、あまりにも暗

い表情をしておられるようですが、何かあったのですかな？」

二人してじっと川を眺めていると、パパスが俺達と同じように川を眺めているが、とても暗い表情をしている老人を見つけ話しかけた。

「…この国はもう駄目なのかもしれないんですよ。ヘンリー王子はいたずらばかりしていて、王妃様は後妻だが欲深く実の息子を王位につけようと画策し、王様も最近お体がすぐれないご様子。一体この国はどうなっていくのか……」

王妃か、企みを阻止してなんとか誘拐犯を捕まえれば、内乱とか起きずに済むか？まてよゲームでは魔物と入れ替わっていたからもしかしたら裏で教団？だっけ魔物が隠れ蓑にしている団体につながっているのかもしれない。息子を王位につける方法があるとかそのかしたのか？

なんとしても王妃は排除しなければ。国が無事なら教団も無理は出来ない。そうやって勢力を削いで、最悪の場合に勇者が生まれなくても魔物を封じ込めるようにしないといけない。平和のためにもこの国の問題をなんとしても解決しなければ。

「ふむ、何大丈夫ですよ。王様も後継者について考えておられるようですし、心配はご無用ですぞ」

「ふむ、だといいのですがのう……」

そう言って老人は相変わらず暗い顔で川を眺めた。

「では私達はこれで」

パパスについていき、小屋まで戻った。小屋は2階建ての大きさで、ぼろい宿屋見たいな感じだ。どうやら他にも使用している人がいるようだ。

「私達は2階の部屋を使わせてもらおう」

俺達は2階の4畳ぐらいの大きさの部屋を使わせてもらうことにした。住むなら狭いと感じるが、寝るだけだから充分だ。

「リュカ。聡明なお前には話しておくが、実はヘンリー王子の教育係兼護衛にわたしが就くことになった。さすがに見てみぬ振りはできんし、近頃は世が乱れ、魔物が凶暴化している。そんなときに国が大きく衰退することはいけないからな。お前はヘンリー王子と歳が近いし、遊び相手にでもなってもらおうと思っている」

それじゃあ魔法や剣術の練習ができない。拒否できないかな。

「ああ、もちろん毎日じゃない。魔法や剣術の練習もできるようにしよう。それにラインハットの城下町はすごく大きいぞ、いろいろ見て回るのもいいだろうしな。村では経験できないことがあるだろうしな」

どうやら練習ができないことへの不満が顔に出ていたようだった。

「うん。いいよ。でも、ラインハットの町ってどれくらい大きいの？」

「そうだなアルカパの町の数倍以上の大きさだ」

アルカパの町ですら最低でも数百人規模の町だからもしかしたら

万を超える人口がいるのかもしれない。ゲームだと住民が数人しかいないからなぁ。

アルカパの町は探検とかしなかったし、見て回るのもよさそうだ。

まあ、それも王妃の企みを阻止してからだな。

5

ヘンリーが暗殺されました。何を言っているのか（ｒｙ

ラインハットに着いた日は宿屋に泊まった。当然、宿泊費は王様持ちだった。

日が落ちる前に着いたので、少し観光してみたが楽しかった。

この世界ではじめての大都会。地球に比べればヘボすぎるが、それでも中世風で独特の雰囲気があって、むしろビルや建物で囲まれた地球の都会より人の活気が感じられた。

露天が開かれている市場、冒険者風の奴らで集まっている武器屋など。ゲームと違って店は一つだけなんてことはなく、いくつもの店が並んでいた。

パパスに聞いたのだが、ラインハットでは鋼が主流なのだそうだ。ミスリルなどと違い大量に生産できるため、特注なども簡単に行え、値段も比較的安く、扱いやすい。なので冒険者に人気がある。

ラインハットの兵士達はすべて鉄か鋼の装備がいきわたっているため、他の国、グランバニアとかと比べると、兵士単体は弱いが、兵士の数が多く、集団戦闘が得意らしい。

そんな風いパパスにいろいろなことを聞きながら観光をして、宿屋で久しぶりに新鮮な素材を使った食事を食べ、ぐっすりと眠った。

そして次の日、城をたずねた。

パパスが王様に面談した後、王様が簡単な試験、兵士達と戦うなどを課した。パパスは当然それに合格し、ヘンリーの護衛兼教育係に任命された。

期間は1年ほどらしかった。たぶんその間に後継者の問題を片付けるつもりだったのだろう。
その日、パパスの息子である俺もヘンリーの遊び相手になるということで、顔合わせを行った。
そしてゲーム通りの展開になりヘンリーが誘拐されそうになったが、忍び込んできた誘拐犯達の足を俺がバギクロスでスッパ斬ってやった。その後、死なない程度に回復させていると、パパスが来て誘拐犯を捕らえた。
王様からお褒めの言葉をいただき、その日から兵士の士官用の宿舎にパパスと一緒の部屋で住むことになっていたので割り当てられた部屋に荷物を置いたりしていた。
その時、王様、ヘンリー、王妃、デールの4人が一緒に夕食を摂っていたそうだ。
夕食を食べ初めてすぐに、ヘンリーがいきなり苦しみだしてそのまま死んだ。調べた結果、食事に毒が混ぜてあったそうだ。
登用されたばかりのパパスがもっとも怪しいと王妃が言い出した。しかし、誘拐犯を拷問していた兵から連絡が来て、王妃がヘンリーの誘拐を依頼したことがわかり、王妃が捕まった。
そして数日後、王妃は処刑された。ギロチンで首ちょんばにされたそうだ。教育に悪いからと俺はパパスに止められていたので見に行けなかった。俺は当然見るつもりなどなかったが。
そして残ったデール王子がただ一人の王位継承者になった。王妃も本望だろう息子が王位につけるようになったのだから。
その後、王妃をそそのかした奴、光の教団を名乗っていた奴が捕まった。捕まった奴は魔物ではなくただの人間だった。
そして光の教団が最近人攫いをしているやつらだと判明し、ラインハットは光の教団への入信を禁止し、奴らが人攫いであることを発表した。
これでこの国は少なくともサンタローズの村を滅ぼすなんてことはしないだろう。

パパスも生き残れた。
ヘンリーは残念だったが、パパスのように思い入れがあるわけじゃないし、むしろ初対面の印象は最悪だった。ただのクソ餓鬼として思えなかった。むしろ弟のデールのほうが何倍も好印象だった。
だからヘンリーのことは全く気に病んでいない。残酷かもしれないが、俺に命を懸けてまであの餓鬼を助ける義理はないし、もう終わったことなのでしかたない。

「リュカさん、今日は何をするんですか？」

「昨日と同じで魔法の練習でもする？」

「そうですね。運動するのは禁止されていますからね」

そして俺は今、デールの遊び相手になっている。
ヘンリーが死んでしまい、王様はかなり落ち込んだが、残ったデールにもしものことがあってはいけないとパパスを護衛役兼教育係にし、俺も同時に遊び相手になった。
パパスは剣術などの教育係だったのだが、デールはまだ幼いし、もしものことがあってはいけないと激しい運動は禁止された。そんなわけで遊び時間は簡単な魔法の練習を行っている。
ヘンリーはただの生意気なガキだったが、デールは教育ママだった王妃によって王にふさわしいように教育されていたので、けっこう聡明だった。
正直ヘンリーを王にするって判断は間違いだと思ったほどだ。デールを王にするって王様が決定していれば王妃も教団に唆されることはなかっただろうし、問題も起きなかったはずだ。王様も身体の具合が悪くて判断を誤ったのだろうか？
まあいい。今は魔法を教えないと。

「じゃあ、メラの復習からだな。メラが使えるようになったら回復魔法に適正があるか試してみようか」

「わかりました」

デールは俺より1歳ぐらい年下だが、かなり覚えが早い。正直リアルチートだと思った。俺みたいなズルっていうか反則じゃなくて正当な天才って奴だ。

まあ、ゲームでも主人公は一般人とは比べ物にならないほどの成長速度と成長の限界だから、ゲームでの主要人物はこの世界だとこんなものなのかもしれない。ビアンカだって、子供なのに、冒険者の初心者より強いぐらいだったし。

庭の中で、他にも護衛の兵士がいる中で、なんかミスリル？で出来た魔法を防ぐ鉄で出来た人形相手に、デールが魔法を唱える。

魔法の鎧はこのミスリルで出来ているらしい。いつかこの金属で鎖帷子でも作ろうと思っている。すばやさ重視の俺にとって鎖帷子が一番いい装備だ。あとは特殊な布で出来たみかわしのふくとかもいい。

「メラ！」

デールが呪文を唱えると、握りこぶしほどの火球が人形へと飛んでいった。

ちゃんと攻撃魔法として成功していた。失敗すると、ライターのような小さい火がでるだけとか、煙だけとかになる。

「どうですか？」

「成功しているよ。これだけ早く覚えられたんだからメラは適正があったみたいだ。」

「少なくとも魔法が使えないことはないんですね。良かった」

「じゃあ、今日は回復魔法を教えるよ」

俺が覚えた理論を子供がわかりやすいように説明する。普通ならそれでも理解できないだろうがデールはある程度は理解できる。後は感覚を掴めば魔法を使うことが出来るだろう。もっとも適正があればの話だが。

「ホイミ！」

呪文を唱えるが何も起きない。ホイミ系は成功しているなら淡い光が包み、包んだ部分の傷が癒されていく。

「ホイミ！」

失敗か。まあ普通何度も練習してようやく覚えられるからな。俺はチートだったからすぐに使えるようになったが。

「ホイミ！」

おっ！ほんの少しだけ光ったっぽいな。デール、やはりリアルチートか？

「ホイミ！」

おお、ほんの小さな範囲だけど間違いなく光った。

「はぁはぁ」

デールが疲れているな。まだまだ限界ではないが、休ませよう。無理をして練習する必要はない。

「そこまでだよ」

「はぁはぁ。どう、でしたか？」

「少しだけ成功していたよ。たぶん練習すればホイミは使えるようになるよ。ヒャドは無理だったけどメラ、ホイミは適正があると思う」

「ありがとうございました。また、教えてください」

「うん。いいよ」

と言うわけで今日のお役目は終わりである。

デールの遊び相手と称した魔法の練習は3日に1日くらいの頻度だ。パパスは常に護衛として城につめているから、暇な時間はさっきのような人形相手に魔法の練習を行なったり、城の兵士達に剣術の稽古をつけてもらっている。

町の外に出ることは禁じられているため、レベルこそ上がっていないが、それでも強くなっていっている。

パパスの死が回避されたので、これからは身体が出来上がるまで、俺は今6歳、いやもうすぐ7歳か。一この世界の成人の年、１５歳になるまでは後１０年近くは修行の日々だな。

もし１５歳になったら旅に出てみたいな。武器とかで強いものを探したいし。ゲームだと青年期の初めでオラクルベリーのカジノでメタルキングの剣とグリンガムの鞭を手に入れると楽になるんだよ

なぁ。この世界でもオラクルベリーにあるんだろうか。でも現実のカジノはゲームと違って大勝ちすることなんてまず無理だろうし、確認だけはしてみよう。でもギャンブルは絶対にしないが。

デールの遊び相手になってから約半年が経った。

俺は7歳になった。レベルは12。パパスと一緒にサンタローズの村に数回だけ戻ったことがあり、そのときに1レベル上がった。

俺は今日、これから北東の遺跡にいる光の教団の人攫い達の討伐隊について行くことになっている。パパスも一緒だ。

王妃によるヘンリー暗殺を唆した教団について、ラインハット国内での調査をしていくうちに、遺跡に人攫いが潜んでいることが判明した。

これまでにも女性と子供が何人もさらわれており、国民は怒りによって遺跡にいる光の教団の討伐を叫んだ。

当然だが王様もヘンリー暗殺の間接的な原因を見つけたことによ

り、腕利きであるパパスを加えた討伐隊を組織した。当然俺もついていく。俺は魔法ありならラインハットの兵士とは比べ物にならないほど強いし。

もしかしたらゲームでの鎌使いがいるかもしれないので準備は万全にしておいた。フィンガー・ブレイク・ボールを使っても少しだけなら魔法が使えるように安定したし、小遣いというには多すぎるゴールドで町に来ていた行商人から手に入れたエルフの飲み薬がある。

エルフの飲み薬、ゲームでもあったＭＰを完全回復させる道具だ。１つ２０００ゴールド、３つセットで５５００ゴールドもした。ある秘境からほんの少数が出回っているだけなので高い。まあ道具だし、魔法を使わない者ならまったく必要ないから、それこそ破邪の剣とかよりは単価が安いがそれでもかなりの散財だった。しかし、買った甲斐はあった。フィンガー・ブレイク・ボールを使った後で、試しに１つ飲んでみたが、もう一度フィンガー・ブレイク・ボールが使えたのだ。つまり今の俺は最大３回フィンガー・ブレイク・ボールが使える。

かなり痛い出費だったが、命に代えたら安いものだ。

これなら鎌使いもパパスと連携すれば勝てるだろうし、一人一人は魔法なしの俺とどっこいどっこいの兵士だが、３０人近くいるから何とかなるだろう。

「では、出発する！」

討伐隊が王様から叱咤の言葉をいただき、同時に国民に討伐隊の意義を言って、討伐隊が出発する。

国民は列になって討伐隊を見送っている。中には子供や妻をさらわれた人が仇を討ってくれと叫んでいる。

この討伐が成功すればラインハットは完全に安泰だろう。光の教団の勢力を完全に削いでやる！

5　幕間～パパス～

わたしの息子は天才だ。

息子であるリュカは、グランバニアの王だった私と、エルヘブンというかつて勇者と呼ばれた者の子孫が住む村で、勇者の血を一番色濃く引いているといわれた我が妻マーサとの間に生まれた子だ。

まだまだ幼いリュカは素直ないい子だったが、もの心ついたときから魔法に関して天賦の才を見せていった。

バギ系の呪文を極め、回復魔法もベホマまで使え、補助系魔法も使える。その上、バギ系の魔法でオリジナルの呪文を作り出した。初めて使ったときは暴走して瀕死になっっていたのだからさすがに肝が冷えたが、半年経った今、リュカは完全に使いこなしているようだ。

あの呪文は魔界の魔物相手でも通用するどころか、一撃で倒してしまえる威力だ。その分燃費が悪く、いまは一日一発しか放てないようなのだが。しかし、わずか6歳の子供がそんな呪文を作り、使いこなせるというのだから天才以外に評しようがない。

いずれ、グランバニアに戻ったとき、王位について欲しいものだ。

勇者の血を引き特別な能力を持つマーサの誘拐、魔物の凶暴化、光の教団を名乗る者達の凶行。この世界を何か邪悪なものが覆いつくそうとしている気がしてならない。そんな時代だからこそリュカのような力を持つ者が王となって民を導き、守らなくてはならない。

魔法に才を示してからのリュカは何を考えているかわからない子になってしまったが、ダンカンの娘であるビアンカちゃんにレヌール城からお土産を持っていってあげて、お礼にキスをされて赤面したり、デール王子に魔法を教えている時はけっこう楽しそうだった。

きっと王になっても責任を持ってやり遂げるだろう。

願わくば、さらわれた妻を助け出し、親子揃ってグランバニアへと戻りたいものだ。

6

「ふん！」

パパスが剣を振るうと一撃で魔物は死んでいく。

「突撃ぃ！」

そのパパスを先頭に鉄の槍を持った兵士が突撃し魔物にダメージを与え、最後に鋼の剣を持った兵士が止めを刺す。まさに集団戦闘だ。

俺は剣を持った兵士の団に入れてもらっている。鎌使いがいるかもしれないから魔法は温存中だ。

ラインハットの城から出発して、２０日ほどで、ラインハットの城の周りの山の向こう側にある遺跡に討伐隊は突入した。遺跡の周辺は魔物が多く倒しながら進んでいった、さらにはゲームでの毒沼、この世界では魔界の瘴気が湧いているところまであったので、これほどの日にちがかかった。

薬草や食料などは馬車でかなりの量を持ってきたので、補給の心配はない。

今日突入し、ラインハットの兵士１０人とパパス＋俺の隊と、ラインハットの兵士２０人の隊に分かれて遺跡の捜索中だ。残りの１０人は外で馬車を守っている。

それにしても魔物がうじゃうじゃいるので倒しているだけで時間がかかる。

まあ、そのおかげで俺は今の戦闘でレベルが１４に上がったが。

「パパス隊長！用水路の向こうに道があります。どうやら小船で移動できるようです！」

暫定的にこの隊の隊長はパパスになった。特に反対意見はなかった。だって、遺跡に着くまでの戦闘でパパス無双を見せ付けたもん。一般の兵士が魔法の使えない俺よりちょっと強いぐらいだから、それはパパスの強さが際立つに決まっている。さっきの戦闘でも、一撃に二匹の敵を倒すとかしたし。

「よし！わたしと数人で小船に乗って移動する。小船には槍を持っている兵士を優先で乗せるぞ。後の兵士はすぐに出口へ戻って、出口付近で待機だ」

槍を優先するのは剣より攻撃範囲が広いからだな。小船だと身動きが取れないし、襲われたら先に届く槍が有利だ。まぁ俺が呪文で対処してもいい。出し惜しみして無駄に死者を出すのは嫌だしな。

攻撃範囲はゲームと違ってかなり重要だ。なら弓を使えばいいと思うが、矢で負った傷は魔法ですぐに回復されるし、魔物相手にはあまり通王しないからこの世界では役に立たない。スライムナイトとかけっこう早いから狙っていたら当らないし、大型の魔物では動きを止めることすら出来ないし、倒すにはそれこそ大量の矢が必要になる。某Ｂ○ＴＡ相手の大型種を倒すときに銃だけでは時間と物量がかかるのと同じだ。

魔法はかなり射程があるし、中級なら威力があるし、範囲攻撃もできるから魔法使いはどの国でも重宝するらしい。俺的には呪文チート乙って感じだ。

「リュカ、お前も一緒に来い。魔法が役に立つだろうからな。小船の上では温存しなくてもいい」

「うん。わかった」

パパスはさすがに指揮が適格だ。知れば知るほどパパスという男が大きく感じる。呪文チートな俺が成長しても勝てるかわからない強さだ。
この世界に完全に慣れ、そのうえ子供の状態にも慣れてしまったため、パパスに憧憬の念を自然に抱いてしまう。まぁ、あの服装やネーミングセンスはどうかと思うが。
小船に乗り、兵士が櫂を使って漕いでいく。

「む、魔物か！」

ダークアイと呼ばれる宙を浮いている目玉に触手が生えている魔物が８匹ほど襲ってきた。

「バギマ」

手をかざし、呪文を唱える。５匹は真っ二つに切り裂かれゴールドに変わって用水路に落ちていった。残りの３匹は触手が切れただけだった。もっともかなりダメージになったようだが。
残りの魔物は兵士が槍で突いたらすぐに倒せた。そしてそのまま船は進んでいく。
このあたりにはあまり魔物がいなかったのか、他には魔物に遭遇することもなく、牢屋がある場所についた。

「ここは…どうやら、さらった人を捕らえておくための牢屋のようだな」

兵士やパパスと一緒に調べてみたが特に何かあるわけもなく、普通のと言うのも変だが牢屋だった。

「別の隊が進んだほうに光の教団が潜んでいるのかも知れないな。

戻るか」

俺達は出口まで戻った。

出口付近でさっき戻っていった隊と別の隊と合流した。
別の隊は人を縄で縛って連行してきている。どうやらさらった人を光の教団へ売る奴らがいたらしい。そいつらを捕らえたそうだ。

「ふむ、これで任務は完了だな。よし！外に出て帰る準備をしよう」

「了解です」

俺達は幾分か気を緩めて外で出ようとした。

「ほっほっほ。どうやら邪魔者がいるようですねぇ」

するとオカマみたいな口調と声が出口からの方から聞こえた。
声がしたほうを見ると、血のついた鎌を持ったローブに覆われた人型の魔物がいた。
こいつは…ゲームの鎌使いか！

「貴様、一体」

パパスを剣を抜き、即座に兵士達が陣形を整える。

「ほっほっほ。あなた方が知る必要はありません。ここで死んでもらいますからね」

「ふん！この人数だ。やれると思うか」

「こちらも私一人だと思わないでくださいね。ジャミ、ゴンズ」

鎌使いの後ろから二足歩行する2メートルを超える身長を持つ大型の馬の魔物と、剣、鎧、盾を装備したゴブリンやオークを足したような人型の戦士のような魔物が現れた。

馬は前足？に血がべっとりついており、戦士型も剣に血がついている。

「まさか、外にいた者達は」

「皆死んでしまいましたよ。惨めなものでしたね、しかし恐怖にゆがむ顔はとても面白かったですねぇ。是非あなた達の死に際の顔を見てみたいものです」

本当に楽しそうに言う鎌使い。

それを聞いたパパスは怒りに震えている。

「貴様、許さんぞ！」

叫びとともにパパスが鎌使いへと走り出した。それを合図に戦闘

が始まった。
パパスと鎌使いは剣と鎌を互いに振るって互角の戦いを繰り広げている。兵士達は集団でジャミ、ゴンズと呼ばれた魔物を相手に戦っている。人数の多さを活かし、数人が常に戦い続ける状態で戦っている。傷ついた兵士は薬草で応急処置をして、傷がいえると傷ついた兵士と後退している。今は全くの互角だ。しかしこれでは薬草がなくなる前に魔物を倒すかしかないだろう。
俺はまずは一番厄介な鎌使いを倒そうと思う。パパスならジャミ、ゴンズと一人でも互角以上に戦えるだろう。ならば一番厄介な鎌使いを倒すべきだ。今鎌使いは思った以上に強いパパスとの戦いに集中している。奇襲でフィンガー・ブレイク・ボールを喰らわせてやる。

「バ・ギ・ク・ロ・ス」

片手に、5本の指それぞれに1つずつバギクロスを停滞させ、拳を握って圧する。
しかし、このままではパパスにも当る危険がある。

「父さん！」

俺が叫ぶとパパスは瞬時にバックステップを行い、距離を取った。
今だ！

「フィンガー・ブレイク・ボール！」

圧縮された真空波の弾丸は一直線に鎌使いに飛んでいった。
しかし鎌使いは腕を交差して防いだ。があまりの威力に右手がもがれ、その上吹き飛んで壁にぶつかった。

「ぐ、ぐ…」

「ふん！」

うめいている鎌使いにパパスが追撃しようとするが、

『ガキィィン！』

無理をして兵士達の包囲から突破してきた戦士型の盾に防がれた。

「よく、やりましたよ。ゴンズ」

戦士型、こいつがゴンズという名前らしいを褒めるとともに鎌使いは立ち上がった。

今のうちにエルフの飲み薬を飲んでおこう。ぐびぐび、と。

すぐに飲み終わり鎌使いを見る。

「ベホイミ」

鎌使いは残った左手を切り裂かれた右腕にかざし、呪文を唱えるが、ダメージが大きすぎるのか傷口が少しふさがった程度だった。

「く、人間がここまでやるとは、あなた達親子のことは忘れませんよ。いずれ殺してあげます。が、今日のところは引かせてもらいますよ。ジャミ！ゴンズ！」

鎌使いが叫ぶとともに、ゴンズがパパスへと突撃していき、ジャミは兵士達へと突っ込んでいく。

「ほっほっほ。ではさようなら」

そして、鎌使いはフィンガー・ブレイク・ボールのように特殊な呪文を唱え逃げようとする。

「バギクロス！」

俺は瞬時に鎌使いにバギクロスを放った。

こいつはここで逃がしたら、絶対に厄介な奴になる。ここで倒す！

「メラゾーマ！」

バギクロスとメラゾーマがぶつかり相殺された。

ゲームだとマホカンタが使えたはずだが、ここで使わなかったのは、たぶん俺のバギクロスは鎌使いのマホカンタでは反射できないからだろう。この世界でのマホカンタは使用者のマホカンタの適正、熟練度、消費ＭＰによって反射できるレベルが変わる。だがどんな奴でも上級クラスの呪文を反射できるような奴はいないだろう。俺と鎌使いならば防ぐぐらいは出来るだろうが。

「坊やは本当に厄介ですねぇ。ここで殺しておきたいのですが、それは無理そうですから、いずれまた会いましょう。そのときに殺して差し上げますよ。ではさようなら。そうだ、これはお釣りです。ふはぁぁぁぁぁ！」

くそ！逃げられた！

フィンガー・ブレイク・ボールは溜めが必要だ。ゲームだと１ターン分必要になる感じだ。だから瞬時に放てなかったし、それに逃げに徹した鎌使いには隙がなかった。本当に厄介な奴に逃げられたな。

それよりも今は残りの二匹だ。

周りを見たら、なんと兵士達の9割が倒れている。これは…麻痺の状態だろう。さっきの鎌使いはやけつく息を吐いたのだろう。

くそ！

もう鎌使いがいないので残りのＭＰでジャミにフィンガー・ブレイク・ボールを使うか。

パパスを援護するのは無駄だ。だってパパスは圧倒的に優位に戦っているから。ゴンズが1回攻撃するたびにパパスは2回攻撃してるほどだし。ゴンズはすでにぼろぼろになっている。パパスはかすり傷くらいだ。

やっぱりパパス強ぇ！強敵相手だとより強さがわかるぞ。

っと、さっさと俺もジャミを倒すか。

「バ・ギ・ク・ロ・ス！」

残った兵士が麻痺している兵士をかばって戦っている隙に溜めを行う。

「フィンガー・ブレイク・ボール！」

兵士達が距離を取って槍で戦っているので、魔法やブレスで攻撃しているジャミに向けてフィンガー・ブレイク・ボールを放つ。

『ズドン！』

と音がして、ジャミの顔は一瞬で抉り取られ、ジャミは床に倒れた。そのまま消えていき、大量のゴールドに変わった。

「ぐぉぉぉぉ！」

同時に叫び声がして、反射的に声が聞こえた方を向くと、パパス

がゴンズを滅多切りにしたところが見えた。そしてゴンズはすぐに大量のゴールドに変化した。

「ふう。リュカ、キアリーは使えるか？」

「うん、もう少しだけなら何とか」

「ならば麻痺している兵士達にキアリーをかけていくぞ」

「わかった」

剣をしまうと、パパスは兵士達にキアリーをかけていく。ちなみに麻痺は麻痺の毒にかかっている麻痺の症状が起きているのだからキアリーで直せる。キアリクなんてなかった。

俺も同じようにキアリーをかけていく。

数分で兵士達の応急処置が終わった。怪我が酷い者もいるが、死ぬほどではないし、薬草を塗っておいたから、食事を取って休んでおけばその内直るだろう。寝れば俺もＭＰが回復するから、ベホマをかければいいし、最悪残りのエルフの飲み薬を使えば、すぐに呪文も使えるようになるし。

そんなわけで、遺跡から出たのだが、そこには地獄が待っていた。

「なんと…むごい……」

バラバラに分解された兵士達の死体がそこらに転がっていた。

地面には血の水溜りが出来ている。そのせいでものすごい血の匂いがして気持ちが悪くなってきそうだ。兵士達も顔色を悪くしている。

「馬車は無事なようだ。今日はここで休むことにする。死んだ兵士

達を弔ってやろう」

パパスの言葉に兵士達は従って、ちぎれた腕、半分しかない顔などを、大きな穴を掘って、そこに埋めていく。

俺はパパスによって、馬車の中の荷物の点検に回された。さすがにありがたいと思った。

一通りの死体を埋めて、その上にパパスが切り倒した長い棒を墓標代わりにさした。そしてしばらくの間黙祷した。

その後、少々意気消沈しながら俺達はラインハットの城へ戻った。

今日は遺跡への討伐からラインハットへ戻ってきた次の日だ。

パパスや兵士達は王様への報告へ行き、俺は城の部屋、パパスが護衛役になってからあてがわれた部屋でぐっすり眠ることにした。

さすがに

身体が限界だったらしい。

一日ぐっすり寝たらほとんど疲れは取れていた。さすがにパパスの血を引いている身体だけはある。

今日は何をしようと考えながら、部屋の外に出た。もちろん着替えはしている。

「リュカか、起きたのか」

「父さん」

「ちょうどいい。お前に話すことがある」

パパスについていき、部屋に戻った。

「実はな」

イスに座るとパパスが話し出した。

「急なことだが、サンタローズの村に戻ることにした。デール王子についてだが、もうこの国には光の教団もそうそう手を出さないし、わたしがいても役に立つことはないだろう。おまえもこの半年でいろいろな経験を積んだはずだ。しばらくは村でゆっくりしながらお前の修行をしていようと思う」

「うん。わかった。そういえば、アルカパの町には行かないの？」

ビアンカとは前にサンタローズに戻ってきたときに、ビアンカと女将さんがアルカパの商人たちについてきてサンタローズに来たときに一度だけ会ったきりだしな。ビアンカがラインハットには一度も行ったことがないから、ラインハットでのことを話すって約束したし。

俺がロリコンだからという理由では絶対にない。

「うむ、ダンカンにも会っていないしな。村に戻ったらアルカパに行ってみるのもいいな」

「楽しみだね」

「そういうわけで、しばらくしてから、そうだな5日ほど経ったらサンタローズに戻るぞ。それまでに荷物をまとめておくのだぞ」

「うん。後、お土産とかも買っていこうかな」

「うむ。報奨金をもらえたからな。お前のことだから無駄遣いはしないだろうが、使いすぎないようにな」

「大丈夫」

お土産か、アクセサリーかな、銀の髪飾りとかでいっか。後はエルフの飲み薬みたいに掘り出し物を探してみよう。そうそうラインハットには来れなくなるしな。デールには…王子だしいいものが思い浮かばないなぁ…ま、店で何か見つけたらでいいか。後は世話になった剣の訓練をしてくれた人に薬草の詰め合わせでも送ろうかな？

なんにしても、サンタローズでまた修行の日々か。数年は平和が続くのだろうな。

でもそれは仮初の平和だ。

いずれは美人な奥さんと結婚して毎日いちゃいちゃしながらすごせるような、魔物に平和が脅かされない時代にしたいものだ。

7

「リュカ、起きて、起きなさい！」

この声は……ビアンカか。

「おはよう…」

「もう、また夜遅くまで本を読んでいたのね。ほどほどにしておきなさいよ」

「ごめん。ついつい熱中してしまった」

「ご飯できてるから早く食べなさい」

そう言って、ビアンカは部屋を出て行いった。

俺は今、アルカパの町、ダンカンさんの経営している宿屋に居候している。

俺がラインハットから戻ってきてはや６年ほど経った。

俺は１０才までサンタローズの村で過ごしていたが、その年にパパスとサンチョが旅に出ることになった。彼らはどうやら剣以外の伝説の勇者の装備品の噂を聞き、確かめに行ったらしい。俺は戦力としては申し分ないが、長い旅になるし、もしかしてのことがあってはいけないので、ダンカンさんの経営している宿屋に居候することになったのだ。

居候をしてもう3年近く経っている。俺は今年で１４歳、ビアンカは１６歳になる。

ビアンカはそれはもう美少女といえる容姿になった。同年代に比

べて胸がでかいので、俺もついつい胸に眼がいくことがある。おっぱい。
そんなビアンカと俺は幼馴染で同居人だ。世話焼きで年上のナイスバディの幼馴染がいる俺って人生勝ち組だな、と何度思ったことか。
そんな俺は町の男から嫉妬の眼で見られることが多い。その視線にももう慣れたが。
そういえばゲームだと山奥の温泉で療養していたダンカンさんだったが、こっちの世界だとサンタローズが滅ぼされておらず、心労がないからか、元気なままだ。
もう4年近くも面倒を見てもらっているので、この人達には長生きして欲しいと思っている。

「もう、早く食べに来なさいよ！」

「ああ、ごめんごめん」

考え事をしていたら、ビアンカが部屋に戻ってきた。
さすがにまずいな。早くご飯を食べに行こう。

「バギクロス」

呪文を唱え、木を切り倒す。

俺は町で呪文を活かしたいろいろな仕事をしている。まあ何でも屋みたいな感じだ。

今みたいに木を切り倒したり、重症を負った人にベホマをかけたり、ヒャド、ヒャダルコで保温庫を一定以下の温度に保ったり、魔物の集団が出たときは瞬殺したりして日々をすごしている。

後は子供達相手に魔法を教えている。少しでも才能がある子供はやはり便利だからか魔法を教えてやって欲しいと親から頼まれているので、断るわけにもいかず、３日に１度の頻度で１～２時間ほどの授業を開いている。

ちなみにお金は取っていない。暇な時間はレベル上げを兼ねて魔物を倒してゴールドを稼いでいるので、もう２万ゴールド近く溜まっているので、必要ないからだ。ちなみにこれは物を買ってなお残ったお金だ。

エルフの飲み薬は、商人に１つ２５００ゴールド出してもいいから取り寄せて欲しいと頼み、結果２つ手に入れた。エルフの飲み薬は、っていうか薬草の類はかなり長い期間腐らない（本当にＹＡＫＵＳＯＵである）ので、今は３つエルフの飲み薬を所持している。

それと剣も破邪の剣を取り寄せたし、鎧として、魔法の鎖帷子を所持している。もっともいつもはただの服しか着ていない。このあたりの魔物では弱すぎて防具を使う必要がないのだ。もう油断していても瞬殺できるし。

魔法についてもかなり使える魔法が増えた。

メラ、メラミ、ヒャド、ヒャダルコ、ギラ、ベギラマ、イオ、イオラ、バギ、バギマ、バギクロス、ホイミ、ベホイミ、ベホマ、ベホマラー、スカラ、バイキルト、ピオリム、フバーハ、キアリー、リレミト、フィンガー・ブレイク・ボール（ＦＢＢ）だ。

ちなみにザオラル系統は存在しないし、死んだら教会で復活なんてことはない。

教会は魔物が発生しない結界、半永久的なトヘロスを城とか町とかにかけるのが仕事だ。これは世界を作った神への祈りを行える者にしか出来ない。教会で育てられたシスターとかは特に強い結界を張ることができるそうだ。

そのためシスターは王族や貴族、大商人の結婚したい女性Ｎｏ１の職種だ。しかもその子供は魔法の才があることが多い。これは神からの贈り物といわれているそうだ。

ゲームでヘンリーは教会のシスターと結婚したが、この世界ではとてもうらやましがられるほどのことなのだ。まあそのヘンリーは死んでしまったが。

ヘンリーといえば、その弟のデールだが、たまに会いにいってやっている。ゲームと同じく１、２年ほどで王様が死んでしまい、今は若いというには若すぎるがラインハット国王になっている。

国王になったときに仕えて欲しいと言われたが、俺は俺がグランバニアの王族であることを知っているため断った。

それでもデールは兄貴分として俺を慕ってくれているので、俺も無茶な頼み以外は聞いてやることにしている。俺にとってもデールは弟分で魔法を少しだが教えた弟子みたいなものだからだ。

ちなみにデールだが、国王になってからは政治や経済の勉強で忙しく魔法の練習はしていないが、メラミやベホイミは使える。

ああ、それと俺のレベル１８だ。

あれから４年近く、雑魚を倒し続けても全然レベルが上がらなくなった。ゲームだと、もっと上がっているはずなのに…。正直３年で４レベルしか上がらないとか現実は厳しい。

っとそういえばビアンカが今日は依頼に来る人がいるって言っていたな。切り倒した木は大工の見習い達に運んでもらおう。俺はもう帰るとするか。

「じゃあ、後は頼んだ。お疲れ」

「へい、わかりました」

挨拶をして宿屋へ戻る。

さて、一体どんな依頼なんだろうか？

顔見知りになった商人とか、魔法を教えている子供の親とかに挨拶しながら宿へ戻った。

何気に俺はこの町の顔になってるっぽい。

光の教団についてや魔物の群れとかについては、噂とか聞いて情

報を集めることもあるが、そういった風評とか噂とかはあまり気にしないから良くわからないが。

「お帰りなさい。リュカ。依頼人が来てるわよ」

「ただいま。依頼人はどこにいるんだ？」

周りを見ると、旅をしてきたような荷物を持ったシスターがいた。アルカパの町の教会のシスターとは４年近く町にいるから、当然顔見知りだ。だから、あの見知らぬシスターに眼がいったのだろう。

「あちらのシスターが依頼人よ」

ビアンカがシスターに話しかけ、シスターはこっちにやってきた。

「どうも、あなたがあのリュカさんですか？」

「あの、というのはどのリュカかわからないですけど、俺の名前はリュカですよ」

「いえ、アルカパの町にいる天才魔道士のリュカはラインハット地方では有名ですよ。若い方と聞いていましたが、まさか少年だとは思いませんでした」

天才魔道士、それって今の俺の称号なんだろうか？まあいい。俺は天才っていうかチートだ。子供なのに中の人の知力を活かした呪文チートだな。チート乙。

「ビアンカ。俺ってそんな風に呼ばれてたのか？」

「そうよ、っていうか知らなかったの？……はぁ、あなたはそういう人よね」

どういう人かはわからないが、魔法の修行や剣術の修行、光の教団の情報収集、それに仕事で日々すごしているから、そんなこと聞いたこともなかったんだが……。

「とりあえず、ここで話をするのもなんだから、2階のテラスへ行きましょう」

「わかった」

「わかりました」

ビアンカについていき、2階のテラスに移動した。

「では依頼について話します。私はオラクルベリーを越えた先の海辺にある教会のシスターです」

ゲームで樽で逃げ出した先のあそこか。

「実は教会から海沿いへずっと行ったところにかつて神の塔と呼ばれた塔があるのです。昔、魔物が凶暴ではなかったころはシスターになったものは必ずそこで祈りをささげに行っていたほどの聖なる気に満ち溢れた塔だったのですが、何時からか魔物が現れ、魔の気配に満ちた塔になってしまったのです。幸い教会付近には強力な結界が張ってあり、魔物は近づくこともできません。しかし魔物が少しずつですが結界の力を弱めていっているのです。シスター達は皆強力な結界を張れる者ばかりですが、教会には見習いシスターが多くいますし、良家の子女達を何人もお預かりしているため万一のこ

とがあってはと思い、塔に結界を張ろうと思っています」

ああ、そういえばフローラって今はこの教会で育てられているんだっけ？

「そんなわけで、あなたに塔付近で結界を張るためのシスターの護衛をして欲しいのです。ラインハットの国王様にも頼みまして、兵士達を派遣してもらえることになりましたが、国王様からあなたのことを紹介されて、私が直に頼むべきだと思い、ここに来たのです」

さすがあの教会のシスターだな。俺の人となりを知るためでもあるのだろうが、ここまで足を運ぶとは。デールが使いを出せばそれで済むことなのにな。誠実であり敬虔である、か。シスターは皆良妻になれると言われるはずだな。さすがお嫁さんにしたい職業Ｎｏ１だ。

「それと、ラインハットの国王様から手紙を預かっております」

手渡されたデールが書いた手紙を読む。

『

リュカさんへ

シスターから話を聞いていると思いますが、神の塔に結界を張るためシスターの護衛を行なってもらいたいのです。

昨今の魔物の凶暴化はなんとしても止めたい、しかし原因を調査していますが未だ不明です。

これは光の教団が絡んでいると思いますが、彼らはラインハット

では活動をしていないため、情報が得られず調査がうまくいっていません。

おっと話がそれてしまいました。

凶暴化する魔物から被害を抑えるためには結界を張れるシスターや神官は必要不可欠です。

海辺の教会は、強力な結界を張れるシスター達を育てることで有名な修道院でもあります。

だから被害が出る前に対処したいので、協力をお願いします。

もっともリュカさんなら、僕の言っていることを理解できているので、断ることはしないと思ってますが。

最後に

護衛の仕事が終わったら、僕に会いに来て欲しいです。最後にリュカさんに会ったのはもう数ヶ月は前のことですよ。

ひさしぶりに顔を見せに来てください。

デールより

『

なるほど、たしかにこれは世界の平和、ひいては俺の平和を守るために必要なことだ。

「わかりました。引き受けます。教会へはいつ行けばいいのですか？」

「明後日、私と一緒に教会へ出発していただけますか？準備に時間がかあるのであれば、もう少し伸ばせます。それとお城の兵士さんが護衛としてついてきてもらってますので、皆さんも一緒に教会へ行くことになっています。もちろん兵士さんたちは女性のみです」

「女性に囲まれて嬉しい反面、男一人と言うのはちょっと怖いですね。では明後日に出発ですね」

「はい。お願いします」

「では、俺は準備がありますので、これで」

さて、さっさと荷物をまとめるか。

「あ、リュカ。話があるから私も部屋について行くわ」

「ああ、いいよ」

一体何なんだろうか？ってまあ予想はつくけどね。

8

「私も一緒に連れてって」

俺の部屋に着くなり、ビアンカはそう言った。

予想はしていたがやっぱりか。

ビアンカは前々から俺の仕事についてきたいと言っていたし、たまについてきたことがある。例えば商人の護衛でオラクルベリーに行ったときとかだ。

あの時はダンカンさんとかなりケンカしていたが、女将さんの仲裁で結局俺についてくる事になった。

ビアンカは天空人、勇者の血を引いているだけあってそれなりに強い。

今のレベルは１０。

攻撃魔法の最大火力はメラミ、範囲攻撃はベギラマ。

回復魔法は使えないが、バイキルト、マヌーサ、ラリホー、ルカニを使える。

魔法は俺が教えているので、たぶんゲームよりも使えるようになっているんだろうな。

それといつの間にか購入したのかチェーンクロス、身かわしの服を持っていた。

オラクルベリーまでの道中に現れる魔物では全く苦戦してしなかった。

たしかに戦力にはなるかもしれない。兵士の後ろで補助魔法だけ使っているだけでもかなり助かるはずだ。

ラインハットの兵士の９割以上は魔法を使えない。使えてもホイミや、キアリーやメラ、ギラのような初級魔法だけだ。中級魔法を使える人なんて王族の専属教育係ぐらいだ。上級魔法にいたってはおそらく数十人ほどしかこの世界にはいないと思う。

別に着いてきてもいいが、ダンカンさんのことを考えると、俺は賛成できない。ダンカンさんの了承が得られればと言う条件付きならいいか。今回の仕事内容ならまず反対するだろうし。

「ダンカンさんに話して許可は得られればいいよ」

「本当ね！」

「ああ」

「なら、話してくる！」

そう言って、ビアンカは部屋を出て行った。どたどたと走っていく音が聞こえる。

まったく、何を急いでいるんだろうか。

ま、残念だけどダンカンさんが許可するなんてありえないと思うけどな。

それよりも持っていくものを考えよう。

ますは商人の護衛の仕事で持っていくもの。装備品、薬草セット、エルフの飲み薬を1つ、着替えやら、食料。

今回特別に必要なものは……特にないな。いつもどおりか。

はぁ、もうまとめ終わってしまった。

ま、いいか。特に気を張る必要はないだろう。いつもの護衛の仕事みたいにやるだけだ。

『バタン！』

「リュカ！お父さんはついていってもいいって！」

ドアを乱暴に開けて、部屋に入ってきたビアンカは開口一番にそ

う言った。

「やっぱりな、駄目だっただろ、っていいのか！？」

「うん！」

笑顔でそういうビアンカ、やべめちゃくちゃ可愛い。ッて違うだろ。

「ちゃんとシスターの、結界を張るために護衛、魔物と戦う仕事だって言ったのか？」

「言ったよ。でもリュカが父さんが許可するならいいって言っていたって言ったら、ならついていっていいよって」

俺の強さ、判断が信頼されているってことか。もしも、万が一のことが起きたときはビアンカだけは絶対に逃がす。ま、そんなことは起きないと思うが。

「わかったよ。なら準備していてくれ。出発は」

「明後日でしょ。大丈夫」

「なら、そういうことで」

「うん。さっそく支度してくる」

ビアンカはまたまた、どたどたと音をたてて走っていった。

そんなに町の外に出られるのが嬉しかったのか？

町で一番の美少女で、町で唯一のかなり大きなな宿屋の看板娘と

言われていてもおてんばなところは変わっていないな。まあ、そんなところもビアンカらしくていいと思うけどね。

あの後、ダンカンさんに話を聞いたが、俺の強さは知っているし、判断を誤ることはないだろうからビアンカを連れて行ってくれと言われた。その後で、ビアンカにもしものことがあれば責任は取ってもらうとも言われた。

責任重大だな。とはいえ言われなくとも万が一のことは起きないようにするさ。

「では出発します」

というわけで、ラインハットから派遣された女性だけの隊の隊長の言葉で、俺達はアルカパの町から出発した。

シスター、や一部の兵士が２つある馬車に乗り、俺、ビアンカ、戦闘時の兵達のまとめ役と兵達数人が歩いて護衛している。

「あ、魔物だ」

「構え！」

兵士達が槍を構える。

「バギ」

『スパン』

まさに瞬殺である。これで戦闘終了。

正直このあたりの魔物は弱すぎて話にならない。

俺がでしゃばらなくてもこの隊の兵士達も隊長とかなら複数に囲まれても一人で倒せるだろう。兵士達はけっこういい装備、鉄の槍や鉄のたて、鎖帷子、革の帽子を装備しているし。それこそ災害規模の大群相手以外ならこの当りの魔物に不覚を取るようなことはない。

「うーん。さすがにこのあたりの魔物は弱いわね」

「だな」

それからの戦闘も、一瞬でかたがつき、道中何事もなく２０日ほどで教会へと着いた。

海辺の教会はかなり大きかった。
ラインハットの城の2階建てくらいの教会、と言うより館と言ったほうがいい建物だった。

「ようこそ海辺の教会へ。皆さん、今日、明日はこの教会で旅の疲れを癒していってください。明後日からは護衛の件よろしくお願いします」

年配のシスターからそう言われた後、泊まる部屋の割り振りを行なった。
俺は一人部屋になったが、いいのか？

「え～と、さすがに俺一人っていうのはまずいというか、誰か監視とかしなくてもいいんですか？」

「あなたは信頼に足る人だとあの娘が言っておりましたので、私はそれを信じております」

「なら、私が一緒の部屋でリュカを見張ります」

「ふふっ、それなら大丈夫ですわね」

年配のシスターの言葉にビアンカがそう言うが、それはそれでまずいだろ。ビアンカは、その、魅力的過ぎる。いくら俺でも理性が切れるかもしれない。

ってかシスター、なんでそんな微笑ましそうに笑っているんですか。

「あの、それなら、私も一緒にご一緒してもよろしいでしょうか？」

いきなり声をかけてきたのは、水色の髪の楚々としたシスター、いやシスターの格好じゃない。この娘は誰なのだろうか？いや、見覚えと言うか、感に来るものが…。

「フローラさん」

ああ、そうだ！この娘がフローラか！

昔会った、というか一目見たことはあったが、あの時は混乱していたし、何より子供だっただからなぁ。

成長した今は、確かに深窓の令嬢って感じだ。活発だが色気があるビアンカとは違った魅力だ。こう守ってあげたい感じがする美少女だ。日本人なら大和撫子って言葉が思い浮かぶような。

そこらの女性とはオーラが違いすぎる。こんな美少女、美女がおそらく世界一の富豪の娘、そりゃゲームでのイベントで婿になりたい人がわんさか出てたわけだ。

「駄目ですか？」

「あなたは教会でお預かりしている大事な身です。何かあってからでは遅いのです。ですから」

「ですが、この方はきっと女性を傷つけるようなことはしません。私はそう思います」

なんでこんなに信じられているんだろうか？わからん。

「でもあなたは可愛いし、リュカだって男だからもしものことがあるかもしれないし」

「それはあなたでもそう言えると思います」

なんでこんなことになっているんだろうなぁ。ビアンカもなんでいきなり同室でいいとか言うんだろうか。

…もしかしてビアンカって俺に好意を持ってくれているのか？いやでも、そんなわけあるかなぁ。浮いた話も聞かないし、なんだかんだでいつも一緒にいる気がする。でも、面と向かって聞くのはちょっとな。違っていたら恥ずかしいってレベルじゃないぞ。

「……はぁ、わかりました。リュカさん、くれぐれも間違いを起こさないで下さいね。それとビアンカさん。よろしくお願いします」

えぇー！なんでそうなるの？

「ちょ、ちょっと待ってください。男としては嬉しいんですがさすがにまずいと思います。馬車があることだし、夜は馬車で寝ますよ。この教会の結界なら魔物も襲ってくることなんてないでしょうし。リラックスして寝れますから」

「さすがにそれは駄目です。そのようなことはシスターとして見過ごせません」

いや、でも女性と男性が同室って言うのも無理がありますよ。

「そうよ。リュカもちゃんと休んだほうがいいわ」

「そうですよ。リュカ様。私なら大丈夫です。あなたはきっと優しい方でしょうから」

なんでこんなことに……。

8　幕間～ビアンカ～

私は幼馴染のことが好きだ。
私の幼馴染は天才魔道士と称されている。
いくつもの魔法を使い生活に役立てている。アルカパの町では誰よりも頼りにされているほどだ。もちろん魔物との戦いでも魔法を使え、ラインハット地方の魔物は瞬殺してしまう。
そんな幼馴染だが、私は天才魔道士だから好きになったわけではない。
幼馴染の名前はリュカ。
私のお父さんとリュカのお父さん、パパスおじさまが知り合いで、まだリュカが覚えていないほどちっちゃなころ私とリュカは出会った。そのときは当然恋心など抱かなかった。
それから数年して、お父さんの病気を治す薬を取りにサンタローズの村に行ったときに再会した。
そのときはちょっと大人びた子だ、と思っていた。
その他と、アルカパの町に一緒に行った。
アルカパに滞在しているとき、レヌール城の幽霊退治をパパスおじさまが引き受け、リュカも着いていった。そのかえりに私に銀のティーポットやカップ、トレイをお土産でくれた。
たぶんその時だろう私が淡い恋心を抱いたのは。
その後はリュカはサンタローズの村に帰ってしまい、さらにパパスおじさまの仕事でラインハットのお城に行ってしまい会えない日々が続いた。
用事でお母さんと一緒にサンタローズの村に行ったときに一度会えたが、すぐにリュカはラインハットへ戻っていった。
その後、半年ほどでリュカはサンタローズに戻ってきた。その後会いにきてくれたときに銀の髪飾りを私にくれた。
銀の髪飾りをすぐにつけた私を見て、『似合ってるよ、可愛い』

とリュカが言ってくれて心がどきどきしたことを今でも覚えている。
その後は3年ほどリュカはサンタローズの村に住んでいて、たまに会うぐらいだったのだが、パパスおじさまが旅に出るということでリュカを家で預かることになった。
一緒に暮らすようになって、いろいろなリュカを知った。
魔法についてはすごく真剣に勉強していること。
剣術の稽古もしていて、そこらの兵士相手では相手にならないこと。
実はおいしいものに目がないこと。
本を読み始めるとついつい集中して夜更かししてしまうこと。
子供達に魔法を教えているときはなんだかんだで面倒見が良くて、子供達がわかるまで教えてあげること。
私はどんどんリュカに惹かれていった。
何時からか、私が女として自覚するようになってから、リュカの私の身体を見る眼が他の男と同じ目になった。他の男に見られると嫌悪感ががするのだが、リュカだと感じない。それどころか嬉しいとさえ思ってしまった。
リュカは私の身体に欲情してくれている。そう思うといけない気持ちになってしまうほどだ。
でも、不安になる。リュカは欲情してくれても好意を抱いていないのではないかと思うからだ。
リュカは基本的に誰にでも優しい。本人は興味がないとか言っているが私は照れ隠しだと思っている。
だからこそ不安になる。私に優しいのも他の人と同じに優しくしてくれていると思っているから。私はリュカの特別になりたいのだ。
リュカはモテる。あれだけ強くて、理知的で、優しいのだ。当たり前かもしれない。
本人は気づいていないが、町の年頃の女性ならリュカに求婚されれば誰でもＯＫするだろう。
もっとも町の人たちは私がいつもリュカと一緒にいるので、リュ

カに告白するような人はいない。しかし、それでもリュカに告白する人は出てくるだろう。
その前に何とかリュカに思いを伝えたいのだが、拒絶されたらと思うと、できなくなる。
はぁ、いつかは思いを伝えたいものね。

9（前書き）

今回はかなり暴走してます。
表現がアウトかも知れないので、アウトだと判断された場合は編集します。

9

修道院、海辺の教会で身体を休めた後、結界を張るための数人のシスターを加え、神の塔へ出発した。

海辺の教会周辺にはまったく魔物がいなかったが、神の塔へ近づくに連れて魔物の襲撃がどんどん増えていった。

とはいえ雑魚なので一回の戦闘は瞬殺といえる内容だった。が、とにかく襲撃が多くなっていき、神の塔へつくころには疲労が激しく、ラインハットの兵士達の大半がもう戦えそうになかった。

薬草や食料なども尽きかけていた。

「ここは、このあたりに結界を張って一度教会へ戻りませんか？」

シスター、隊長とこれからどうするかの話し合いで俺はそう提案した。

「それがいいですね」

「時間はかかりますが、これほど魔物がいたのでは仕方ありませんね。塔周辺に結界を張って、教会に戻り、随時休暇を取ると同時にオラクルベリーの町で補給を行い、その後、塔へ出発。こんな感じですね」

ラインハットのシスター護衛隊の隊長はさすがに軍人だけあって、正確にこの後の行動を予想した。

当然俺も賛成だ。

「そうですね。次に来るときは魔物の襲撃もないだろうし、塔まで来るのにも時間がかからないでしょうから。確実に結界を張るため

にもそれがいいですね」

と言うわけで塔周辺に結界を張り終わりしだい、教会で一旦戻ることになった。

塔まで来るのに５０日近くかかったので、一度ダンカンさんに手紙とか出しておいたほうがいいか。ビアンカにも伝えておこう、キメラの翼？そんな便利なものはこの世界にはない。一度行った場所へ瞬間移動できるとかなんてありえない。

なのでこの世界は時間をかけて旅をするしかない。移動手段は船が一番早い。馬車も陸では早いが、魔物が襲ってくるために荷物を運ぶためにしか使われない。決して早く移動するためのものではない。

会議も終わったし、俺はビアンカにこれからのことと手紙のことを話しておくか。

「ビアンカ？今、大丈夫か？」

仮設したテントに声をかける。兵士やシスターが共用なのでいきなり入るわけにもいかない。

兵士達はこういう時のために訓練しているから、男に裸を見られても平気だし、おおらかだ。実際魔物の討伐隊でとかでは男も女もない。

だがシスターはそうはいかない。護衛のため、兵士達と一緒のテントに分かれて利用しているから、気を使う。

「そっちに行くわ」

すぐにテントからビアンカが出てきた。

「会議はどうだったの？」

ちょっと離れた場所から話しかけてくるビアンカ。
どうやら、最近ずっと風呂に入れていないので、臭うから近くに寄らないで欲しいのだそうだ。
風呂は、穴を掘って、ヒャダルコを唱え、それをメラミで溶かして、メラで温度を調節すればいい。ドラム缶のような大きなものを使ってもいい。
最初は俺やビアンカが風呂を用意していたのだが、それすら出来ないほどＭＰを使うようになってきたので、ここ最近はたまにしか風呂を用意できなかった。
そんなわけでビアンカは匂いが嗅がれたくないので離れた場所から話をするようになった。

「ああ、塔周辺に結界を張ったら、一旦教会まで戻ることになったよ」

「そうよね。さすがに疲れているのに、魔物であふれているだろう塔の中に入るのは危険よね」

「そういうこと。それと、今日は俺が風呂を用意するよ。このあたりの魔物はほとんど倒したから、襲撃もあまり起きないだろうしな。今日は魔法をあまり使っていないし」

「やった！さすがにこんなにずっとお風呂に入れないのは辛かったわ」

「とりあえずこの近くで結界を張ったら、今日はもう終わり。ゆっくり休めるはずだ」

「リュカは大丈夫なの？」

「余裕ではないけど、まだ平気かな」

さすがに直接攻撃主体では戦いたくないけど。

「そっか。やっぱりリュカは強いね」

ただのチートだよ。

「そうかもね」

「じゃあ。もうちょっとがんばりましょうか」

「ああ」

役１０日間ほどかけて塔までの道に結界を張り終わり、教会へ戻ってきた。
そして、俺はすぐに用事があるからとオラクルベリーに一人でやってきた。
目的は、女を買うことだ。
お前は何をしているんだ？と言われそうだが、俺以外女だけの集団で旅（基本野宿の）をしていて、その上何度も魔物と戦闘を行なって気が昂ぶっている、そんなときに修道院に泊まってみろ、絶対に理性が崩壊する。
もう、結構前からムラムラムラムラして余裕がないんだ。ビアンカを何度か襲いそうになったほどだ。
そんなわけで俺は性欲を発散しに来た。
金ならこの依頼で魔物を倒し続けてきた分で充分だ。全員で分けてもかなりの額になった。
夜のオラクルベリー、カジノ周辺やそういったこと用の宿屋周辺にいる女を物色する。
まずは胸が多くないといけない。おっぱい
胸が大きい女をマークし、次に顔はちょっときつめのがいい。
はずれ、はずれ、○、はずれ、○、◎。
うん、あの人にしよう。すごく好みだ。
黒髪に赤いバラの髪飾りと左目下に泣きボクロがある女性。きつそうな性格をしてそうな顔立ち。好みのタイプだ。服は動きやすそうなシルクワンピースを改造したものを着ている。胸がはみ出しており、巨乳と一目でわかる。
「そこのお姉さん。俺とどうかな？」
こんな感じで誘えばいいのだろうか？何せはじめてのことだからわからない。

「何？あんた？……ああ、私を商売女と勘違いしてるの。一緒にしないでよね」

え、娼婦じゃないのか？

「何？その間抜けな顔は、私が商売女じゃないなんて見ればわかるでしょ」

…いや、わからない。

「ま、そういうことで残念でした」

そう言って女はカジノのほうに去っていった。

ああ、タイプだったのに残念だ。

次点の人にしよう。

次の日、俺はご休憩用の宿屋のベッドで眼が覚めた。

その後、隣で寝ていた、黒髪の人の次に誘った女性が起きるのを待ってから、無茶をしたのでその分多くお金を渡した。その後、風呂に入って宿屋から出た。

お腹が空いたので、レストランで適当に注文し、空腹を満たした。

しかし、あの胸は良かった。おっぱい。
眺めて良し、揉んで良し、吸って良しのおっぱいだった。おっぱい。
ああ、いかん。思考がピンク色になってしまう。
しかし、仕方ないことかもしれない。この世界では初めてになるのだし。それにしてもこんな簡単に女性を抱けるとか、ますいなぁ、ハマってしまいそうだ。
なにせ値段が安い。俺がアルカパで一日魔物を倒し続ければ、お釣りが来るくらいに稼げる。
このあたりやもっと強い地域だと倍以上に稼げるからなぁ。
まぁ、無理はいけないし、適度に発散するようにしよう。
それと宿を出るとき耳に挟んだんだが、キアリーをかけておくか、毒消し草を飲んだほうがいいらしい。病気もそれだけで移らなくなるそうだ。さすがファンタジーだ。
さて、手紙を出したら、教会に戻るか。

「ん、あんたは昨日の勘違い男じゃない」

いきなり声をかけてきたのは昨日の◎の女性だ。

「あんた、暇でしょ。ちょっと私に付き合いなさいよ」

この女性はいきなり何を言っているんだろうか？

「実はさぁ、私の妹が海辺の教会に預けられているんだけど、せっかく近くまで来たんだから会いにいこうと思うのよ。だから道案内しなさい」

つまり、（妹に会いに行きたいの。お願い道案内してください）ってことか。この女性の言ってることはツンデレ解釈すればいいの

か。

「当然引き受けるでしょ？この私に命じられているんだから」

（引き受けてください。お願いします）

「…手紙を出した後ならいいけど」

「まあいいわ。私ここで待っているから、早く出しに行ってきなさい。ありがたく思いなさいよね、私と一緒にいられるんだから」

（いいですよ。私はここで待ってますね。それと、引き受けてくれてありがとうございます）

やばいこの人、典型的なツンデレだ。リアルツンデレキター！って感じだな。

手紙を出した後、女性と合流し教会へ出発した。

もうここらで魔物が現れることはないだろうから、移動が楽だ。

「そういえば、あんたの名前を聞いてなかったわ。教えなさいよ」
（名前を教えてくださいませんか？）
「リュカ。今はここから北にあるアルカパの町に住んでる」
「へえ、私の名前と比べるのはかわいそうだけど、結構いい名前ね」
（いい名前ですね）
「あなたは？」
「デボラよ。サラボナ一の富豪で大商人ルドマンの娘よ。パパがカジノ船の中のカジノの参考にここのカジノを見学しているのよ。私は暇だったからついてきたのよカジノで遊んでみたかったしね。まあまあカジノは面白かったわ」
（デボラです。サラボナ一の富豪で大商人ルドマンの娘です。カジノに興味があったから父の仕事についてきたんです。カジノはすごく面白かったですよ）
ってデボラ！？
……たしかにちょっとケバい色っぽさ。ツン９デレ１。ゲームとほぼ同じ雰囲気だ。
ドラクエ？で一番お気に入りのキャラなのに何で気づかなかったんだろう……昨日は俺の理性に余裕がなかったからか。
「もしかして妹さんってフローラさん？」
「何で知ってるの？」

と警戒される。

「ああ、実はシスターから魔物が凶暴化しているから結界を張るために護衛の依頼があったんだ。それで少し前まで護衛の仕事についていて、一度教会に戻ることになったから、まあ昨日のようなことを」

「ああ、女だけしかいないもんね、あの教会。ん？あんたってどう見てもまだ子供だけど強いの？」

（女だけの中で大変だったでしょう？あれ？あなたって私よりも年下にしか見えないけど強いんですか？）

「まあ、それなりかな？」

「ふーん、まったく強さそうには見えないけど」

（全然そんな風には見えませんよ♪）

「まあいいわ、さっさといきましょう。野宿なんて絶対嫌よ」

（私、野宿なんてできません。だから早く行きましょう）

ゲームと全然と違った出会いだな。

ゲームと展開が乖離してしまったから当然か。

10

「ねえ、リュカ？そこの女の人は誰なのかしら？」

デボラと一緒に教会に戻った俺を待っていたのは、馬車用の馬と戯れていたビアンカだった。

しかし俺とデボラを見て、阿修羅を凌駕した存在に変化した。いや、さすがにそこまでではないが。

俺のレベルが高いからか、俺は人と接するときにあまりプレッシャーとかを感じない。どれだけ偉い人でも本能が生物として下位に感じているのだろう。そうじゃなきゃ俺みたいな中の人が精神的にいつも余裕を保っていられるわけがない。

そういえば、ダンカンさんの宿屋に居候してからビアンカが俺に怒ったことなんて一度もない。

夜に本を読むことに集中しすぎて朝起きるのが遅くなったりするときは、ガミガミと説教はするが怒ってはいない。

俺だってビアンカみたいな美少女が幼馴染なら、誕生日は欠かさずプレゼントを贈るし、普段から優しい態度で接してしまう。ましてや中の人はかつて２０代後半だったんだから、意地を張ったり照れ隠しで心無い言葉を吐いたりなんてしない。

この気持ち、男ならわかってくれるだろ？

言い訳、ってデボラとはなんでもないし、ビアンカとだって付き合ってるとかじゃないし普通に話せばいいか。

「え～と、この人はデボラって名前で、この教会に妹がいるから会いに来ようとしていて、偶然町で会ったから、一緒に来たんだ」

嘘は言っていない。

「本当に？」

「本当に」

じ～と俺の目を見つめてくるビアンカの目を見つめ返す。

「まあいいわ」

どうやら信じてくれたらしい。

しかし、なぜ浮気しているような気分になるのだろうか？

今のビアンカの態度から察するに、やきもちを焼いたｏｒお姉さんとして不埒なことは（ｒｙってところか。

もうちょっと、はっきり気持ちがわかったらビアンカを俺のものに出来るのに。

フローラはルドマンの試練をこなして結婚すればいい。これで美人な嫁は必ずゲットできる。いずれ王族になったら、妾とか作りたいものだ。

目指せハーレムだ。

今までは恐怖やら修行やらでものすごくストイックにやってきたが、昨日、経験をしたせいで完全にたがが外れた感じがする。俺だって男なんだ。ハーレムを作るという夢くらい見てもいいだろう？

「で、話は終わった？私はフローラに会いたいんだけど？」

じとっとした目で俺を見て、デボラはそう言った。

昨日のことといい、ビアンカのことといい、俺にあきれているのかもしれない。

「わかったよ。ビアンカ悪いけど、シスターにフローラのお姉さんが訪ねてきたって伝えてくれるか？」

俺が教会を歩き回るのはさすがにまずいからビアンカに頼む。

「しょがないわね。わかったわ」

ため息を尽きながらもビアンカは教会の中へ入っていった。

「あんた、あの娘とどういう関係なの？」

「幼馴染で、家に居候させてもらってる」

「結構かわいい娘よね。私に負けるけど」

タイプが違うから一概にどっちのほうが可愛いとは答えられない、俺的には、容姿はビアンカ、顔はデボラ、性格は同じくらいだ。ツンデレと家事万能、どっちも俺のタイプだ。

塔への出発の日と、必要な物資について話し合ったあと、割り当てられた部屋に戻ると、ビアンカ、フローラ、デボラが話をしていた。

「リュカ、おかえり」

「リュカさん、お疲れ様です」

「ああ。3人で何を話していたんだ？」

「女だけで話していたことを聞きたいなんて、変態ね」

秘密、ということか。

「ああ、それと私も今日ここに泊まっていくから」

……なぜ？

「別にビアンカもフローラもいるんだから、私一人増えても問題ないでしょ？昨日はお楽しみだったしね」

「わかったから、それは」

「はいはい」

「お二人は何の事を話されているんですか？」

「秘密よ」

ビアンカのほうを見ると、じっとこちらを見てきた。
ああ、これはたぶんバレてる。
「そういえば、塔で魔物と戦うんでしょ？あんたがリーダーみたいなもんだって聞いたわよ。私もついていこうと思うんだけど、当然いいわよね」
「ね、姉さん、さすがにそれは……」
「別にいいでしょ。それに私結構強いわよ」
いや、デボラみたいなタイプの女性と一緒というのは嬉しいが、今の状態だと無理だな。
まずはレベルや強さを聞いて、それとオラクルベリーにいるルドマンに許可を得ないと駄目だな。もしもデボラに何かあったら、こっちが責任を取らないいけなくなる。
たとえデボラが無理やりついてきても、権力者は非を認めないことが多い。ルドマンは人格者で元冒険者だというが、それはゲームでの話しだしな。
「まず強いかどうか確かめさせてもらい足手まといにならないレベルだと判断できたら、後デボラの父さんに許可を得ること、この二つが条件だ」
「へえ、いいわよ。なら今すぐに強いかどうか確かめてもらおうじゃない」

とうわけで、教会の外の草原、結界が張ってあって魔物が全くいない場所で今からデボラと戦うことになった。
俺はさすがに真剣を使うわけにもいかず、ひのきの棒を持っている。服はいつもの装備だ。

「それじゃあ、本気でいくわよ！」

声とともにデボラはこっちに突っ込んできた。
早い！

「ふん！せい！」

ボクサーのようなパンチを次々と繰り出してくる。
どうやらこの世界のデボラは肉弾戦が得意なようだ。
こっちもやられっぱなしでは駄目だし、ひのきの棒で攻撃するか。

「てい」

デボラは、拳、革か何かで出来た指が出てる厚い手袋をつけている、でひのきの棒を弾き、弾きながらも足を止めずに間合いをつめて、俺にパンチを繰り出す。
が、何度か同じ展開が続き、デボラは苛々したのか間合いを取っ

た。
一体、何をするつもりだ？
「メラ、火炎突き！」
うわ！？メラを纏った拳でパンチしてきた。
まさに魔法拳だ！
「バギマ！」
真空波を含まない突風だけになるように調節したバギマをデボラに向かって放つ。
「くっ、この！」
デボラの拳から炎が消える。
デボラは手を交差させて、突風を受けて踏ん張った。
少なくとも肉弾戦では兵士達よりも強いだろうな。ビアンカだって、これを受けたらよろけて隙が出来るのに、デボラは突風を耐えながらも俺を警戒し、すぐに攻撃できるようにしていた。
「ここまでだな」
「まだ私は戦えるわよ」
「いや、どれだけ強いかはわかったからいい。そういえばレベルを聞いていなかった、俺は２１だ」
「私は１８よ」

ああ、それは強いわけだ。もし魔法なしの戦いだったら、ほぼ互角の強さだろう。

「通りで強いわけだ」

「あんただってパパの雇ってる兵隊の隊長と同じぐらいの強さみたいだったわ、認めてあげてもいいわよ。それにあんた本気じゃなかったでしょ？たぶんあんたは直接攻撃よりも魔法のほうが得意だと思うわ」

「その通りだよ。父さんから正当な剣術を習っていたけど、魔法のほうが得意だ。直接戦闘も出来るけどね」

「なるほどね。確かにあんたは強いわね。認めてあげるわ。そうだ、明日あんたもパパに会いに来なさい」

「一応の責任者として話をしておかないとまずいし、それはついて行くさ」

「ならいいわ」

デボラが一瞬ニヤっと笑った気がするがなんだろうか？
気のせい…か？

「ふう、汗かいたからお風呂に入りたいわ。お風呂ないの？」

「あるけど」

「今から入るから、ああ、ヒャドとメラが使えるから、自分で用意するわ」

ん？着替えとかどうするんだろうか？デボラは荷物を何も持っていなかったはずだけど？
いや小さめのポーチを持っていたか。でも、それじゃあ小さすぎるか。

「荷物とかはないようだけど、着替えとかってどうするんだ？」

「ああ、パパの商店が開発した中に空間を閉じ込めてある魔法の袋、このポーチがあるから、それなりの荷物は入るのよ。じゃ、私はお風呂に入ってくるから」

そう言って、デボラはさっさと教会に戻っていった。
あのポーチ、ようは主人公がはじめから持っている袋なのか。しかしどうやって開発したんだろうか？
明日ルドマンに聞いてみればいいか。
それにしてもデボラはゲームと結構違うな。俺が影響を与えたということもないのに、性格や強さがかなり違っている。
わがままでツンデレなところはゲームと同じだけど比較的マイルドだし、何よりも強い。この世界のデボラは一体どんな風に育てられたんだろうか？
ルドマンか…そういえばルドマンは元冒険者だったはず。もしかしたら、デボラは冒険者として育てられたのかもしれない。
ルドマンとはコネを作っておきたい。
光の教団と魔界の魔物との戦いで、彼の財力は必要不可欠だ。
グランバニアに戻って、パパスが王位に戻っても財力は必須だ。
グランバニアの強力な兵士達とルドマンの財力、これがあれば光の教団と魔界の魔物との戦いはかなり有利に進めるはずだ。そしてその後の平和になった時代にも……。
まずは実際にあって、どんな人柄か見極めないといけないな。

11

オラクルベリーに着き、ルドマンに会いに行ったらルドマンはカジノ船の建設について話をしていたため、取次ぎが出来なかった。
しかしそこはわがままなデボラ。『邪魔よ』の一言で無理やりルドマンに会いに行った。
俺はこれがデボラだよなぁなどど思いつつ、デボラについていった。

「パパ、話があるんだけど」

「デボラ、またお前は……む、後ろにいる少年は誰だね？もしやお前の恋人！？」

なんで、いきなりそんなことを思うんだ？

「違うわよ。実は……」

デボラは今回の件について話し始めた。

「おお、君が噂のリュカ君か。いやいや、ラインハット地方の天才魔道士の噂は聞いたことがあったのでね。一度会ってみたいと思っていたんだよ」

デボラから説明を受け、俺の名前を聞くと、ルドマン氏は手を差し出した。

「リュカです。デボラさんが神の塔の魔物退治と結界を張るまでの護衛に参加したいとのことで、俺がルドマン氏に説明に来ました」

握手しながら、ルドマンの冒険者としての実力を感じた。

おそらく、才能なら俺やデボラのほうが圧倒的にあるだろうが、若いころ冒険者をしていたはずだけあって、そこらの冒険者や兵士よりも実力があるように思えた。あくまで経験と、本能から来る感なので、絶対とは言えないが。

「普段はわがままで手のかかる娘なのだが、この娘は一度決めたら絶対に意見を覆さない頑固者でね。何時からか冒険者として強くなりたいと言い出してね、最初はただの思い付きだと思っていたのだが、毎日汗をかきながら訓練するのをやめなかった。今回もデボラなりに思うところがあってこんなことを言い出したのだろうと私は思っている。君がよければデボラを連れて行ってくれないかね？」

すごい常識人です。ゲームだともっとぶっ飛んでる感じだったんだが…。

「それは大丈夫です。昨日腕試しをさせてもらい、彼女の強さを計

りましたから」

「そうか。君が認めるくらいにはこの娘も強くなっているのか……ああ、君の強さについては心配していない。私も今は太ったおっさんだが、昔はこれでもそれなりの冒険者だったのでね、腕こそさび付いてしまっているものの、経験からある程度の強さは感じられる。さっき握手したとき、まるで固体種の少ない強力な魔物を対峙したときのような感じがしたからな。しかし昔を思い出すよ。長い冒険の末、私は今の妻と結婚をしたのだしな、ああ、冒険か、懐かしい…」

さすがに年季が違うということだろう。

しかし、話が脱線している気がする…。ルドマンは遠い目でかつての冒険を思い出すことに耽っていた。

「む！そうだ！」

いきなり、何かを思いついたのか、俺のほうへぐっと身を乗り出してきた。

「いっそこれを機にデボラと婚約しないかね？私は君が望むなら家を継いでもらっても構わないよ」（間違いなく美女といえる娘だが、その性格から絶対にこの娘は嫁き遅れる、だが彼のような強い男ならこの娘を御せるかもしれん、我ながらいい考えかもしれん）

「まあ、好みの女性ではあるんですけど、さすがに今は結婚とかは考えていないので」

「それもそうだな、はっはっは！いや、私は娘達の相手は冒険者として強い男ではなければいけないと思っているのだよ。大商人とし

てなど金があれば何とかなるし、何より冒険者として強い男は、自らの行動に自信を持ち、なおかつ慎重さがあるはずだからな」

冒険者として強いなら、行動に自信がある。これはわかる、レベルが上がると、人間としての格が強くなり、他者からの重圧とかを感じなくなる。

アルカパの町で、ビアンカのことが好きな奴らの嫉妬を受けても痛くも痒くもなかった。

おそらく前の世界の俺なら、ビビッてビアンカを遠ざけたりしたかもしれないのに、だ。

奴らはどれほど俺を恨んでも、俺に危害をくわえることがなかった。おそらくだがレベル差による雑魚を寄せ付けないということがこの世界でも起きているからだと思っている。

魔物の場合はある程度のレベル差でも構わず襲ってくる。これは魔界の瘴気により凶暴化させられているためだろう。

少し話がそれた。

とにかくこの世界ではレベル差と言うものはある程度絶対的な人としての強さの違いになり、レベルの低い人はレベルの高いに本能がしたがってしまうのだろう。レベル差には半強制的なカリスマみたいなものがある。

とはいえ、あくまで半強制だ。それこそ王妃のような欲深すぎる人間はレベル差とか気にせず、暗殺だの毒殺だのとかいった行動を起こす。

「まあ、君の気が変わればいつでも言ってくれたまえ。すぐにでもデボラと婚約、結婚させてあげよう」

やっぱりゲームと同じくルドマンはぶっ飛んでいた。

「パパ！勝手に私の相手を決めないで頂戴！……ま、リュカくらい

強い奴なら認めてあげなくもないけど。そうね、土下座して、どうしても私でなければ駄目だって言うなら、そのときは考えてあげるわ」

これは、要は家の都合での結婚相手としてなら認められるってことだな。

さすがデボラだ。このＳッ気を含んだツンとツンデレ的に考えるとデレを含んでいるとわかるところがゲームだとよかったんだよなぁ。

実は子供達に愛情を注いでいるし、王妃として考えると、実はかなりはまってるんじゃないのだろうか？おそらくルドマンが教育してるだろうから、経済とか政治とかもある程度は理解しているのかもしれないし。

なによりデボラは馬鹿には見えないしな。わがままでＳッ気があってツンデレだが、結構教養はあると思う。

「むう……ま、まあいい」

ルドマンが冷や汗をかいている。デボラの扱いにきっと手を焼いているんだろうなぁ。

「そういうわけで、デボラを連れて行ってもいい。リュカ君、デボラを頼んだ。デボラも迷惑をかけないようにな」

「大丈夫。私が足手まといになるわけないでしょ？」

「では、私は仕事があるので、これで失礼するよ」

そう言って、ルドマン氏は先ほどデボラが来るまで話していた、カジノの関係者と話し始めた。

いきなりの訪問にもかかわらず、仕事より娘を優先するとか、ルドマンは子煩悩なところがある。フローラの婿になる男にリングを取って来いとか言っていたのも娘のために良かれと思ってやったんだよなぁ。

実際、この世界では感じたが光の教団の暗躍や魔物の凶暴化があるから、強い人がいい男の条件になっている傾向がある。一部地域ではかなり魔物の凶暴化が起きたそうだし、人攫いの暗躍もある。

フローラを守ってやれる男でなければ結婚しても不幸になると思っているんだろう。それは今の世界状況では真理だ。

……ていうかＤＳ以外でビアンカを選んだ場合、アンディはどんな生活を送っていたんだ？商人になるわけでもなく、別荘で優雅に暮らしていた？……典型的な駄目男？

うん、ここまでアンディにアンチというか優しくない世界だと、彼がどんな奴か、ちょっと興味が沸いてきた。

いずれ、サラボナにも行った時に会ってみよう。

「まったくパパったら、余計なことまで話して…」

教会へ戻る道でデボラはブツブツとルドマンへの文句を言っていた。

「ふぅ、ま、いいわ。許可をもらえたんだし」

そう言って、デボラはポーチから水を取り出して、一口飲む。

……あ、このポーチについてルドマンに聞くの忘れてた。

どうやら、俺は思っていた以上にルドマンに会えたことに興奮していたようだ。

彼はいわば、結婚イベントの象徴みたいなものだと俺は思っている。主人公格ではないのに、ドラクエ?をやった人間なら絶対に名前を覚えているはずだ。ともすればヘンリーより知名度が高いかもしれない。

この世界に慣れたのだが、俺の中での有名人に会えたことに存外に興奮していた。

ルドマンは面白い人ではあった。今度はいろいろ話を聞いてみたいものだ。何か珍しいものでも持っていって、話を聞かせてもらうのも悪くないかもしれない。

12

俺は今、船に乗っている。
船の目的地はグランバニア。
なぜこんなことになっているか説明しよう。

神の塔の結界を張る仕事が終わり、『いつかサラボナにいく』とデボラに約束させられ、そしてデボラと別れた。
その後、デールに会いにいき、俺はアルカパの町に戻った。約1年近く続いた仕事も無事完了した。家に戻るまでが仕事です。
だが、そこで待っていたのはパパスとサンチョだった。
久しぶりの再開にいろいろ話す暇もなく、俺は二人につれられてグランバニアを目指すことになった。
道中で詳しい話を聞かされた。
なんとグランバニアがやっかいな状況になっているらしい。
ラインハットでは光の教団が動きにくいため、他の国で光の教団が暴れている。グランバニア周辺は魔物が強く、その凶暴化している魔物と戦いながら、光の教団の暗躍を防いでいるのだが、被害が少しずつ大きくなっているらしい。
グランバニアは城塞都市なので、スパイみたいに潜入するのは難しい。なのに人がさらわれる。それが原因で魔物との戦いに集中できない。
そんな状況を聞いたためにパパスはグランバニアに戻ることにしたらしい。
パパスは俺に仕事でグランバニアの状況から依頼があったと言っていたが、俺は本当のことを知っているため、当然推測できた。
そんなわけで、俺は今船に乗ってグランバニアへつくのを待って

いる状態だ。

「はあ、暇よね。この船は魔物に襲われることなんて全然ないし、魔法の練習もできないし」

隣でため息をつきながら暇をもてあましているのはデボラだ。

なぜ彼女がこの船に乗っているか、それはこの船はルドマンのものだからだ。

詳しく説明すると、俺達は急遽グランバニアを目指すことになったが、グランバニアへの直接の定期便なんて魔物の凶暴化でめったに出なくなっていたし、ポートセルミ、テルパドール経由だといかんせんたどり着くまでに時間がかかりすぎる。

直通で行けば時間が短縮される。

だから、俺はルドマンがオラクルベリーにいることを知ってたので、船を貸してもらえないか頼みに行った。

パパスにもルドマンのことを話した。

そしてオラクルベリーについた後、カジノ船の完成が間近で、そわそわしていたルドマンに事情を話した。

あまりにあつかましすぎる頼みのため、断られるか何か条件を出されるかと思っていたのだが、あっさりとＯＫが出された。その後、パパスとルドマンがなにやら話をしていたので、もしかしたらパパスの身分に見当がついていて、何か取引があったのかもしれない。

グランバニア周辺は魔物が強く、それと戦っている兵士達も屈強だ。そのうえ、特別な金属、ミスリルが多く取れる。しかし、山に囲まれ、内海からではチゾット山脈を越えなければたどり着くことが出来ず、外海からは船でグランバニア城付近まで行けるが、魔物が強く、また多く存在しているため、これも現実的ではない。

しかし、ある程度グランバニアに協力してもらえば、船での移動も可能になるはずだし、チゾット山脈を開発して道を作れば開発資金はかかるが、開発が終われば安全に他国にグランバニアの強力な

武器を売ることが出来る。
平和になった後のことを考えたら、経済を発展させ、儲ける事ができる。
また、今の世界情勢から考えても、グランバニアの強力な兵団を味方に出来れば身の安全を守れるし、光の教団を倒すことが出来るようになるかもしれない。
ルドマンとパパスはそのことを話し合い、何らかの形で協力することに合意したのではないか？と俺は睨んでいる。
そんなわけで、ルドマンの船を借りることに成功し、内海からチゾット山脈経由でグランバニアに向かうことになった。
デボラはその時話を聞いており、ついてくると言い出した。
ルドマンは、一応俺達の同行を身内が知っているなら安心だし、デボラは例によってアレだしと、許可した。
そんなわけで俺はグランバニア付近の、チゾット山脈付近の村の傍の寂れた港につくまでデボラの暇つぶしに付き合っているのであった。

「何かしてよ。暇すぎるわ」

「本でも読めばいいんじゃないか？」

この船はさすがに金持ちのルドマンの船だけあって、本がかなり納められていた。俺が読んだことのない本があったので、俺はそれを読んで暇を潰している。

「飽きたわ。それに私読書は趣味じゃないの」

「ラリホーを自分にかけて眠るとか」

「寝すぎは美容に悪いのよ」

「瞑想するとか」

「無理」

まったくどうしろと言うんだ？

「デボラには何かしたいことはないのか？」

「船の中で？無理ね」

「あきらめたら？」

「はぁ、暇ね」

と、まあ終始この調子である。

とはいえ、暇なのはわかる。

剣術と魔法の訓練が出来ないし、身体を思いっきり動かすことすら出来ない。

本を読んでいるだけでは、やっぱりストレスが溜まる。

パパスはそういうところはすごい、じっと瞑想したりして精神教養が半端じゃない。

俺も魔法の技術や習得に瞑想は必須なので、ある程度の時間は出来るが、一日中ずっとは出来ない。

ただ無心であり続けることは本当に難しい。

それをこなすパパスはやはりすごい男だ。俺は年を重ねるごとによりパパスの強さを知った。

パパスは最盛期を越えて、身体は次第に衰えてきているはずだが、それを感じさせない。

純粋にあの強さを超えることは出来ないのではないかと感じたほ

どだ。

「ふぅ、暇ね」

ふう。

このわがままなお姫様を何とかしますかね。

ビスタ港から２０日ほどでチゾット山脈付近の村の傍の寂れた港についた。

最新の船だけあって、かなり早くついたそうだ。後、この船は結界が張られていて、少しずつ魔物の気で結界が弱まっていくが、短期間なら魔物に襲われない。だからこんなに早くついたんだろう。

俺達は船から降りて早速、チゾット山脈付近の村へ移動を開始した。

途中魔物に襲われた。魔物はアルカパの町付近の魔物よりも段違いの強さだったが、パパスの剣術、俺の魔法、デボラの格闘術、盾

役のサンチョ、これだけの戦力のため簡単に撃退することが出来た。
俺はレベルが２３に、デボラは２１になった。
さすがに魔法なしでは、魔物の群れと戦うのはやや厳しい。一対一なら問題ないが。デボラも同じくらいだろう。
パパスはさすがの強さで、剣術だけでも魔物の群れを倒せる。さらに回復も出来るし。
サンチョは個人戦では最弱だが、団体戦では、魔物をひきつけておとりになり、各個撃破できるようにしてくれる。その上、補助魔法を使える。
かなりバランスがいいパーティーだと思う。俺が賢者兼戦士、パパスがバトルマスター兼僧侶、デボラが武道家拳魔法使い。サンチョが防御専門の戦士兼魔法使いってところか。
そして、すぐにチゾット山脈付近の村についた。
大きな樹、それこそこの世界でもお目にかかれないほどの巨大な樹に建物が複数並んでいる。村といえる規模はないかもしれない。
一軒だけ、大きな建物がある。どうやらあれが宿屋のようだ。
宿屋に入ると、酒場というか食事どころ兼用になっていて、ちらほらと冒険者達の姿が見える。
パパスが宿を取りに言言っている間、この村について話を聞いてみた。

どうやらこの村はネッドという名の金持ちが自然を大事にするという目的で作ったのだが、魔物の凶暴化で移住する人がいなくなってしまった。
しかし、冒険者達にとっては、強い魔物と戦えるしグランバニアを目指すことも出来るために気があり、繁盛しているのだそうだ。

魔物は弱い奴と戦うより、ある程度なら危険を犯して強い奴と戦ったほうがレベルが上がりやすいし、なによりゴールドの実入りが違う。
ここらで、レベルを上げながら金を溜める冒険者はそれなりの数がいる。
もちろん、無理して死ぬ人間もいっぱいいるそうだ。

「たしかにサラボナよりも強い魔物だったわ。ま、私の敵じゃなかったけど」

「でも、父さんみたいに直接攻撃だけで魔物の群れを倒せといわれたら、難しいな」

「リュカのパパってすごく強かったわね。剣だけあんなに魔物を倒すんだもの」

さすがのデボラもパパスのことは認めたようだ。剣だけでバッタバッタ魔物を倒していたしな。アレを見たらしょうだない。
それにしてもグランバニアって国の兵士達はどれだけの強さなんだろうか？パパス並の強さは絶対いないと思うが、もしかしたら、ラインハットの兵士達の隊長クラスが一般兵とかだったりして…いや、この強さの魔物を相手にしているのならありるかもしれない…。

「ここで何日か、身体の調子を取り戻してから、山を越えるのよね？」

「ああ。見ただけでとてつもない山だ。上のほうは雪が積もっているし、どれだけの高さなんだろうか？」

「わかんないわよ、そんなこと。わかってるのは、間違いなく疲れるってことね。魔物を相手にするより、山を越えるほうが疲れそうね」

「確かに…」

「ま、強くなれそうだし、我慢するわ」

そういえば、デボラはなんで強くなろうとしているんだろうか？

結界の仕事、船旅で一緒だったから、知り合ってからそれなりの時間を過ごしているし、趣味とか、どんな訓練してるかとかを話したこともある。

プライベートなことだけど今度聞いてみよう。

１２（後書き）

感想への返信をする気力が湧かないｏｒｚ
気力を使いたくないので、返信は気が向いたら行います。
とにかく完結だけはさせないと……。

13

「ようやく、チゾット山脈も折り返しだな」

ネッドの村かグランバニアまでの道のりの半分に位置するところ、チゾット山脈の高山にある村についた。

ここまで、3日ほどかかった。早く着いたと思うかもしれないが、山を登っていくのはかなり体力を使ったので、平地を何日も旅するよりも

疲れた気がする。それに魔物も結構強かったし。

「はぁ。ちょっと疲れたわ」

デボラもぐったりとしている。

「パパス様、今日と明日はゆっくり休みましょう。ルドマンさんの船のおかげでかなり時間を短縮できましたし、坊ちゃん達に無理をさせても

しものことがあったらいけません」

「む、そうだな。この山は慣れていない者にはかなりきついからな。サンチョの言う通りにするか」

どうやら、ゆっくり休めるようだ。

さすがに俺も疲れたな。

「ふう。今日は何もせずゆっくりするわ」

「俺も景色とか特産物を見るのは明日にする。今日は暖かい作りたての料理を食べたら、後はベッドで寝ていたい」

休めると思ったら緊張が抜けて疲労が濃くなった気がする。
さすがに今日はもう何も考えたくない……。
デボラも疲れからかいつものツン発言が出来ないようだ。

「では、宿に泊まるとするか」

「はい、お金の心配はないので一番高い宿に泊まりましょう。そのほうが疲れも取れやすくなるはずです」

安い宿や部屋のベッドは硬いからな。
ダンカンさんの宿屋に居候していたときは、お金に余裕があったから家具はいいものを揃えたからなぁ。
一番使い慣れたあのベッドがちょっと恋しい……。

チゾットの村で一泊した次の日は各自、村の中を散策した。
俺は特産物を眺めたり、いい景色が見られる場所で瞑想したりした。
その夜、俺は宿屋の外でぼ～と黄昏れているデボラを見かけた。
「何してるんだ？」
「…ちょっと昔のことを思い出してたのよ」
「…それはどんなことか聞いてもいいか？」
「いいわよ。まあ、絶対信じないと思うけど」
自嘲した後、遠くを見る目でデボラは語りだした。
「昔、私が子供のころ、そうね１０歳ぐらいのとき、妖精に会って妖精の国に行ったの。妖精の女王様の持っていた春風のフルートが盗まれたんだけど、妖精には戦う力がないから、私に取り返してもらいたいって話だったわ」
あれ？
「それで、私とお供の妖精、ベラと一緒に妖精の国を駆け回って、最後は春風のフルートを盗ませた黒幕の氷の女王を倒したの。その後、女王様から妖精の国の桜の樹の枝を貰って、気がついたら家のベッドで寝ていたわ」
俺がイベント消化しなかったから、デボラが変わりになったのか？

これもバタフライ効果っていうのかな…？

「こんな話、誰も信じないだろうから、今まで誰にも話していないのよ……ねえ、あんたはどう思う？」

「妖精の国とつながっている場所があるって本で読んだことがあるし、それに天空の神様のいる場所にはエルフと呼ばれる種族がいたらしいし、妖精もいるんじゃないか？妖精は子供にしか見えないらしいし、デボラのいう話もありえないことではないと思う」

中の人知識で、妖精がいるってこととデボラの言うことが本当の事だってわかってるからなぁ。まあ言わないけど。

「へぇ、あんたってお人好しね。ビアンカが言ってたわ、なんだかんだで人を見捨てられないって」

いや、助ける力があるなら助けるだろ。

中の人は力を手に入れても大元が小市民だから、絶対無理な状況とかじゃない限りはなるべく困っている人は助ける。

目の前で魔物に襲われている人を見捨てるとか、絶対寝覚めが悪くなる。魔物が実はラスボスだったとかじゃない限りはそりゃ助けるだろ。

「聞いてくれてありがと。私が感謝するなんてこともうないから覚えておくのね」

ツン的に考えて、忘れないで下さいねってことか。

「それからたまに格闘技を自己流で練習してたんだけど、私の面倒をずっと見てくれてたメイド、ママが子供のころの面倒も見てたお

婆さんなんだけど、その人の孫娘夫婦と子供たちが光の教団にさらわれたらしくて、力があれば助けられかも、なんて思ってそれから必死に修行するようになったわ」

そんなことがあったのか…もしかしたら俺のせい、まあ光の教団が悪いに決まっているが、俺の行動がこの結果を読んだんだろう。

俺がいろいろ行動した結果、光の教団はラインハットではまったく活動出来なくなった。

光の教団がラインハットを攻めれば落とせるだろうが、おそらくその後は俺やパパスとかに潰される。労力に見合う対価が取れない。

だから光の教団は他の地域での行動を活発化させた。それが年老いたメイドの孫娘達の誘拐につながったのだろう。

とはいえ、俺が謝るの間違っている。もし謝ったらいろいろな人の侮辱になる。

「ま、そんなわけで光の教団と聞いたからなんとしてもついていきたかったのよ」

なるほどデボラが最初から強いのはそういうわけだったのか。

それにゲームよりツン度が低いのは妖精の国での冒険があったからなのかもしれない。今でも思い出すということは大切な思い出だということだし、その影響で少し優しい？のだろう。

「なるほどね…」

「そういえばあんた私よりも強いし、強くなることに関してはすごく真面目よね。あんたは何で強くなったの？理由とかあるの？」

中の人について話すか……？

あのツン9デレ1のデボラがいろいろ話してくれたし、俺も話す

べきだ。
信じないかもしれないけど話そう。
「もしも、俺が実はこの世界以外で生きていたが、気がついたらリュカに転生？していて、この世界のある程度の未来がわかっていたからって言ったらどうする？」
「……まずはその未来について聞かせて」
「光の教団の黒幕、今の魔界の王にこの世界が支配される。俺とある人の子供が勇者の血を受け継いでいて、俺と妻、子供たちが魔界の王を倒す。究極的にはこの二つの未来だ」
要はゲームオーバーした場合の世界と、ゲームクリアした世界だ。
「だから、あんたは力を求めてたの？」
「そうだ」
この世界で平穏に生きるためには世界を平和にしないといけないからな。
「ふーん……ま、どうでもいいんじゃない？結局あんたはあんただし、光の教団と戦ってくれるならそれでいいわ」
受け入れてくれたのか？いや、だから何？って感じか。
デボラってこういうところが強いって感じさせるな。単に深く考えずわがままなだけとも取れるが。
「でも、誰と子供作ったの？」

ビアンカ、フローラ、デボラのうちの誰かです。って言えるか！

「答えなさいよ」

誤魔化そう。

それがいい。

そうしよう。

「それ「もしかして私？」

「ちが「前にも言ったけど、どうしても私と結婚したいって土下座するなら考えてあげるわよ……ふぁ～あ。話してたら結構時間が経っちゃったわね。私はもう寝るわ。あんたももう寝なさいよ。夜更かしして寝坊でもしたらおいていくからね。じゃあ、おやすみ」

……え？

あれって、照れ隠しだよなぁ……？

つまり、ちゃんとプロポーズしてくれるなら結婚してもいいわよってことか……？

……どうしよう？いや、そりゃデボラは好きですよ。

リアルツンデレもありだな。って今は思ってますよ。

いいおっぱい持ってるし。おっぱい

……とりあえず、寝よう。

まずはグランバニアをどうにかすることに集中しないと。プロポーズとかはそれからだ。

グランバニア、グランバニア、グランバニア、グランバニア、グランバニアと。おっぱい。

部屋に戻って寝よう。

明日からは下りになる。

上りがきつかったから下りもきついだろうし、ぐっすり寝よう。
それにデボラの言うとおり寝坊したら洒落にならない。

14

チゾットの村を出発して5日後、グランバニアの入り口に着いた。グランバニアは城郭都市であり、ゲームで城の中に町があるため、大きいはずだとわかっていたが、実際に見ると、言葉が出なかった。おそらくアルカパの町よりも土地の面積が多い。全然規模が全然違っていた。

まず外の堀。とても大きく、２m近くはありそうだ。それに対魔法などの処理がかけてあり、突破することは容易ではない。

次に城壁。ここからでは全容はわからないが、見た部分すべて外の堀と同じ素材を使っていて、ラインハットの城よりも格段に耐久力が高いだろう。それが待ち全部を包むほどの大きさである。

まさに壮観だ。

「ここがグランバニア。町も全部お城の中にあるなんて、すごいわね。ずっと建物の中にいるみたいで息が詰まりそうだけど、すごく安全そうね」

「ああ、あの城壁とかラインハットの技術力では作れないほどの耐久力がある。魔法も中級魔法ならほぼ無傷で耐えられるくらいだ」

「パパス様お帰りなさいませ！」

俺とデボラがグランバニアの城を眺めていると、パパスを見つけた門番の兵士がパパスに敬礼をしていた。

そして何人かが城の中へかけていく。おそらく伝令係だろう。

「うむ、皆には迷惑をかけた。本当ならマーサを見つけるまでは戻らないつもりだったのだが、グランバニアの噂を聞いて、こうして

戻ってきたのだ。まずはオジロンに会いたいのだが」

「はっ！迎えの兵団が来ますので、しばらくお待ちください」

あの兵士、ラインハットの兵士よりも強いな。あくまで感だが、そう感じる。それに装備が鋼じゃなく、ミスリルと鋼を複合しているものを使っている。他の兵士達も同じものを使っていたし、おそらく末端の兵士達全員がこれと同等の装備をしている。

この軍事力、これがグランバニアか。

ゲームで魔物が強かったのは、それだけこの国が強かったからなのかもしれない。ラインハット周辺ではそれなりに強いスライムナイトとかなんて瞬殺しそうだ。

あの鎧も魔法に対する耐久力がありそうだし、初級魔法ならたぶん防げるだろう。兵士達にいい装備を揃えるのも国力か。

「ねえ、リュカのパパって、グランバニアの偉い人なの？」

「俺は知らないけどたぶんそうだと思う。アレだけの強さとかいろいろ知識を持ってるから、実は王族とか言われても驚かないけど」

や中の人知識じゃなくてもパパスの強さとかカリスマとか見てたらそう思っても無理はない。

パパスを勇者じゃないかと思っている人とかいたし。それだけパパスはすごい。

城の兵士も顔が明るい。

もしかしたら今日は祭りみたいになるのかもしれない。

パパスが帰ってきた日から3日間ほど、グランバニア国民を挙げて、宴という名の祭りが開かれた。
光の教団の事件で国民が不安になっていたのを払拭する目的もあったようだ。
国民はパパスがいるなら安心だ。これで事件は解決すると皆顔が明るくなっていた。
そして、今日、パパスに詳しいことの説明と、対策を練る会議が開かれた。

「まずは事件について説明します。最近のことですが、北の川の向こうに教団が建てたと思われる塔、デモンズタワーから魔物が攻めてきました。デモンズタワーは気がついたら建てられていました。どうやらかなり無理をしてそれほど日にちをかけずに建てたようです」

ゲームだと何であんなところに塔があるか不明だったが、グランバニアに気づかれずに、そして結界の影響を受けないところだから建てたのか。

「デモンズタワーから攻めてくる魔物は強いことは強いのですが、我々の手で充分戦えます。城の北口から少し行ったところと川の向こうに強力な結界を張って、そこを拠点に川を渡ろうとする魔物を倒しています。この防衛線は今まで破られたことがありません。補給も万全です」

やるなぁグランバニア。結界による拠点と補給線がしっかりしていて、防衛は完璧、それどころか攻めることだって可能になる。

問題は国民の誘拐、か。

「我々はある程度相手の力を図り、情報を集めました。そして、デモンズタワー破壊作戦を計画し、攻めに転じようとしたのです。しかし、国民が1週間ほどで数十人ほど、いなくなってしまったのです。それも女性と子供だけが」

この手口、やはり光の教団か。

俺の隣に座っているデボラは手を握り締めていた。

デボラはわがままでSッ気があってツンデレだが、こういう事件を聞いて無関心になるほど情がない人間ではない。むしろ憤って、犯人を捕まえて拷問してやる、なんていいかねない。

つまり、根は優しいのだろう。ただツン9デレ1なだけで。

「調査の結果、城内にはいないことがわかりました。そしておそらく誘拐されたのだとも。我々はその怒りをデモンズタワー破壊作戦を実施しようとしました。しかし、まるでこちらが攻勢に出ようとすると、誘拐が再発したのです」

スパイがいる、しかも人間の。

？そうだ！

たしか大臣がスパイ、いや裏切り者だったな。
俺が監視するか、いや、目立つし誰か兵士に頼むか。
パパスに言って独自に調査するから兵士を借りて、いやそれだと大臣に感づかれる…ならサンチョに言って、秘密裏に兵士を借りるようにしよう。

「当然我々は調査しました。しかし手口がつかめないのでず。結界は完璧なので、人間が犯人だと思われるのですが、特定できません。現在は他の地域からこの国に移住してくる人も多く、それの護衛の冒険者などもいまして、パパスさまが王位についていた１０年前までの国民については把握していますが、あれから少なくとも１．２倍ほどに増えていると思われますので、その中に犯人がいるのではと思っています。当然、兵達に警戒させましたが、その警戒網を掻い潜って誘拐が起きてしまい、現在は防衛しながら、犯人探しをしているところです」

大臣が犯人。これはおそらく間違いないだろう。
ゲームとの変更点は俺が行動した結果変わったことや、設定などが現実的になっていることだから、おそらくグランバニアの裏切り者は大臣で間違いないだろう。
まずは監視して、もしも間違っていたら、そのときは無視してデモンズタワーを破壊するべきだ。
国民は憤るかもしれないが、デモンズタワーを破壊すればこの近辺で人間を連れて行くところがなくなり、さらっても意味がなくなる。それに兵士達が全員城に戻っていれば、警戒網がきつくなり、誘拐が出来なくなるし。
そうだな、デボラにも話しておこう。
この国の人間ではないため、この国の人に対して先入観がなく、誰が怪しいかわかるだろう。
それに狙われたら洒落にならないし。

会議が終わった後。俺はデボラを連れて王族専用の区画、泊まっている部屋に戻ってきた。
デボラはゲストであり、世界一の商人だといっていいルドマンの娘だから、特別にドリスという2歳年下の従妹とその母親、叔母に当たる人達が住んでいる区画の部屋に泊まっている。
元々金持ちでこういうセレブ生活に慣れているデボラはもうグランバニアでの生活に慣れたようだった。
ドリスとはすぐに仲がよくなり、宴が始まる前にドレスのデザインがどうとか合わせるアクセサリがどうとか話していたらしい。
デボラは豪華なドレスを着て主賓であるパパスや俺の傍にいた。
ちなみにその時のデボラは綺麗だった。
わがままなところが気品の高さにつながり、王女様といわれても無理はないほどだった。

「で、話って何？」

「ああ、誘拐事件についてだけど、怪しい奴がいる。実は、前に話したある程度の未来を知っているって言ったよな？その未来では大臣が俺の子供をさらおうとしたんだ。この未来の予知？見たいなものはかなり当たっているみたいだから、もしかしたら大臣が犯人じゃないかなって思ったんだ。もちろん実行犯がいるはずだけど、大臣がさらえる時期や警備網についてを教えているんじゃかと思う」

「あのむかつく奴ならやりかねないわ。あの眼はパパに取り入るためにはどんなことでもしたり、裏では汚いことをして他の店を潰したりしていた商人の眼と同じよ。あんなやつは存在しているだけでもむかつくわ」

「で、大臣を監視しようと思う。父さんやオジロンさんに話すと大臣にばれるかもしれないからサンチョに言って兵士を秘密で借りて監視する。デボラに話したのは、もしかしたらデボラを狙うかもしれないからだ」

「へえ、心配してくれるの？でも大丈夫よ、襲われたら容赦なくぶっ倒してあげるわ」

「まあデボラもかなり強いから大丈夫だと思うけど万が一、な。それに最悪ドリスとかを人質にしそうだし」

「それはあるかも。ああいうむかつく奴はどんな汚い手でも使うはずよ。本当にむかつくわね。犯人だとわかったら殴ってやろうかしら」

デボラはこれで気性が荒いんだよなぁ。

まあ、大臣がゲームどおりなら容赦なく殴ってもいいと思う。それだけのことをしたのだから。

自国民をさらわせて売るとか、ふざけすぎだろ。その上、主人公の母もこいつの手引きで誘拐されたし、ゲームでは妻もだ。

ゲームを思い出していたらなんかむかついてきたな。

絶対に本性を暴いてやる。

15

サンチョに裏切り者がいるかもしれないと話し、秘密裏に行動してもらえる兵を都合できないか相談した結果、サンチョの紹介で古参からの代々兵士をしている一族の若手の兵士を貸してもらえることになった。

グランバニアは比較的職業に就ける自由があり、才能を薄めないために同じ職業のものとしか結婚できないようにしている一族代々兵士になっている者やグランバニアの貴族（代々魔法が使える一族など）を除けば、鍛冶屋の息子が兵士になったり、商人になったり、冒険者になったり出来る。

この世界では人間同士で争っている時代もあった。

ゲームでこの世界の神に等しいマスタードラゴンはこの世界にも存在しているが、どうやら人間が争っていても基本的に不干渉で、魔界の魔物とつながったり、？の進化の秘法とかに手を出さない限りは干渉しない。

この世界はそういう世界だ。

そんな世界でグランバニアは、人口こそ少ないが今でも国力が高い国として残っている。

光の教団、魔界の魔物による大規模な侵略が起きる前は人間同士で争っていたことがあった。

例えばラインハットは比較的新しい国で、かつてはレヌールという国と争っていたこともあったそうだ。ラインハットとレヌールは同じ国が納めていたのだが、王位継承者同士が争ったため、二つに分かれてしまい、結局少し前の世代でラインハットに統一されたそうだ。

グランバニアは魔界の門が近くにあるため、他の地方より強い魔物現れることが多い。そんな魔物と戦い続けている国なので、他国

からの侵略もあったが、すべて撃退している。

それと魔物について。

魔界の門は閉じてあるが、完全には閉じられず魔界の気はこの世界に少しずつだが流れてくる。

魔界の門はこの世界と魔界と呼んでいる世界をつないでいる穴みたいなものだ。

ここからは俺の推測だが、魔界の門はたぶん？で作られたものだろうと俺は思っている。

この魔界の門はおそらくだがマスタードラゴンにも完全に閉じたり、破壊したり封印したり出来ないのだろう。だから天空人の子孫で勇者の血筋のものが封印していた。

勇者とは、マスタードラゴンが持てる力を注いで作ったこの世界の守護者みたいなものなのだろう。マスタードラゴンはこの世界では神なので当然無敵だが、異世界である魔界ではそこまでの力が使えないのだろう。だから、何らかの方法で魔界でも戦える勇者を作り出したのだろう。

まあ完全に俺の推測なので、真実はわからない。

と、話が逸れたが、大臣のことである。

現在監視しているが、普段の大臣の行動を聞いたらかなり怪しい時間帯があった。

大臣は何日かに1回、必ず中庭で休んでいることがあるという。しかも1人で。1人になりたいとか言って、中にはで1人休憩を取っているそうだ。

これはもう灰色だ。

そういうわけで、中庭で休んでいるだろう時間帯は完全に大臣をマークしている。

大臣への監視を始めてから１０日ほど経った日、ついに大臣の裏切りが発覚した。
パパスの帰還により、うかつな行動を取れなくなったのか、大臣は真面目に仕事をしているかに思われた。
しかし、あることで大臣が罷免されるかもしれなくなった。
オジロンはパパスの補佐ならば優秀だが、王としての能力はあまり高くなかった。そのためやり手の大臣が権力を握っているかのように振舞っていて、国政に自分の意見を反映させるようなことが多々あったそうだ。
パパスが戻ってきたことで、オジロンは重荷だった王位をパパスに譲って王に戻ってもらい、自分が補佐である大臣になればいいと考えていたようで、パパスにその話が打診された。
俺の母であるマーサと勇者の装備や勇者捜索をしたいパパスだが、光の教団が世界を蝕みつつあるため、グランバニア王に戻り、光の教団の魔の手を防ぎ、同時にルドマンの情報網を使い捜索する。こんな考えがあったようで、パパスが王に、オジロンが大臣になるこ

とが決まった。
これは、今の時代があまりにも非常時であるので権力を一極化しようという狙いもあったのだろう。
そしてその次の日、大臣、いや元大臣は行動を起こした。
元大臣は大臣ではなくなったものの、その能力は評価されているので要職についており、会議に出ていたり仕事をしていた。
仕事とはいっても、地球の日本での仕事の量に比べるとそれほど忙しくない。
そんな大臣は珠に向かって何か話しており、それを気配を消すことに慣れている兵士（ゲームでの盗賊の特技持ち）が聞いていた。
その報告を俺とデボラは塀の内側だが城郭外にあるサンチョの家で聞いている。
「元大臣はなんとリュカ様とデボラ様の暗殺を企てています」
「な、坊ちゃんとお嬢様のか！」
「はい、サンチョさん。どうやら冒険者でも悪どいことをやっている奴らを雇って、今まで人攫いをしていたようです。カン…ダタ？という名の冒険者がリーダーの集団、盗賊団みたいな奴らのようです」
「それで、計画についても聞けたのか？」
「はい。明日の夜、王族の皆様の食事に眠り薬を混ぜて起きないようにしてから、元大臣の手引きでカンダタが立ち入り禁止区域に進入、そしてリュカ様とデボラ様を暗殺すると言っておりました。また大臣はカンダタを手引きした後、夜明けを待たずグランバニアから逃げるようです」

俺はマーサの息子だから、デボラはルドマンの娘でこの国とルドマンをつなぐことになるから、それが理由か？

「ふざけたこと言って、今すぐにぶっ飛ばしてやるわ！」

「待った。それだと証拠がない。だからさ……」

俺は元大臣を嵌める計画をデボラに説明した。

とはいっても、カンダタを手引きしている元大臣を兵士に発見させ、そのまま捕らえるだけだ。戦闘になるかもしれないので俺とサンチョもこれに参加する。デボラはそうでもしないと今すぐに元大臣のところへ行こうとするからと言う理由もあるが。

俺とデボラ、サンチョと兵士数人は今、階段の裏に隠れている。

報告どおり、食事に眠り薬が入っていたようで、パパスたちは部

屋でぐっすり眠っている。もしものときを考え、見張りの兵士を増やしているが、ここで奴らを捕らえれば問題ないだろう。
と、考えていたら、元大臣がキョロキョロしながら歩いている。
そして、後ろを向き、何か合図したら、斧を持った戦士っぽい男やいかにも冒険者といった装備がバラバラのやつらがこっちへ足音を立てずに走ってきた。

「デボラ、じゃあ、やるぞ」

「わかったわ」

「「ラリホー」」

合図とともに、兵士達は剣を持って突撃した。
ラリホーにより半数の男達が眠り、残りの兵士達は何がおきているのかも兵士達に攻撃され、次々に倒されていく。

「て、てめえら！」

が、斧を持った戦士、おそらくカンダタはすぐに体勢を立て直した。

「敵だ！戦うぞ！」

そう言って、カンダタが近くの兵士へ振りかぶった斧を振り下ろした。
とてつもない速さで振り下ろされた斧はあの硬質な壁と同じ素材ので出来ている床の一部を砕いた。
兵士は何とか避けたようだが、カンダタの実力がわかり、容易に近づけない。

ここは、俺が戦か

「ふん！」

おうとしたら、デボラがものすごい速さでカンダタに接近し、拳撃を入れた。

おまえは宮田君かよ、って突っ込みたくなるぐらいの鮮やかな間合いの詰め方だった。

「ぐふぅ！」

カンダタは反応できず、もろに喰らったがそれでも倒れず、それどころか再び斧を振りかざそうとする。

「メラミ！」

が、デボラはメラミを両の拳に纏わせ、ラッシュに入った。

「ぶっ飛ばしてやるわ！」

サンチョ並みの耐久力がありそうなカンダタだったが、デボラの魔法拳による爆裂拳、オラオララッシュを喰らってぶっ倒れた。

サンチョや兵士達を見ると、眠らなかった男達を倒して眠っている奴らを特別な縄で縛り上げているところだった。

俺……何もしてない……。

「く、くそ、おまえら、私はグランバニアの正統な後継者だぞ！この様なことをして」

残った奴はこいつだけか…。

はあ……。

とりあえず、殴ろう。

「へぶぅ！」

へっぴり腰でナイフを構えていた元大臣の横っ面をストレートでぶっ飛ばしてやった。

決して、俺だけ戦闘に参加できなかった空しさをぶつけたのが理由だからではない。

ないったらない。

16

元大臣を捕らえてから２０日ほど経った。

元大臣とその一族は公開処刑された。

元大臣はグランバニアの王族の血を引いている可能性があったので、というか貴族や古くからグランバニアにいる町の人間も王族の血が混じっている可能性はある、そのため親から甘やかされて育ち、さらに政務において優秀だった元大臣は、自分こそが王族にふさわしいなどと思い込み、グランバニアを正統な王の元へ取り戻す聖戦をしていた。

と言ういいわけを本気で言っていたらしい。

元大臣のことはもうどうでも良かったので、俺はデボラから魔法拳を元に魔法剣の練習をしたり、王族なのでいろいろ手に入るのでミスリルのみを使った破邪の剣に魔法効果がない、魔法剣用の剣を作ってもらったり、装備を一新したりしていた。

で、結局元大臣とその一族（親兄弟子供）は処刑された。

一族の人達は事件には関係がなかったが、さすがに国民の怒りが酷く、数十人もの人間がさらわれたので、一緒に処刑された。

俺もデボラも見に行っていないので、サンチョから聞いた話だ。

誘拐事件は終わり、これからデモンズタワーを攻略することになった。

パパスの指揮の元、防衛線から一部の兵を引き抜き、城にいる予備の兵士とともに防衛線を上げていき、デモンズタワーを攻略する。魔物をあらかた倒した後は、教会のシスター達に結界を張ってもらって、最後にデモンズタワーを破壊する。

俺とデボラも戦いに参加する。

というか防衛線を上げる戦いは俺の魔法が中心で、兵士達を温存。

デモンズタワー攻略の際は数と質で一気に攻略する予定だ。

「リュカにもしものことがあったら作戦が失敗するから、私が守ってあげるわ。感謝しなさいよ」

と、デボラは俺の護衛についている。

デボラの実力は俺とは接近戦ならほぼ互角、いや中級魔法の魔法拳があるので、俺よりも強いかもしれない。魔法ありなら俺のほうが圧倒的に強いが。

そんなわけで今から、城を出発する。

楽器を持った兵士が音楽、行進曲を鳴らし、パパスと俺達と整列した兵士が城の外へ歩いていく。

グランバニアの民達は

「がんばれー！」

「パパス様ばんざーい！」

「天才魔道士リュカ様！」

とか、大声で言いながら、俺達を見送ってくれた。

天才魔道士、これはサンチョがラインハット地方で俺がそう呼ばれていると兵士達や町の住民に話して、兵士達に魔法の訓練を見られていたので、あまりの実力にそう呼ばれることになってしまった。

王子で天才魔道士、ゲームではなんかイベントこなせば王になっていたが、実際に王子になるのでもすごく気疲れした。

兵士達や住民からは敬語で話されるし、今は政務とかはしないが、パパスはいずれそういうことを学ばせようと考えているし、またマナーとかダンスとか大変だし。

戦闘力も大事だが、当然人の上に立つ者として公の場では作法とかが必要になる。王族っていうのも楽じゃなかった。
いつか美人な嫁さんを貰って、楽に暮らせたらと思っていたが、今では『楽』というのが王族とかじゃなく、一個人で稼いだ金を元に気ままな暮らしを出来れることになってしまった。
絶対俺は王とかに向いていない。
中の人ももう魔法ではこの世界の人間のなかでは最高の腕前だと自信があり、昔の小市民な性格は変わっていると感じているが、それでも王には向いていないと思った。
たぶんだが、俺は何にでも縛られない生き方が性に合っている。
パパスとグランバニアに来てから一度、母のことや今後のことをゆっくり話し合ったことがあるのだが、いずれ俺に王になって欲しいとパパスは言っていた。
マーサ、母が本当は生きていて、おそらく光の教団を操っているだろう黒幕が犯人で、そいつから母を取り戻し、俺が王になって結婚するのを母と一緒に見てみたいものだといっていた。
俺はパパスの息子とは言いがたいが、それでも俺は彼の背中をいつも見て育ってきた。この世界での父親はパパスだと思っている。
だから彼の期待には応えたい、しかし俺は王には向いていないと思っているし、好きなこと、さらなる魔法の研究をして生きていきたいと思っている。
俺は将来のことに悩んでしまった。
光の教団と魔界の魔物の脅威がなくなるまでは考えてこなかったが、いざ将来のことを考えると、どうすればいいのかわからなくなった。
デボラにこのことを話したら、
「びびってるだけでしょ、このヘタレ。別に王になった後で向いていないって思ったら誰かに仕事は任せて、気ままに暮らせばいいじゃない。私ならそうするわ」

うん、本当にわがままだ。
でも、わがままなくらいでちょうどいいのかもしれない。
そう思ったら、まあ王になってもいいかと思えてきた。
そんなわけで俺は将来のことをある程度決めて、この戦いに挑むことになった。
そしてもう一つ決意したことがあるのだが、それは今は秘密にしておこう。

「何ぼ～としてるの？そんなので大丈夫なの？あんたって以外に緊張感がないわよね」

「や、まあちょっと思うことがあってさ」

「まったく、これから戦いにいくんだからシャキっとしなさいよ」

「ああ、大丈夫」

うん、本当に大丈夫だ。

「右手からメラゾーマ、左手からバギクロス、合体魔法メラゾロス！」

研究の末、出来るようになったメラ系とバギ系の上級魔法の合体魔法メラゾロスを魔物の群れに放つ。

合体魔法。

ロトの紋章であった技法。

チートによる魔法習得技術によって、何とか完成させることができた。

俺の得意属性のバギ系はメラ系と合成しやすかったので、最初に習得できた。

ダイの大冒険であったメドローアは試してみたがこの世界では無理だった。各攻撃魔法はそれぞれに合わせられない系統が存在し、メドローアのメラとヒャド系の合成は無理だった。

しかし、すべての系統の魔法を合わせることは出来るようだった。

それぞれの合成しやすい系統ずつに順に魔法を合成していくと、すべての系統を合成できる。

そう、ロト紋のマダンテだ。

今はまだメラゾロスしか使えないが、いずれはすべての攻撃魔法で合体魔法が使えるようにする。

俺は、ただ強くなりたいから魔法の勉強などをしていたが、娯楽のないこの世界では、魔法の研究が趣味になっていた。魔法をが使えるようになれば強くなれるし、楽しみながら魔法を覚えられるので、上達が早くなる。

そんな感じで研究を続けていたら、いつの間にかデイン系以外の攻撃魔法を全て使えるようになっていた。

「バギクロス、バキクロス、合体、バイクロス！」

５つのバギクロスを圧縮したフィンガー・ブレイク・ボールとは違って威力は弱いが、バギクロスを広範囲に放つバイクロス。

弱点はバギ系に強い敵にはあまり効果がないことと、このあたりの敵ではＨＰが高いのか生き残っている奴が多いことだ。

「イオラ！イオラ！イオラ！」

そんな生き残っている奴らにはイオラを連発して、止めを刺していく。

イオナズンだと連発はきついし、威力がありすぎる。

距離の離れている敵には広範囲のバイクロス、イオラ連発、近くにいる敵はメラゾロスで瞬殺。

数百匹近くはいる魔物の群れ相手に俺無双をしていた。

もはや研究した魔法の実験台みたいに思えてきた。

魔法はまさに戦術兵器だ。

もっともパパスとかに接近されたら戦闘でひっくり返されることがある。

昔、何かのＳＳか漫画で読んだが、魔法使いは大群を相手に出来るが、戦士に勝てない。

まさにこれだった。

が、俺は戦士としてもかなり強いので、この程度の魔物相手には無双し放題だった。

「はあ、暇ね。見てるだけだとつまらないわ」

デボラが俺の近くで暇そうにしているが、これが作戦なので、無視してどんどん魔法を使っていく。

「はあ、塔についたら思いっきり暴れてやるわ」

「そうしてくれ。きっと嫌でも強敵と戦うことになるはずだ」

そう、そんな予感がする。

魔物を駆逐し、進んでいくと見えてきたあの塔では、きっと死闘が繰り広げられる。

そんな確信にも似た予感が俺の身をよぎっていた。

１６（後書き）

ストックが数話しか残っていないので書きとめをしないと……。
もしかしたら更新間隔が週４話ほどになるかもしれません。

17

「では、塔の入り口に結界を張り終わり次第、我々は塔へ侵入する。塔への侵入部隊は各自休んでおけ、警戒、迎撃部隊は魔物がいないからと油断するな」

パパスの指示の元、シスター達が強力な結界を張り始めた。

俺達は塔への侵入を行うため、ここで休むことになった。

とはいえ、兵士達の大半は戦っていなかったので体力の消耗などはない。俺を休ませるのが目的だろう。

呪文チートによる俺無双でデモンズタワーまで、ほぼ俺一人で魔物を駆逐し、わずか数日という速さでデモンズタワーについた。

電撃的な侵攻を行ったため光の教団もなにも対策を考えられなかったのか、逐次魔物を投入してきた。しかし、俺がいるため足止めにすらならず、デモンズタワーまで足を止めることなく進軍できた。

このままなら楽勝、のはずなのだが、どうしても嫌な予感がする。

まるで敵の術中に嵌っているような感じだ。

気のせいだとは思いたいが……いや、こういう感は信じておいたほうがいいだろう。

ルドマン氏の商店が開発した袋のおかげで道具類はすべて持ってくることが出来たので、戦闘中でもすぐに使えるようにしておこう。

エルフの飲み薬は入れ物を４つ分腰につけておく。

これ以上持っていると動きにくくなるから、今のうちに飲んでおく。

一応寝ればＭＰが回復するが、これも限度があり、限界以上のＭＰを使用したりすると、１日寝た程度では回復しなかったり、ＨＰを使って魔法を使ったりしてしまう。ダイの大冒険でポップが初めてフィンガー・フレア・ボムズを使用した時のようになるということだ。

もしものとき限界以上のＭＰを使用できるように、潜在的なＭＰすべてが回復するようにエルフの飲み薬を飲んでおく。これなら多少の無理が利くはずだ。

「リュカ、あんたはもう休んでいなさいよ。無理したら私に迷惑がかかるんだから」

「ああ、そうする。それに何か嫌な予感がする。ここまで楽に来れたけど、本番はこれからだ。結界を張り終わるまで数時間ほどあるから眠ることにする」

「嫌な予感、ね。実は私もこの塔に来てから、もやもやした感じがずっと続いてるわ。なんか変な感じで鬱陶しいわ」

もしかしたら天空人の血が警告しているのだろうか？

それほどの事がこの塔で起きるのか？

……考えても仕方ない。今は少しでも休んでおこう。

塔の内部の魔物を倒しながら、俺達は１０階にたどり着いた。
１０階には明らかに格が違う２体の魔物に率いられた魔物の群れが俺達を待ち構えていた。

「ぐぉぉぉぉ！」

そして俺達を見るや否や、襲い掛かってきた。

「いくわよ！」

先陣を切ってデボラが走っていく。

「バイキルト、スカラ、ピオリム」

俺はそんなデボラに補助魔法をすべてかけてやった。

「ふん！」

すべての補助魔法で強化したデボラが我流の格闘術で一足飛びで接近し魔物を率いているオークの腹に拳を叩き込み、吹き飛ばす。
よし、俺がもう一匹の敵の指揮官をやるか。
デボラが戦っているのを尻目に、俺は呪文を唱えた。

「メゾラゴン！」

俺は一斉に魔法を使おうとしている指揮官のキメラとその群れを合体魔法メゾラゴンで吹き飛ばす。メゾラゴンはメラゾロスに比べ

消費ＭＰが高いしとっさでは使えないが、弱点を考え、余裕持って使用した。
一撃では死なかったキメラ（おそらく何らかの方法で強化されたキメラ）が魔法では勝てないと思ったのか接近してきた。

「はぁぁぁぁ！真空一閃！」

グランバニアの技術で作られた俺専用の剣、すべてミスリルで出来ていて魔法剣が使いやすい剣。パパスの持っている剣より切れ味、強度では一歩劣るものの、魔法剣を使用することによりその真価を発揮する。
真空一閃は剣に圧縮したバイクロスを纏わせ、切れ味が異常なほどに増す魔法剣技。
キメラは真っ二つに切り裂かれ、ゴールドに変わった。
魔法剣はこの剣、いわばリュカの剣により完全に実戦で使用できるようになった。とはいってもフィンガー・ブレイク・ボールを剣に纏わせるようなレベルではないが。
それぞれの系統の最上級魔法、バギ系ならばバギクロスを合体させたバイクロスでも魔法剣が使用できる。
それがこの剣の力だ。

「メラミ、ヒャダルコ。せい！」

デボラも両手にそれぞれ違う属性の魔法拳を使用し、オーク拳撃と魔法を同時に叩き込んでいく。
デボラはリーチこそ短いが、手数が多い。一度懐に入られたら、デボラを超える速さで動かない限り連撃を食らってなす術もなく負ける。
オークもまた例外ではなかったようだ。
強化してあるため普通のオークよりは速いが、デボラの速さに追

いつけず、何も出来ず四方へ高速で移動しつつシフトウェイトを行っての魔法拳の連撃を食らい、オークは倒れていき、ゴールドに変わった。
周りを見ると、残りの敵と兵士達が戦っている。
兵士達は1対1でも対等以上戦えるが、それでも慢心せず集団戦闘を行い、ダメージを最小限に抑えていた。
塔の中で、初めて本気で戦っているグランバニアの兵士を見たときも思ったが、さすが軍事力ならこの世界でトップと言える国だけのことはあった。
強い。他国よりいい装備を使用しているのもあるが、個人個人が熟練の冒険者並だ。さすがに若手ではこうはかないらしいが、グランバニアの中堅どころの兵士は冒険者の一流に近い実力がある。
俺が大半のキメラを倒したが、デボラのオークが率いていたオークの群れを兵士達は次々に倒していく。
何人かが囮になり、敵をひきつけ、分断し、数が少ないほうを集団で一気に攻撃し、倒す。
全く反撃させない。
もちろん囮はダメージを負うが、囮はそのまま戦闘を離脱。傷を負っていた場合は薬草を使って応急処置をする。
そして数が減った魔物の群れを数で勝るのをいいことに同じような戦闘を繰り返していく。
一定まで数が減ったら、一気に全員で攻撃する。
囮になったものは傷を負うが、元々ＨＰが高い者が囮になっているため、薬草などで応急処置をすれば、以後も変わらず戦闘を行える。すばやさも兼ね備えている囮役は回避に専念し、無傷の者もいる。
「ベホマラー」
さすがにらはそれなりに頼れるため、回復魔法で万全の状態にし

ておく

「ありがとうございます！リュカ様！」

例を言う兵士達に軽く手を挙げ、返す。

「さて、どうやらこの上が最上階みたいね。いや気配がひしひし伝わってくるわ」

「そうだな。この気配、もしかしたら……」

昔、感じたことがある気配、この気配は、まさか……。

「坊ちゃん！ご無事でしたか！？」

大声とともに階段を駆け上がってきたのはサンチョだった。

その後ろからパパスとパパスが率いる兵士達の姿が見えた。

俺達の方が先に１０階に来ていたようだ。

「この程度の魔物相手にリュカ達が負けるはずがなかろう」

「そうれは、そうですが」

「それよりも、どうやら、この上が最上階だろう。強い魔物の気配がする。兵士達は熟練の者だけを連れて行ったほうがよさそうだ」

「それほどの魔物が？」

「うむ」

俺とデボラは熟練の兵士、今回連れてきた兵士達の中で最も強い者達を率いて、パパスは才能はあるが比較的若手の兵士達を率いて塔を上っていた。
そして俺達のほうが先に１０階に着き、今合流できた。

「デボラ、一応補助魔法を全部かけておく」

「わかったわ」

デボラに補助魔法をすべてかけ、俺にもかけて、パパス達にベホマラーをかけ、俺はエルフの飲み薬を飲み、ＭＰを回復させた。
ちなみにベホマラーは結界のように広域にベホイミをかける魔法だ。しかし敵にもかけてしまうことがあるため、戦闘中はなかなか使用できない。しかし費用対効果は抜群だ。

「では、上の階へ突入する。みな油断するなよ。これほどの気配、昔一度だけ感じたことがあるくらいの強さだ」

編成と準備が終わり、俺達は最上階へ突入した。

18

「ほっほっほ。お久しぶりですねぇ」

屋上にいたのは、やはりゲマだった。

ゲマは椅子のようなものに座って俺達を待っていたようだ。ゲマの周りには強化された魔物と同じ気配を持つ魔物の群れがゲマを守るように立っていた。

１０階で気配を感じたとき、昔感じた気配だと思った。

そしてその気配はおそらくゲマだろうと感じていたが、どうやら当たっていたようだ。

ゲマが立ち上がり鎌を左手に持ち構える。

それを見てパパスは剣の切っ先をゲマに向けた。

「やはり貴様か、１０年前の決着をここでつけてやろう」

「ほっほっほ、それはこちらのセリフです。しかし、さすがに皆さんのような強い方々に囲まれたらいくら私でも負けてしまいます。ですから、少し面白い趣向を凝らしてみました。気に入っていただけるといいのですがねぇ」

「何？」

「ふふふ、戦っているうちにわかりますよ。では、始めましょうか！」

ゲマは言葉とともに間合いをつめてパパスへと斬りかかった。

パパスは鎌による攻撃をかわし、剣でそれに対抗していく。

ゲマが切りかかったのを合図に戦闘が開始された。
おそらくパパスがゲマはしばらくは膠着状態になるはずだ、ならば他の魔物を先に倒して皆でゲマを囲んでフルボッコにしてやる。

「メラゾロス！」

兵士達が突撃する前に、こちらに向かってくる魔物に先制して魔法を放つ。
直撃した魔物たちは一瞬で、黒焦げになり、直撃しなかった魔物も余波で傷を負った。
そして傷だらけになった魔物の群れをデボラを先頭に兵士達が切りかかっていく。
死んだ魔物たちはゴールドに、変わらない！？

「ちょっと！？何よこれ！？」

倒したはずの魔物は、なんとゾンビになって立ち上がりこちらに向かってくる。
まるで、昔ロトの紋章であった展開のような光景だ。

「気持ち悪いわね、素手では戦いたくないけど、仕方ないわね。メラミ」

デボラはゾンビのあまりの気持ち悪さにため息をつきながら、魔法拳を発動させた。
しかし、気持ちはわかる。地力で勝っていてもゾンビを相手に素手で戦うのは気分がいいものではない。
もしバイオハザードの世界で、絶対にウイルスに感染しない身体で肉弾戦チート能力を貰っても、俺は銃をメインに戦うだろう。ゾンビと素手で戦うってどんだけだよ。

「ほっほっほ、今この塔内部では魔物は絶対に死なないのですよ。たとえ倒してもゾンビになり、永遠に戦い続ける。ほっほっほ。皆さんどれほどの間戦い続けられますかねぇ。もっと早く塔へ攻めてこれば私も準備が間に合わなかったのですが、本当に丁度準備が出来ましてね。みなさんわざわざご苦労様でした」

ゲマが話している間も魔物の群れと戦っているが、何度倒してもゾンビになって復活してくる。

この状況はかなりまずい。

どうする？どうすれば……。

「この現象、おそらくお前が魔法などで起こしているはずだ。ならばお前を倒せば問題ない？」

「ほっほっほ、私とて１０年前とは違いますよ。それに今のあなたに出来ますかねぇ」

パパスは最盛期を越え、１０年前と比べると体力はかなり落ちている。強くなっているだろうゲマを相手にするのはきついはずだ。

ならば、俺がゲマを倒す！

「バ・ギ・ク・ロ・ス…フィンガー・ブレイク・ボール！」

「む、メ・ラ・ゾ・ー・マ…フィンガー・フレア・ボムズ！」

な、フィンガー・ブレイク・ボールがフィンガー・フレア・ボムズに相殺された。っていうかパクられた！

つうかそんなのありかよ！

なんでゲマがフィンガー・フレア・ボムズを使えるんだ！？

もしかして俺のせいか？

「隙あり！」

「甘いですよ」

パパスが呪文を使って隙が出来たゲマに切りかかったが、ゲマはなんと右手だけで剣を防いだ。

「１０年前、あなた方にもがれたこの右手は、魔界でも希少な金属の義手にしてあります。オリハルコンの武器でなければこの右手は傷一つつけられませんよ」

ダイの大冒険のヒュンケルの使っていた魔剣とかに使われている金属か？つまり最強装備並みってことか。

ゲマは左手で鎌を持ち、右手で防御、魔法を使うスタイルにシフトした。

俺はパパスと二人でゲマに対峙した。

デボラやサンチョ、兵士達はゾンビを倒し続けているようだ。

「メラゾロス！」

「マホカンタ！ふはぁぁ！」

「ふん！」

「甘いですよ！」

俺がメラゾロスを使えば、ゲマはマホカンタと激しい炎で防ぎ、パパスが隙をついて斬りかかれば、鎌か右手で防ぐ。

「真空斬り！」
「なんの！」
「せりゃぁぁ！」
「ここです！ふはぁぁぁ！」
俺が意表をついて接近し真空斬りを放てば右手で防ぎ、パパスが隙をついて斬りかかれば、鎌か激しい炎で防ぐ。
「むぅん！」
「メラゾーマ！」
「ぬぅぅぅ！」
「させるか！バギクロス！」
「やりますね！ふぁぁぁ！」
駄目だ。短期決戦でなければ勝機がないのに、倒せない。
俺とパパス、二人がかりで全くの互角だ。
これがゲマのみならばいずれ俺達が勝つだろう。
しかし、あの魔物の群れのゾンビ化がまずい。
時間が経てば経つほど、体力がなくなっていき、こちらが不利になっていく。
どうする！？
どうする！？

「せぇぇぇ！」

「ちぃぃ！」

焦っていると、デボラがこっちに加勢してきた。

「こいつを早く倒さないと全滅するわよ！私はそんなのごめんだからね！」

懐に入り魔法拳で連撃を入れようとするが、ゲマは鎌の柄の部分、棒状の部分でデボラへ突きをいれ、それを交わしたデボラから距離を取った。

「まったく、まだこんな強い人間がいたとは、みなさんここで死んでください、メラゾーマ！」

「マホカンタ！」

デボラはマホカンタを使うが、防ぎきれず、傷を負った。

くそ！

「リュカ！何とかしなさいよ！時間なら私が稼いであげるわ！あんた以外にこの状況をどうにかできる男なんていないわよ！」

デボラは傷を負いながらも、ゲマの周りを高速で動き回り、ゲマの動きを牽制する。

俺のことを信じてるって事か、やばいな、かなり嬉しい。

やっぱり俺はデボラが……そうだな、デボラの信頼に応えるためにも、アレを使うか。

まだ未完成で間違いなく暴走する危険がある、しかし魔力や生命力を犠牲にすれば未完成でもある程度の威力で放つことだけは出来るだろう究極の魔法。

「メラゾーマ、ベギラゴン…イオナズン、くっ……」

眼を閉じ瞑想に入り、それぞれの合成しやすい系統の魔法を順に使い、五芒星を描いていく。

数が増えるごとに身体中に痛みが走り、激痛で気絶しそうになる。

それでも俺は呪文を唱える。

「…マヒャド……はぁはぁ……っ、バギ、クロス……」

５つの系統の魔法を合成する魔法、極大五芒星マダンテ、これならゲマだって一撃で倒せるはずだ！

やってやる！たとえこの腕が引きちぎれようとも！

「なんという魔力！そんなものを使わせるわけにはいきませんね！ふはぁぁぁ！」

「リュカは、やらせないわよ！」

「させん！せい！せい！はぁぁぁ！」

「そこをどきなさい！」

「くぅぅぅ！まだだ！まだ！完成していない！」

駄目だ！完成させる前に暴走してしまう！

途中だが放つしかない！

「いっけぇぇぇ！極大五芒星、マダンテ！」

体中が痛く、ともすれば気絶しそうな意識を無理やり保ち、すべてを消滅させる光の珠を俺はゲマに放った。

「マホカンタ！メラゾーマ！そして！この右手でぇ！」

ゲマは連続で魔法を使い、マダンテを防ごうとする。

しかしマダンテはマホカンタを一瞬で破壊し、メラゾーマを粉砕し、ゲマを襲った。

だが最後、魔界の金属で出来ている義手によって光の珠は止められた。

「くぅぅぅ！こ、こんな、馬鹿な！この金属に輝が！？」

だが、光の珠が弾けるとともに、義手も木っ端微塵になった。

「く！まさか人間がここまでやるとは……さすがに手がない状態であなた方を相手にするのは無理がありますね。私が2度も敗走するなど…本当に屈辱です。今回も引かせてもらいますが、次は必ず、私の命に代えましてもあなた達を殺しでさしあげますよ」

言い終わった瞬間ゲマの足元が光ったかと思ったら、次の瞬間、ゲマの姿は消え去っていた。

どうやら逃げたらしい。

『うおぉぉぉぉ！』

雄たけびが聞こえ、反射的に聞こえたほうを向くと、ゾンビたち

がゴールドに変わっていくところが見えた。兵士達が勝利の雄たけびを上げてのだろう。
どうやら、ゾンビ化はゲマが何かしていたから起きていたようだ。
これで、俺達の、かち、だ……。
「ちょ、ちょっとリュカ！？何倒れてるの！？」
「む、これは魔力を限界以上に使ったのか、早く治療させねば」

19

「はぁ～、家に戻ってくるのもすごく久しぶりだわ」

俺とデボラは今、サラボナの町、ルドマンの屋敷の前にいる。

「グランバニアの部屋も豪華で私にふさわしかったけど、やっぱり住み慣れた自分の部屋が一番だわ」

あのデモンズタワー攻略から半年間、俺は療養とリハビリを続けていた。

ゲマとの戦闘で放った未完成のマダンテによって俺はしばらくの間魔法が全く使えなくなってしまい、両手も日常生活は問題なく遅れるが、剣を握るほどの握力がなくなってしまっていたのだ。

おかげで毎日本を読んだり、パパスに政治などを教えてらったりなどしか出来なかった。

時間が経つにつれてだんだん魔力や握力も戻っていき、完全に前のようになるまで一年もの時間を労してしまった。

「それじゃあ、パパに会いにいきましょう」

今日はルドマンにある報告をしに来たのだ。

そう、俺はデボラと結婚することを伝えに来た。

この世界に来て１２年経ち、俺は１８歳になった。思えば早いものだ。

あれは、リハビリをしていた時のことだ。
俺は魔力が少しずつしか戻らず焦っていた。いつかゲマとの決戦の時は向こうもなりふり構わず戦ってくるだろう。それこそ捨て身でも。
だから、なんとしてももっと強くならなければならない。おれはそんな思いに駆られ、しかし一向に魔力が回復せず、次第に余裕がなくなっていき、無理やり魔法の訓練をしようとした。
しかし誰もいない場所で魔法を使おうとした俺は、後ろからデボラに吹っ飛ばされた。

「あんた、何やってんの？そんなことしたら最悪直らなくなるわよ」

「それはわかってるけど、またあいつと戦うことになったら、そのときは父さんだってもう歳で戦えなくなってるはずだ。だから俺が強くならないと「うるさい！確かにリュカの魔法はすごいわ、でも、私だって強くなってるのよ。私を、頼りなさいよ」

正直、すごく嬉しかった。
普段ならツンデレだなと思いつつ俺のデボラへの好感度が上がるだけなのだが、この時、俺は余裕をなくし弱っていたので、なんというかこうズッギューン！という感じで心臓が撃たれたような気がした。
だから俺は、つい口走ってしまっていた。

「なら、一生頼っていいか？」

「？」

「その……好きだ。結婚して欲しい」

「……いいわよ。でも、今みたいな情けない姿を見せたら容赦なく吹っ飛ばすからね」

「それでいいよ」

「仕方ないから結婚してあげるのよ、感謝しなさい」

と、俺はその場の気持ちでプロポーズし、なんとＯＫを貰ったのである。

その日、俺は嬉しさのあまり眠れなかった。

そして、次の日、俺がいつもどおりパパスとに仕事を教えてもらう時間、いきなりパパスからいきなり、

「リュカよ。父は嬉しいぞ。デボラさんと婚約したそうじゃないか？これで母さんがいたら、どんなに……」

と涙ぐみながら言われ、国を挙げて次期国王の結婚式を大々的に挙げようと言う話になったが、デボラは大商人ルドマンの娘である。だからルドマンにも報告するべきだし、式も当然呼ばなければならない。

本来なら、それなりの立場の使者を送ればよいが、パパスがリュカ本人が報告しに行くのがいいだろうと言い、俺が報告しにいくこ

とになった。
どうやらパパスは武人とえる人間だけあって、古き良き日本男児といった観念を持っていたようだった。
ちなみにプロポーズした日から魔力が戻っていったのだが、デボラは『恋の奇跡ね。私ほどの女と結ばれたのだから当然そんなことだって起きるわ』と言っていた。
実は俺も恋の奇跡か、なんて思ったことは秘密だ。

そんなわけで、俺は今からルドマンにデボラとの婚約と結婚式の日取りなどを伝えにいく。

「いらっしゃいま、お、お嬢様！？」

「パパいるでしょ？話があるから通してもらうわよ」

本来なら俺が会いに来たと伝えるべきなのだが、デボラに『そんなことしなくてもいいわよ。娘の私が会いにいってあげるのだから、会うのが当然でしょ』などと言われ、伝えることができなかった。
やっぱりデボラはわがままなのだが、それでもデボラが好きな俺はマゾなのだろうか？
夜の生活はどうなるのだろうか？ちょっと不安だ。
ラインハットの王宮並みの高級な造りの屋敷をズンズンと歩いて

いくデボラについて行くと、広間に出た。
そこにはルドマンと奥さんだろう人が高級そうなお茶を飲みながら談笑していた。
「うん？おお、デボラか、久しぶりだ。しかし帰ってくるなら連絡ぐらいしなさい。商人に頼めば連絡を届けてくれるだろうに」
「あら、デボラお帰りなさい」
「ただいま」
「リュカ君も良く来てくれた。おそらくデボラに無理やり連れて来られたのだと思うが、歓迎するよ」
「ふん、違うわよパパ。今日はリュカがパパに用があるからパパに会いに来たのよ」
と、なぜか勝ち誇った笑みを浮かべ、ルドマンに言うデボラ。
「む、そうなのか。何かね？リュカ君？」
こういうのは緊張するなぁ。前の世界では結婚なんて全く考えていなかったからな。
魔物との戦いよりも緊張するかも。何度もあることじゃないからきっと慣れることなんてないしな。
ふぅ～……よし。
「デボラさんと婚約しました。それで結婚式の日取りなどを伝えに来ました」

「……は？すまない。よく聞こえなかったようだ。もう一度言ってもらえるかね？」

「デボラさんと婚約しました。それで結婚式の日取りなどを伝えに来ました」

「それは、本当の事なんだね？冗談ではなく？」

「はい」

「デボラにそう言わされている、なんてこともないのだね？」

「俺の意思です。デボラさんには、いつからか好意を抱いてまして、いろいろあってポロポーズしました」

「は、はははははは、あのデボラが！あのデボラが！結婚！リュカ君！良くやってくれた！感謝するよ！」

「あらあら、まあまあ」

ルドマンがものすごく大げさだ。

ゲームでもこんな感じだったが、一体デボラはどんな風にこの町で過ごしていたんだ？

「まったく、大げさね。私ほどの美貌ならリュカぐらいの男メロメロになるに決まっているじゃない」

と、俺を何かを含んだ眼で見るデボラ。

…もしかして、オラクルベリーで会ったときの事を示唆しているんだろうか？確かに俺は暴走していたとき、真っ先にデボラに声を

かけたが……もしかしてデボラは最初から俺がデボラに好意を抱いていたと思っていたのだろうか？そしてそれがなんだかんだでデボラに俺を意識させる原因だったのかもしれない。
　デボラに聞いても答えてくれないのだろうな。聞けるとしたら初夜の時とかくらいかなぁ。

「それで、式は何時なのかね？いや私も費用を出して大々的に行うのもいいな」

「それなのですが、実は俺は「ああ、リュカ君がグランバニアの王族だということは知っているよ。パパスさんから聞いたからね。いや、今はグランバニア国王様か」

「やっぱり知ってたのね」

「さすがにパパスさんの強さは知っていたが、それだけではあの船は貸さないさ。パパスさんの身分とある程度事情を聞いて、いろいろ契約を結ぶに値すると判断したからこそだよ（まあ、デボラを一緒に連れていかせたのは、もしかしたらと期待したのだが本当に婚約するとは、嬉しい限りだ）」

「そのことなんですが、なるべく早くとは言っていましたが、ルドマンさんにも予定があるはずだということでこれといった日は決まっていません。もしよろしければグランバニアに来ていただいて相談していただけないかと考えています」

　まあ、今は光の教団の脅威がグランバニアから去ったから何をするにも余裕があるからな。
　デモンズタワーも破壊されつつあるし。
　魔物の脅威もグランバニアの兵士が強くて安全だからな。軍事力

Ｎｏ１は伊達じゃない。

「むぅ、私もそうしたいところなのだが……実は、フローラのことでな」

ああ、もしかしたら、

「実はフローラの婿になる男は私が課した試練を達成したものにしようと思っていたのだ。少し前に婿探しを発表し、今試練への参加を募っているところなのだ」

「あきれた。そりゃ今の時代フローラみたいな娘は強い男じゃないと幸せに出来ないかもしれないけど、フローラの意思を無視してるじゃない」

「フローラにはちゃんと確認したのだ、そしてフローラもそれで言いと言ってくれたのだ」

「私はフローラと話してくるわ」

そう言ってデボラは部屋を出てどこかに行ってしまった。おそらくフローラの部屋にでも行ったのだろう。

「結婚するというのに、デボラは変わらんな。リュカ君には迷惑をかける」

「確かにわがままですけど、なんだかんだ言って優しいところがあるし、一緒にいて退屈しませんから」

それに顔とか体つきとかもかなりタイプだし。

「そういってもらえると助かるなぁ」

「もうあなたったら、デボラも女の子なんですよ」

「しかしなぁ……おっと、それで結婚式の話だが、フローラの婿探しが終わったらにして欲しいのだ。それに私も費用を投じて結婚式を大々的に行いたいのだ。グランバニアへの連絡はお抱えの商人達にさせるから、君達はしばらくこの屋敷で過ごせばいい。私も君がしてきた冒険に興味があるのでね」

「まぁ、あなたったら」

しかし、奥さん。この母にして娘（フローラ）ありといった感じだ。いかにもお嬢様な淑やかさで天然っぽいところがある。

なんで、一緒にいたデボラがああで、フローラはああなったのだろうか？謎だ……。

「わかりました。では厄介になります」

「厄介などと、私は君のことが気に入っているんだよ。なんせあのデボラと結婚しようという勇気があるのだからな」

本当にデボラはこの屋敷にいた頃何をしたんだろうか？

19　幕間〜フローラ〜

「フローラ！久しぶり」

慌ただしく扉を開けてそう言ったのは私の姉、デボラだった。

「姉さん？お久しぶりです。戻ってらしたのですか？」

姉さんはお父様の話だと、リュカ様と一緒にグランバニアへ冒険しにいったのだという。

私はそれを聞いたとき、羨ましく思ってしまった。なぜなら私はリュカ様に一目惚れしたのだと思うから。

初めて修道院に来たあの方を見たとき、昔、修道院へ行くため船に乗ったときの事を思い出した。そして、胸がどきどきした。その時私はこれが恋なのだと思った。

だからあの時はシスターに無理を言って、なんとかあの方と話すことが出来たが、それもほんの少しの時間だけだった。

結局この屋敷に戻ってきたとき、あの方と私は縁がなかったのかと消沈し、それゆえに父の婿探しも承諾した。

私が知っている男性は父様と子供のころ遊んだ事があったアンディぐらいだったので、リュカ様のことは世間知らずゆえに一目惚れなんてしまったのだ、と言い訳をしていた。

そして、新しい私の婿となる人はどんな人だろう？と考えながら、屋敷で過ごしてきた。

姉さんは家を父公認で出て、外の世界を見ているはずなのだが、なぜ戻ってきたのだろうか？

「ええ、実は……リュカと結婚することになったわ。それでパパに報告しに来たの。リュカと一緒にね」

「え……？」

ねえさんはなにをいっているのだろう？

「ねぇフローラ、あんたリュカのこと好きだったでしょ？もし今のリュカと会って、やっぱり好きだって私にはっきり言ってくれたら、婿探しを何とかしてあげるし、仕方ないけど側室なら認めてあげてもいいわ。私がいろいろしたせいで、あんたには本当に苦労させたからね。なんとも思ってないならそれでいいんだけど、まあ婿探しだけでも何とかしてあげるわよ」

リュカさんに会える？

側室？

？？？

「そうね、まずは私が知ってるリュカの事を話してあげる。本人に会うのが一番だろうけどパパと話してるだろうから、それは後にしましょう」

姉さんの話を聞き終わった私はあることを決意した。

姉さんがやんちゃだったので、お父様が私はおしとやかになるように育ててくれたことは理解している。でも、私だって、夢を見たい。

結婚するなら、自分の好いた殿方がいい。

だから、淡い思い出に終わったリュカ様に会って、恋を知りたいと思った。
たとえ、私がリュカ様に来いをしていなかったとしても。婿探しは終わりにしたい。
姉さんのことがあって、私は婿探しを認めたが、姉さんが結婚するというのなら、望まぬ結婚はしたくない。
父様だってわかってくれるだろう。塔様は強引で人の話を利かないところもあるが、私達への愛情は本当のものだ。

……そういえば、初めて父様にわがままを言うことになる。
ちょっと、ドキドキする。

１９　幕間～フローラ～（後書き）

今回は幕間だけです。
明日からはまた、１話更新に戻ります。

20

ルドマンにグランバニアの現状のことをある程度は成した後、部屋の用意が出来たので、メイドさんに案内されて部屋に来た。
部屋の中はグランバニアよりも豪華と言うか、高級な部屋だった。
調度品もグランバニアとは違い、高級感、悪く言えばけばけばしいものが多い。
グランバニアは山に囲まれ、魔物も強いから、実用的なものが好まれる。しかしサラボナは商人の町なので、実用的ものより美観より、芸術的な価値があるものが好まれるのだろう。
文化の違いだ。ラインハットはその中間ってところだ。

案内してくれたメイドさんは『御用の際は部屋の中にある呼び鈴を鳴らしてください』と言って、そのままどこかに移動していった。
メイドさんが出て行った後、俺は豪華な部屋を一通り調べてみた。

ベッドはグランバニアで俺が使っていたもの物とそう変わらない。ふかふかだ。
鏡などは無駄に装飾がついている。鏡自体はピカピカである。
窓はガラスで、窓を開けると中庭が一望できる。
中庭には噴水と奥さんが世話をしているバラ園？がある。

一見無駄なほどに豪華な感じがするが、中庭はゆったりした空間だし、廊下にも等間隔で花が活けてあったりと心地よさも追求されている。
ルドマン氏らしい感じがする。
世界で有数の商人だが、貧乏人だろうが冒険者だろうが気に入った人は目をかけてやり、援助したりする。そんな気のいいところがある反面、人の話を聞かないというか物事を強引に進めるところが

ある。
　また、商人になる前はじつは冒険者だったりと、要はハチャメチャな人だ。だから屋敷も成金みたいな感じがしたかと思えば、心地よい落ち着いた雰囲気があったりするのだろう。
　まさにルドマンの屋敷だ。

「リュカ、入るわよ」

　屋敷について考えていたら、デボラとフローラが入ってきた。
　フローラは前に会ったときよりも、2年ほど前よりもずっと大人っぽくなって、美少女から美女へと変化していた。何より小柄なのに、けっこう一部が大きいところがいい。おっぱい。
　デボラと言う婚約者が出来たが、ついつい眼がある部分にいってしまうのは、男の性である。だからしょうがないのである。おっぱい。

「お久しぶりです、リュカ様」

「久しぶりフローラ。元気だった？」

「はい。リュカ様たちのおかげで修道院も安全になりました。そのおかげで何事もなく修道院での教育が終わりましたわ」

『リーン』

　音がしたほうを向くとデボラが呼び鈴を鳴らしていた。
　どうやらマジックアイテムみたいなもの（ラーの鏡とか、破邪の剣のような効果があるアイテム）の呼び鈴で、おそらくこの屋敷のメイドさんや執事達のいる部屋に音が聞こえるようになっているのだろう。

ほどなくしてメイドさんがやってきた。

「御用でしょうか？」

「お茶とお茶菓子を持ってきて。３人分」

「かしこまりました」

デボラのことに慣れているメイドさんなのか、教育がしっかりしていたのか、特に変な対応をせず、メイドさんは部屋を出て行った。

「実はフローラのことなんだけど、ちょっと相談があるのよ」

「もしかして、婿探しの事か？」

「そうよ」

「その、姉さんのこともありましたし、お父様がどうしても言うので、承諾しましたけど、姉さんが結婚することになったので、出来れば私も自分が好きになった方と添い遂げたいと強く思いましたの」

「だから、あんたに婿探しに参加して、試練を乗り越えてもらいたいのよ。それならパパも他の参加者とフローラを結婚させないし、あんたには私がいるからフローラを自由にしてあげられるわ」

「どうか、お願いします」

実戦訓練にちょうどいいし、引き受けるか。

魔法のほうはしばらくは無茶できないから、今は剣術と魔法剣を

中心に訓練している。
ここらの魔物はグランバニアの魔物よりも弱いが魔法なしで戦うとそれなりに手ごたえがある。
ちなみに俺の今のレベルは３２、デボラが３３だ。
半年におよぶ療養とリハビリ生活のときにデボラにレベルを追い抜かれた。
魔法なしで戦ったら、デボラとは3対7ぐらいで俺が不利になる。それくらいデボラは強くなった。ゲームと違い、速いと攻撃があたらないし、戦闘を有利に進められる。デボラは速さを活かしたスタイルだが、さらに魔法拳で威力の高い一撃を連撃出来るため、近づかれたらよほど耐久力がある奴じゃないと耐えられない。
俺は接近戦は万能型だからある程度の実力ならそれぞれの弱点をついて戦えば有利に戦闘を進めれたが、パパスのような圧倒的な実力と才はないため、自分のスタイルを特化していったデボラには勝てなくなってきた、ということだろう。

あの時、プロポーズしたとき言っていた通り、戦闘でもデボラを頼ることも多くなった。
確かに俺は呪文チートで強いが、それでも一人の力ではこの世界から魔物の脅威をなくすことはできない。俺は中の人知識で未来を知って一人行動してきたが、これからは信頼できる人達の力を利用すれば（頼れば）いい。
何時からか、俺は未来を知っているから、俺じゃないと魔物の脅威を打ち払えないと考えていくようになってしまったようだ。
それはこの世界に慣れた証拠でもあるのだが、初志を思い出し、デボラやパパス、グランバニア、ラインハットの人々の力で光の教団と魔界の魔物に対抗すればいいのだ。
なにも俺一人貧乏くじを引くことはない。余裕をもって行動しよう。

大幅に話が逸れてしまったが、婿探しには参加することにする。

「わかった。こっちもちょうどいい訓練になりそうだしな」

「ま、断ったら婚約破棄するわよって脅したけどね」

「姉さんったら、もう」

「デボラらしいな」

しかし、フローラの服、肩が全部露出してるし、ドレスみたいでフローラの雰囲気も合わさって清楚な感じだが、デボラ以上に色気を感じるかもしれない。身体のラインがわかりやすいし。

デボラよりもかなり背が低いのにかかわらず胸はデボラ並だ。おっぱい。

ついつい視線が釘付けにされて

「ちょ、いたいいたい！」

「ある程度なら許すけど、あんまり調子乗ってたら、〆るわよ」

どうやら、デボラにフローラを邪な眼で見てしかもあらぬことを考えていたことがばれたようだった。

頬を思いっきりつねられた。

あまりに痛いのでホイミで直しておく。

「う、悪かった。ホイミ」

デボラは、他の女性に眼がいくぐらいなら普段は怒らない。

俺の異性の身体の好みのタイプがもろにデボラだと確信（真実）

しているからだ。
そして俺も、昔なら縁がなかったとか言って簡単にあきらめられたが、今はデボラをあきらめることなんて考えられない。
たとえ、普段はツン9で、それこそ俺が極限に弱っているときとか意外は滅多にデレないとしても。
これが惚れた弱み、なのかな……？

「お二人とも、本当に仲が良いですわね」

すこしあきれたようなそれでいて羨ましそうな複雑な表情でフローラは言った。

『コンコン』

「お茶をお持ちしました」

「入っていいわよ」

メイドさんが部屋に入ってきて。これまた高そうな、昔ビアンカにプレゼントしたような銀製ではなく、高級そうな陶磁器のポットからカップにお茶を入れた。ちなみに紅茶しかこの世界には存在していない。
グランバニアで飲んだお茶にも負けない匂いだ。

「では、失礼いたします」

メイドさんが出ていった後、俺達は歓談を楽しんだ。

ちなみにフローラはかなりの天然だった。
デボラですらいつものツンが通常ではいられないほどだった。
この姉妹はこれで相性がとてもいいのだろう。

21

「そうか、リュカ君も参加してくれるのか。いやぁ、これで試練を乗り越えてくれる男が1人はいることになるな。いや、最近の冒険者はあまり危険を犯さない奴らが多いのでね、途中であきらめるか、魔物にやられるかで全員失格するかもしれないと思っていたんだよ」

俺が、デボラと結婚するのだから、フローラの婿になるために試練を受けるように、同じように試練を受けたい、とルドマンに言うと、ルドマンは笑いながら了承した。

っていうか、誰も試練を越えられないようならこんなことするなよ、と言いたいが、おそらく試練を越える奴がでるか、フローラに好きな男ができるまで、毎年続けるつもりなのだろうな。

まあ、今年で終わることになるのだが。

「これなら間違いなく盛り上がるよ。最近は光の教団のせいで冒険者も減ってしまったし、活気がなくなっている。ラインハット地方やグランバニアのような王が兵団を持っているところはよいのだが、このあたりは商人が隠れて光の教団に協力している。そのため治安が悪くなっていっているのだよ。そんな時だからフローラの婿探しをしようと思ったのだ。これならこの時代でフローラを幸せにしてやれる男が見つかるし、活気が出るだろうと思ってな」

なるほど、ただの思い付きじゃなかったのか。

確かにこの辺りは商人たちが権力を握っていて、ラインハットとかグランバニアより活気があるが、その分、王という支配者がいない。そのため光の教団に隠れて協力している奴がいるのだろう。

利益のためならそれこそ人身売買もする。そんな奴らがいる。

ルドマンがこちら側だからこの地方はまだ何とかなっているのか

も知れないな。
……もしかしたら、この婿探し、魔物の妨害もありうるな。
人に化けた魔物がフローラの婿になり、ルドマンを殺し、商会を支配する。
考えれば考えるほどありうる気がしてきた。

「まだ婿探しまでは日にちがあるから、商人の町、サラボナを楽しんでいってくれ」

デボラと一緒にどこかに行くかなぁ？
装備はグランバニアのものを使っているから特に新調する必要ないし、まあ観光でもするか。

「はい。デボラと一緒に観光でもしてきます」

「うむ。光の教団の影響があるとはいえ、他の町よりも活気があるはずだ。ぜひいろいろ見ていってくれ」

ルドマンの屋敷に着いた日の次の日の朝。
グランバニアで毎日行っていたように、デボラと訓練をする。
「ふん！せい！」
デボラがものすごい速さで踏み込んで間合いに入ってきて、ジャブを繰り出す。
「させるか！」
バックステップで下がって、刃を潰した剣をカウンター気味に払う。
「甘いわよ！」
しかし、デボラはそれを装備しているミスリルの手甲でパーリングし、同時にさらに踏み込んで、クロスレンジに入ってきた。
「はぁっ！」
同時に右ストレートで俺の腹を殴打しようとする。
「く！」
俺は何とか剣の刃で防御するが、そこからデボラが連撃を開始した。
左右へ高速で動き回り、同時に攻撃してくる。
「防御してるだけじゃ勝てないわよ！」

デボラはちょこまかと動き、俺に狙いをつけさせない。
勘で攻撃しようにも、決定的な隙を作ってしまうため、分が悪すぎる。
…そうだ、これなら……。
「え！？」
「隙あり！」
俺は剣を捨てると同時に、デボラへ接近し、カウンターを入れた。
攻撃が顔に当たる寸前でとめる。
「……」
「……」
「今日は私の負けね。まさか剣を捨てるとは思わなかったわ」
「剣で攻撃と防御が出来るけど、俺の最大の武器は魔法だからな。あれなら避けられても、その後魔法を使えるし、ダメージが入ればその隙に剣を拾うこともできるし」
「なるほど、でも私には通用しなくなったわよ」
「まあ、もしものときのためぐらいに覚えておけばいいことだから。奇手だしな」
「そうね、ふぅ、じゃあこれで今日の訓練は終わりね。汗かいたしお風呂入りたいわ」

デボラは一日2回ほど、訓練した後と、夜に風呂に入る。
さらにメイドにマッサージをさせている。
なんだかんだでセレブだ。
曰く、『私の美しさが失われるのは、罪だから』らしい。
ちなみにフローラも似たようなことをしている。これはルドマンの教育、というか金を持っている貴族の子女はこんなものだ。美人なら嫁や婿の貰い手があるしな。
しかし、普通の庶民な生活を送っていたにもかかわらず、あのスタイルに美しさを持っていたビアンカは一体何なのだろうか？
ああ、そういえばビアンカにずっと会っていないな。
結婚するんだし、式に出てもらいたいから、今度会いに行こう。
きっと美人になってるんだろうなぁ……やべ、ちょっと楽しみだ。

「……まあ、いいわ」

ルドマンの屋敷がある高級住宅街から馬車で移動し、市場へとやってきた。
ゲームではしょぼい町だったが、この世界ではラインハット、グランバニアの市場とは比べ物にならない規模だ。

オラクルベリーは昼もにぎわっていたが、あそこは夜の町こそが本領だ。
純粋に商売の町であるサラボナは、ものすごい人だかりでにぎわっている。

「すごいな。どれだけの人が商売しているんだろう？」

「さあ、興味ないから知らないわ」

「こんなに人が……すごいですわ……」

デボラは相変わらず、興味がないものには見向きもしない。
フローラは箱入り娘だけあって珍しいのか、きょりょきょろといろいろなものを見ている。
この姉妹は仲が悪そうに見えて、仲が良いのか、俺がデボラと市場を見てみようと誘ったら、『フローラも連れて行くわ』とデボラが言い、こうして三人で市場に来たのである。
護衛？俺とデボラがいるのに町の中で護衛など必要ない。

「何か珍しいものがないかいろいろ覗いてみよう」

「ここらへんは野菜とかを売ってるみたいだから、名産品とか、装飾品や武器、防具を扱ってる店はもっと先ね」

「まるで人がアリのようですわ」

「「えっ？」」

「いろいろ買ったわねぇ」

「エルフの飲み薬とか、特効薬とか万能薬とか売ってたからなぁ」

各種薬草と魔法を元に作られる特効薬や万能薬、ゲームだと錬金釜で作るが、この世界でも同じようにして作る。ただし、錬金釜を使用しなくても、普通に調合すれば薬草以上の薬にはなる。魔法をかけることで飛躍的に効果を高めることが出来るらしい。

この錬金釜を使用する魔法は教会の結界とは違って魔法の才能だある人間は誰でも覚えられるが、既得権益なので、錬金術師以外には知識を流出しないようにされている。

サラボナの町の商人が、大量に材料を用意し、大きな錬金釜で大量生産しているらしい。

いろいろ見て回ったが、単価はやや安いが大量に買っても値引きなしの店や、単価は高いが大量に買うと値引きしてもらえる店などがあった。

今回は大量に買うことで安く仕入れることが出来た。

「リュカ様、ありがとうございます。私、殿方からプレゼントをもらったのは初めてです」

フローラがものめずらしく見ていたのは、各地の名産品だった。

ゲームでは数がそれほどではないが、この世界だといろいろな名産品がある。山奥にある地図に載っていない小さな村とか、森の中にある村などで作られている木彫りとか、織物とかがあった。

その中になぜかオラクルベリーのオラクル屋（珍しいものを売っている店）の暖簾があった。

フローラが見ていた商品の中で一番反応していたので、買ってあげた。値段は７５００ゴールドだった。

天然のフローラはなぜか暖簾を見てきゃいきゃいと喜んでいた。

「フローラって、以外に変な趣味よね……」

「天然だな……」

思った以上に活気があるサラボナの町の市場を楽しみ、俺達は屋敷に戻った。

22

「あら？あれは……」

屋敷の門の前で馬車から降りた俺達は、庭で奥さんが誰かと話している姿を見た。

金髪の美形だけど頼りなさそうな男だ。

「アンディですわ」

「アンディ？ああ、あのヘタレ」

ヘタレって、酷いな。

まあ、確かにヘタレと言うか、頼りなさそうだ。

デールも似たような容姿だが、王の風格と言うかカリスマがあるし、レベルも最低限身を守れるくらいにはあった。だがあの金髪、アンディはなんというか、ヘタレって印象を受けてしまう。

「私が昔、修道院に預けられる前に遊んでいた人ですわ。こちらに戻っていてから、たまにお会いしますの。ご両親が楽士でお父様のお気に入りなんですのよ」

「一応、その後も私の遊び相手としてよく屋敷に呼ばれてたけど、ヘタレだから修行に付き合ってくれなかったのよねぇ。だから昔遊んだ奴って感じね」

あ～もしかしたらバタフライ効果でデボラにすら構ってもらえなかったのかアンディ。しかもフローラの印象もゲームよりも悪そう

だし。

「あら、リュカさん。お帰りなさい。デボラ、フローラも楽しんでこれた？」

「はい。お母様」

「まあまあね」

今のデボラのまあまあは、かなり楽しかったって事だ。

「それは良かったわ、あ、こちらリュカさん。デボラの婚約者なのよ」

「！？あの、デボラさんの、ですか……」

「そう、こちらはアンディ君。ご両親がサラボナの楽士で、あの人のお気に入りなの。それで小さいときから屋敷に来ていたのよ。デボラとフローラの遊び相手になってもらっていたのよ」

「久しぶりね」

「ひ、ひさしぶりです」

アンディがデボラにめちゃくちゃびびってるんだが、一体何があったんだろうか？

ツンに慣れていないとデボラには心を折られるかもしれないからなぁ、もしかしたらアンディの初恋が木っ端微塵に砕け散ったとかありそうだ。

っていうかそんなに会ってもいないフローラよりも、デボラのほうに恋心抱くだろ。幼馴染的に考えて。まあ、ヘタレじゃデボラの相手はきついうなったんだろうなぁ…。

「こんにちは」

「ふ、フローラさん。こんにちは」

ああ、明らかに挙動ってるし、アンディは絶対フローラのこと好きだな。デボラがああだったからお淑やかな女性がタイプになってしまったのかもしれないな。

「そういえば、あの人に聞きましたわ。リュカさんも婿探しに参加するんですって？」

「娘さんと結ばれるための試練だと思ってますから、デボラと一緒になるために必要だと俺が思ったんです」

「まあ、私の夫になるんだから当然よね」

本当はフローラの婿探しを辞めさせるためなんだけど。

「リュカさんなら試練も大丈夫ですわ。すごくお強いんですよ」

「まあ、強いのは認めてるわ。それに身分もグランバニアの王子だしね。私と結婚できる条件は満たしてるわ」

「え？姉さん？それは初耳ですわ？」

「言ってなかった？」

「はい……でも、グランバニアの王子様ですか…リュカ様ほどの方ならそれも納得ですわ」

「あの人も『できれば婿に欲しかった』と言ってましたわ」

「……」

アンディから嫉妬の気をビンビンに感じる。

確かに今の俺と比較されたら、パパスぐらいしか俺よりいい男と言えないからなぁ。

無駄に人を貶めるのは好きじゃないし、ここらでお開きにするか。

「とりあえず、荷物を片付けないか？」

「そうね、お茶でも飲んでゆっくりしたいわ」

「楽しかったですけれど疲れましたわね」

「あらあら、それじゃあ、後で中庭でお茶でも飲みましょう。みんなでお話したいわ。アンディ君もあの人につき合わせたうえに私が長く引き止めちゃってごめんなさいね」

「いえ、いろいろお話できて楽しかったです」

アンディはそのまま屋敷を出て行ていった。

「アンディ君の家はすぐ近くなのよ。あの人がいつでも呼び出せるようにって、使用人達用の住宅街に家を建てて住まわせてるの」

アンディの両親はルドマンのお気に入りってわけか。

「じゃあ、荷物を片付けたら中庭にいらしてね」

メイドや執事達に荷物を運んでもらい、俺達は中庭に集まった。

そして、奥さんを交えて、いろいろなことを話した。

俺が昔住んでいたサンタローズ、アルカパの町のこと。

フローラ、デボラと実はずっと小さなときに港で会ったことがあること。

フローラ、デボラとの出会い（デボラとの出会いはぼかして話した）

フローラの修道院での生活。

俺とデボラの冒険、グランバニアまでの道のり、グランバニアでの戦い、日常生活。

などなど、本当にいろいろなことを話した。

話に夢中になっていたのか。気がつけば夕方になっており、解散した。

その後の夕食時に奥さんがルドマンにお茶会のことを話したら、『どうして私も誘ってくれなかったんだ！？』とごねた。

奥さんが苦笑しながら、『次にお茶会を開くときは絶対にあなたも誘うわ』と言ったのだが、明日は急ぐ仕事がないので、明日もお茶会を開くとルドマンが強引にお茶会を開くことにしてしまった。

まあ、なんだかんだでそのお茶会も楽しかった。
ルドマンと奥さんの馴れ初めについて聞けたし、かなり有力な情報についても聞けた。
ルラフェンと言う町に失われた魔法を研究している魔法使いがいるらしい、とのことだ。
この町には主に錬金術師がアイテムなどの作成を研究し続けているが、魔法などを研究している人も多数いる。それは各国でも同じことだ。
しかし、アイテムは一度作ってしまえば誰でも使えるが、魔法は習得しなければならない。だから魔法の研究はどちらかと言えば個人が行なっている。
ルラフェンには失われた魔法については世界一だと言える研究者がいるらしい。
これはゲームでルーラ、パルプンテを復活させた老人のことだろう。
婿探しは世界中から人を集めたいので、開始までは半年近くの時間があるとの事なので、ルラフェンに行く事に決めた。
荷物をあの袋に入れて、人しか運ばない馬車で移動することにより、早くつくことができる。
幸いゲームと違って結界があるため、ここら辺ではあまり魔物が出ないらしい。もっとも、森や山に入ったり道を逸れれば途端に魔物の出現率が跳ね上がるが。

あのルーラが使えるかもしれないと思い、俺はすぐにルラフェンに出発しようとし、思い立ったがすぐに行動するルドマンがそれに共感し、外行きの馬車を手配してくれた。

そして俺とデボラはルラフェンへと出発した。
デボラ曰く、『私がついていくのは当然のことでしょ』ということらしい。
フローラもついてきたそうだったが、さすがにそれは無理だった。

十日ほどでルラフェンに着いた。
さて、ルーラが使えるようになればいいのだが……。

23

ルラフェン町はゲーム同様に道が複雑で迷いやすかった。
ゲームと違い通行人などはそれなりにいるので、その人たちに道を聞きながら、町のはずれに住んでいる魔法を研究している老人の家にたどり着いた。

「はぁ、変な町ね。こんな複雑な道、二度と歩きたくないわ」

「同感、初めてこの町に来た人は絶対に迷うだろうな」

なんか理由があると思うが、なぜこんな作りにしたのだろうか？謎だ。
まあいい、用事を済まそう。

『コンコン』

扉を強く叩く。

「誰じゃ？」

すると、やせ細っている老人が出てきた。

「俺は冒険者で魔法使いです。合体魔法の研究を行なっていて、実戦でも使用したことがあります。あなたが失われた魔法の研究を行なっていると聞き、俺も協力させてもらえないかと思い、訪ねました」

「ほう！ほう！合体魔法！なるほど、まずは合体魔法についていろ

いろ聞かせてもらえんかの」

「はい、ぜひ」

「なるほど、合体魔法は既存の魔法を合体させることにより、複数の属性で同時に攻撃できたり、範囲を広げたり出来るんじゃな。それぞれの攻撃魔法には相性があり、相性が悪い属性は合体できない、か。ふむ、なるほどなるほど……」

「以上になります」

一通り合体魔法の理論について老人に話した。

「どうやら分野は違うが魔法についてよく研究しているようじゃな。わしの研究ににぜひ協力して欲しい…とは言っても理論は出来ておるんじゃ、おっと、その前に自己紹介じゃな。わしはベネットという。失われた魔法の研究をしておるただの変人じゃよ」

「俺はリュカです」

「私はデボラよ。ねえ、その失われた魔法は誰でも使えるようになるのかしら？」

「ふむ、わしが今研究しておる失われた魔法はルーラと言う。ルーラは一時的に旅の扉という空間を歪曲させ、瞬間移動が出来る魔法じゃ。旅の扉については知っておるな？」

「古代の遺産で、離れた場所と場所を行き来できる装置ですよね？」

「そうじゃ、これは固定された装置間を行き来できるようが、ルーラは魔法で場所を記録しておくことにより、いつでも記録した場所にいけるようになる。記録と旅の扉を開くことすべてを合わせてルーラという魔法になる。これは属性で言うなら次元魔法になる。じゃから理論はわかっても適正がなければ習得はできんじゃろうな」

ゲームでも使えたんだから俺も適正があるはずだ。魔法については上位変換されてるだけだからな。代わりに魔物使いの才能がなくなっているが。

「じゃあ、私は覚えられないってこともあるのね。他に使える魔法ってないの？」

相変わらずデボラは俺様系だ。

「ふむ、ニフラムという、対ゾンビの魔法ならある。これは女性でなければ使えない魔法で、研究資金を稼ぐため教会に教えようと思っておった魔法じゃ。効果はゾンビ化を神の祝福で解いてしまう、それによってゾンビは死骸に戻り、やがてゴールドに変わってしまうんじゃ」

ニフラムがなんかすごく強化されている気がする。デモンズタワーでニフラムがあったら楽勝だったのにな。

「それ、教えなさいよ」

「ふむ、もしルーラを完成させて、二人のうちどちらかが使えたら教えてやってもよいぞ」

「わかったわ。リュカならきっと覚えられるわ。私がニフラムを教えてもえらるんだから、絶対覚えなさいよ」

「わかったよ」

「ふむ、ではルーラについて話そう。実はちょうど数日前のことじゃが理論は完成したのじゃ。しかし、じゃ。この魔法は適正があって、理論を覚えても使えん。さっき言った場所の記録は自らの身体に記録するのじゃが、その記録はすぐに消えてしまんじゃ」

なるほど、記憶からとか一度訪れたところじゃないのか。記録だから媒体が必要でそれを身体にするのか。魔法の効果なんて永続的には続かないからな。いずれ消えるのは当然か。

「しかし、特殊な薬を飲んで、魔法をかけることによってルーラの記録を永続的にすることが出来るのじゃ。そのためには材料が必要なんじゃが、二人にはその材料を取ってきて欲しいんじゃ」

そこはゲーム通りか。確かなんとか草だったか？

「ルラムーン草。ここから大きな滝がある山を超えて西へ行き、その森の中で満月の際にのみ光っている草がある。それがルラムーン

草じゃ。文献を調べたのでおそらくはあるはずじゃが、もしどれだけ探してもない場合は、別の方法を探すことになるかの」

「わかりました。そのルラムーン草を探してきます」

なければ最悪ルーラは記録が消える前に記録するとか、短距離を移動することに使用すればいい。

「ふむ、頼んだぞ」

と言ううワケでルラムーン草の探索だ。

これが成功してルーラを覚えることが出来たら、移動が楽になる。移動は時間が取られるから、その空いた時間で修行したり、各地を探索したりすればかなり有利になる。

絶に覚えないとな。

なんて、意気込んだが、あっさりとルラムーン草は見つかった。
馬車を使って、平地を移動し、出てくる魔物は瞬殺。満月を待って森の中に入ったら、レミーラで明かりをつけ、探索。すぐに見つかった。
往復しても3ヶ月も経たなかった気がする。
ゲームと違って一晩で見つかるなんてことはないし、ベネット爺さんの言では絶滅してる可能性もあると思っていたが、　あまりにあっさり見つかったので、なんだか気が抜けた気がする。

そして、俺はルラフェンに戻り、ベネット爺さんにルーラの理論を教えてもらい、調合した薬を飲み、魔法をかけてもらった。
ちなみにルラムーン草はそれなりの量を採ってきたので、まだまだ残りがある。
そして今からルーラの使用実験を開始する。

「ふむ、これでルーラを使えるはずじゃ。家の表で記録を行い、町を出たら、ルーラの呪文を唱えてくれんかの」

「わかりました」

「私も一緒に移動できるんでしょ？私も行くわ」

「ふむ、数人程度なら移動できるはずじゃ。リュカ君は魔力が多いし、魔法の才があるから大丈夫じゃろ。では始めようかの」

まずはベネット爺さんの家の前で記録のルーラを使って、
次に町のを出て、

「ルーラ」

移動用のルーラを使う。
すると、俺とデボラの周りを明度の違う光が包み込み、気がつくとベネット爺さんの家の前にいた。
「ここ、爺さんの家よね…すごいわ、一瞬で移動するなんて。私も挑戦してみようかしら」
「おお！成功じゃ！成功したぞ！」
すげえ！
これがルーラか！
ほぼ一瞬で移動できるとかすごいぞ。
でも結構ＭＰを喰うな。ゲームだとはした消費ＭＰだったが、この世界だと今の俺のＭＰの２割ぐらい持っていったな。
「ふむ、特に体調に問題なさそうじゃの」
「ただ、結構魔力を喰いますよ。人よりもかなり多い魔力だと思ってますが、２割ほど使いました」
「次元魔法じゃからの、それは仕方ないことじゃな。なんせ一瞬で離れた場所へ移動できるんじゃからな」
実際に使ってみてわかったがルーラＳＵＧＥＥＥって感じだ。
この世界にきて移動は時間がかかることが当然って常識に慣れてしまったが、実際に瞬間移動が出来ると本当にすごいっていうか快適だ。
しかもこの魔法奇襲に使えるし、人との争いでもめちゃくちゃ有利に使えるぞ。
待てよ……もしかして、それが理由でルーラを使える人がいな

くなったのか？
聞いてみるか。
「ベネットさん。もしかしてルーラが使える人がいなくなった理由って」
「たぶんおぬしの推測しておることで合っておる」
「どういうこと？何の話？」
「ルーラは、あまりに便利すぎる。これを使える魔法使いはほんの一握りじゃろうが、それでも人と人の戦争で使えばめちゃくちゃ有利になるんじゃよ。かつて天空の勇者と呼ばれるものが魔界の王を倒してから、どれだけのときが経ったのかわからんが、今まで人と人の戦争もあった。おそらく、便利すぎるルーラを使える者はみな殺されたりしたんじゃろうな。ルーラの記録を永続的に続ける薬と魔法を使われたものは、子孫にも続くとあるし、おそらく、一族すべてが殺されたりしたんじゃろうな。まあ、それでも今も記録の処置をする必要がないものはおるじゃろが」
俺はグランバニアの王族だから、一族秘伝の魔法とかにすればいいか。
それなら流出しないし。
一応爺さんに話して、いや、いっそ爺さんをグランバニアに勧誘するか？それなら他にも失われた魔法を復活させてくれるかもしれないし、そうしてみよう。
「ふむぅ、まさかおぬしがグランバニアの王族、しかも次期国王とはのう……ふむ、勧誘の件は大丈夫じゃ。いろいろ文献が読めるし、更なる魔法の研究も出来るしの。後は……」

そう言って、ベネット爺さんは家の中からルラムーン草をすべて持ってきた。

「これは燃やすことにするかの。メラ」

すぐにルラムーン草は燃え尽きてしまった。

「これでルーラを習得するには手間がかかるようになった。さすがに争いの火種を残したくはないのでの。わしの研究は趣味が高じたものじゃから、別に発表したいわけでもないしの。それにおぬしが、グランバニアがスポンサーになってもらえるのならそれでいいしの」

「終わったの？、ならニフラムっていうのを教えなさいよ」

「うむ、では家の中で話そうか」

こうして、俺はルーラを、デボラはニフラムを使えるようになった。

これで移動が楽になるし、時間も出来る。

デモンズタワーのようなときでもデボラがいればニフラムで対処できるようになった。

着々と俺達は強くなっている。

23（後書き）

誤字脱字は時間が出来たらまとめて修正します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9450u/

ドラクエ?憑依もの

2011年8月7日19時19分発行